

エーリッヒ・カウルの日記

訳者

宗宮好和（監訳）

坂本宗秋・島崎富志子・田中瑛・

田中正延・中村孝子・本橋緑・渡邊邦美

（千葉県日独協会・ボトルシップ研究会）

目次

『エーリッヒ・カウルの日記』	1
詩「アルバムへの新年のことば」	2
誕生から海軍入隊まで	3
ヴィルヘルムスハーフェンから青島まで	9
青島から漢口へ、そして青島へ	17
青島の戦闘と敗北	24
東京俘虜収容所の時代	40
習志野俘虜収容所の時代	59
解放と帰国	100
思い出の品（右頁から）	107
注と解題	117
参考資料	134
1. カウルの両親とカウルとその妻マルガレータ	
2. 東京俘虜収容所（浅草本願寺）にて（1）	
3. 東京俘虜収容所（浅草本願寺）にて（2）	
4. 輸送船「パトリヰツィア」	
5. 砲艦「SMSヤーグアル」	
6. カウルがデザインした「紋章」	
7. 日本軍の青島進軍とドイツの青島要塞防御設備（地図）	
8. カウルの軌跡（地図）	
翻訳を終えて	
宗宮 好和	141

凡例

1. 本書は、『エーリッヒ・カウルの日記』（原題: „Tagebuch und meine Erlebnisse im Auslande Erich Kaul geschr. Tokio–Japan 1915“）（A5サイズ、250ページ）の全訳である。
2. 『エーリッヒ・カウルの日記』（習志野市所蔵）は、2019年9月3日、他のドイツ捕虜関係資料とともに習志野市指定有形文化財に指定された。
3. 翻訳の経緯については、「翻訳を終えて」（141ページ）を参照していただきたい。
4. 本書の日記本文中、（ ）内は著者エーリッヒ・カウルが記したものであり、[]内は訳者による注記・補足である。
5. 本文中の【注】は、117ページ以下の「注と解題」にリンクしており、「注」番号をクリックすると「注と解題」の当該の「注」にジャンプし、この「注」番号をクリックすると元のページに戻ります。

原題

Tagebuch
und
meine Erlebnisse im Auslande
Erich Kaul
geschr. Tokio–Japan 1915

日記および私の外国における諸体験

エーリッヒ・カウル

1915年日本の東京にて記す

**Jedem Tag ein kleines Glück
Ohne Sorge abgewinnen,
Jeden frohen Augenblick
In das goldene Netz zu spinnen
Heiterer Erinnerung.
Jede Stunde sich im Glanze
Reiner Gegenwart versenken,
Dennoch auf das schöne Ganze
Immerfort den Blick zu lenken –
Wer's vermöchte, bliebe ewig jung.**

一日一日に小さな幸福を
心やすらかに勝ち得ること
一つ一つの朗らかな瞬間を
明るく澄みわたる思い出の
黄金の網に織り込むこと

一時一時を純粋な現在の
輝きの中に没入させること
それでいてなお美しい全体へ
常にまなざしを向けること——
それができる者は永遠に若い [\[注1\]](#)

1891年3月3日

私はベルリンに近いフルステンヴァルデ [注2] で生まれた。両親は二人とも農家の出で、私を真正直な人間に育ててくれた。姉一人のほかにはきょうだいはいない [注3]。私は6歳になった1897年から1905年までフルステンヴァルデの男子国民学校に通った。慎重さと勤勉さによって私はすでに12歳でIbクラスに到達し、そこに2年間在籍した。14歳になると私はキューネ校長先生のIaクラスに進級した。1905年の復活祭のとき郷里の聖マリア聖堂教会で堅信礼^{けんしんれい}を受け、そして社会人の仲間入りをした。私がまだ学校に通っていた1904年、両親は店を6年前から経営していたのだが、他店との競合があまりにも激しいために、売り上げが伸びず閉店せざるをえなくなった。父は、当時、市の下水道施設が整備されたのを機にポンプ室の機械担当というよい職につくことができた。

1905年4月23日

私はフルステンヴァルデにあるフリードリヒ・デュンジングの機械工場で見習い修行に入った。私はすでに子供のときから機械工の仕事に就きたいという気持ちが大いにあったので、一生懸命仕事に打ち込み、あらゆる仕事をつねに満足のいくものに仕上げた。勤勉さと慎重さによって私は旋盤作業、特に機械製造の分野で十分な知識を習得した。川沿いの中規模な造船所もこの工場のものであったので造船の分野においても私は知見を得た。2年半の徒弟時代が過ぎたとき、工場長であり所有者であった人が病気になってまもなく突然亡くなってしまった。会社は引き続き操業したが、1年3ヵ月後には営業不振のため門戸を閉ざざるをえなくなった。こうした理由で私は徒弟時代が終了する3ヵ月前にはもう職人資格証明書を手に入っていた。私は徒弟時代に「シュトルツェ・シュライ式」の速記 [注4] の講習課程を修了していた。

1908年春

私はドイツ自転車連盟に個人競技者として入会した。熱烈なスポーツ好きだった私は2年の会員期間中に年間走行距離2,468キロメートルの記録でメダルを獲得し、145キロメートルの6時間耐久レースを5時間34分で走行して2つ目のメダルを獲得した。

1909年2月

職人資格証明書を手に入れたあと、私はあらゆる手を尽くしたが、フルステンヴァルデで仕事を見つけることができなかった。市外の会社に何通もの手紙で問い合わせても否定的な結果しか得られなかった。そこで私はよその土地で運を試そうと決心した。

1909年5月10日

ハンブルクへ行って仕事を探そう、場合によっては船乗りになろう、との意図をもってフルステンヴァルデを発った。ベルリンに4週間滞在してようやく仕事を見つけたので、私はベルリンにとどまることにして、ハンブルクへ行く計画をとりやめた。

1909年精霊降臨祭 [\[注5\]](#)

ベルリン近郊のテーゲルオルトにあるシュプレー・ハーフェル蒸気汽船運航会社「シュテルン」のボイラーマンの職について。私はここの生活がまったく気に入った。しかし、私は自分の専門をさらに研鑽けんさんしたいと思ったので、8月1日に職を辞した。その後2週間滞在する予定でフルステンヴァルデに向かった。

8月15日

親類のある人の仲介でベルリン近郊のテンペルホーフにあるフーゴー・ハルトウング社に職を得た。ここは大型蒸気洗淨機の専門工場である。

8月18日

私は時給45ペニヒでこの職に就いた。仕事に習熟してからは時給50ペニヒをもらった。景気が悪いため多くの人たちが解雇されねばならなかった。私も辞めなくてはならなかったが、すぐに親方の仲介でテンペルホーフにあるエルンスト・ガルベの製粉機製造会社に職を得た。

[?年] 5月5日

無職の状態に陥ることなく、私はすぐにこの会社に移った。しばらくは前の時給50ペニヒの賃金で働いていたが、1時間当たり5ペニヒの加給金を手に入れた。しかし、ここで味わった居心地のよい職場はまもなく終わりを迎えた。というのは、私はここの低い賃金ではこれ以上働くことができなかつたからである。このときも私はある同僚の取りなしでベルリンのコトブサー・ウーファー40にあるパウル・トマシェフスキー社に新しい職を得た。

?

このときも無職の状態に陥ることなく、私は新しい会社に移った。時給55ペニヒから始めてここでの私の給料は2年間の在職中に時給62.5ペニヒにあがった。ここの職に就いて私はベルリンを詳しく知る機会を十分に与えられた。というのは私はたいいの場合取り付け工

事に従事していたからである。大型蒸気洗淨機はこの会社の主力製品であった。ここでも仕事不足が私が解雇された理由であった。書面で応募して私はベルリン近郊のオーバー・シェーネヴァイデにあるノイエ・アウトモビール社 (N.A.G.) [注6] に新しい職を得た。

？

トマシェフスキー社の工場からN.A.G.の工場に移った。ここで私は自動車製造と航空機エンジン製造を基礎から学んだ。そもそも私はこうした分野に特別大きな関心を持っていた。この年の夏、私はヨハニスタールの飛行場でフランス人飛行士ペグー [注7] の天才的なわざの数々を目にした。

？年10月12日 [注8]

私は飛行船L2が地上に墜落したヨハニスタールでのツェッペリンの大事故を目撃した。二つの原因で列車の遅延があったため、私はノイケルン [注9] に到着するのが大変遅くなってしまった。飛行場に行った人たちの多くも何時間も駅で待つより歩いて帰るほうを選んだ。N.A.G.で働いているときに、よき友ブルーノ・フォン・エッレルンと知り合いになり、彼とたくさん面白いことを考え出したり、たくさん楽しい時間を過ごしたりした。ベルリンにいるあいだ私はずっとノイケルンのペチュケ家に下宿し、そこで居心地のよい一室を占有していた。一家はそもそも大変感じがよい愛すべき人たちであった。だから私は彼らが2度転居しても彼らのところに住み続けた。ペチュケ一家のところに下宿して1年ほどしたとき、ヴィリー・ヴェントが相部屋になり、彼は私の親友になった。ほとんど兄弟のような共同生活のなかで良いときも悪いときも二人で分かちあった。とりわけ面白かったのは一緒にやった夜のツアーと自転車レースだった。ベルリン最後の年の5月、私はノイケルンの演劇協会「エクセルシオール」の会員になり、最後にはその会計係 [注10] をつとめた。多くの楽しい時間をここで皆と分かちあった。

1913年4月

3回目の徴兵検査のあと帝国海軍に配属が決まった。

1913年12月15日

このため [演劇] 協会を退会した。

1913年12月24日

N.A.G.の職も辞し、下宿も引き払った。そして、召集される日までを過ごすためにフルステンヴァルデの両親のところに移った。この転居によってベルリン近郊のシェーネベルクの地区司令部からオーデル河畔のフランクフルト [注11] に登録変更しなければならなかった。

1914年 1月 6日

地区司令部から9日の夕方に司令部に出頭せよとの命令を受けた。

1914年 1月 9日

両親に心を込めた別れをして午後4時36分の汽車でフルステンヴァルデを發ち、5時18分にフランクフルトに着いた。3時間15分待った後、下士官に伴われて8時31分にフランクフルトを出發した。およそ12人の兵士で、この旅程はフルステンヴァルデ、ベルリン、ヴィッテンベルグを経てキール [注12] に向かうものであった。かなり気分の盛り上がらない行程だった。というのは、大変寒かったからである。

1914年 1月10日

午前11時にわれわれはキールで下車して駅前の広場に整列した。ここで1時間待った後、第1工機団の一等兵曹と下士官たちに導かれ一団となってヴィーク [注13] の兵營に向かった。兵營に着いたのは午後1時だった。駅でわれわれが立っていたところから私は初めてキール港の絵のように美しい光景を見た。ヴィークに着くとわれわれは体育館で分隊に分けられ、兵營の居室に案内された。私は第1小隊の第2分隊に配属され、第15兵營の居室49に宿營することになった。食器を受けとってからわれわれは兵營で初めての昼食をとった。しかもそれはこの日を祝うエンドウ豆のベーコン添えだった。3日後、事前に健康診断を受けてから制服を支給された。これで誰もが自分のすべき仕事ができる。というのは、多くの衣類を一つずつ体に合わせて手直ししなければならなかったし、すべての持ち物に布製の名札や認識番号を縫い付けなくてはならなかったからである。私の認識番号は「I.W.D.II A. 3657.1913」であった。続いてわれわれの歩兵訓練が行われた。それは教練、トゥルネン [ドイツ式器械体操]、徒手体操、4つの射撃演習であった。私の分隊長はレーム一等機関兵曹であった。2度目の健康診断で熱帯勤務適性検査を受けたのち、われわれは新しい分隊に分属された。私は在外小隊の第2分隊に入ることになり、分隊長はフランツ下士官であった。訓練期間中私はまるでポルテ教練担当曹長の従卒扱いだった [注14]。

1914年2月28日 [1月28日の書き間違いと思われる。]

われわれはレストラン「チボリ」で海軍に入って初めての皇帝誕生日を祝った。もちろん余興などというものは問題にならなかった。というのは、若い初年兵にはそれを言い出す機会はほとんどなかったからである。

1914年2月22日

体育館で宣誓式が行われた。軍旗への忠誠の誓いを行い、われわれの部隊長であるシュルツェ少佐殿が挨拶した後、工機団の海軍教会で礼拝が行われた。

1914年3月20日

ミシュケ少将殿とベガス大佐殿の前でわれわれの査閲が行われた。この査閲は視察と中隊教練と個別演習からなっていた。この査閲のあと、私がもうずいぶん前から切望していたことであったが、われわれは単独で外出することができ、古参兵と同じように休暇も得られた。帰省休暇をとりたいという希望は、春のパレードに参加しなければならなくなったために、はかなく消えてしまった。パレードが終わっても休暇はとれなかった。というのは上官の曹長からゴム会社での実習に私も参加することになっていると伝えられたからである。

1914年3月31日

服装検査を受けなければならなかった。そのあと、ハンブルク行きの準備を整えた。

1914年4月1日

朝3時に起こされた。1時間後、われわれ兵10名と下士官7名は必要最小限のものを用意して駅に向かった。5時30分頃われわれはキールを出発し、8時30分にハンブルク中央駅に到着した。われわれが逗留するホテル「ゲルマーニア」に寄って軽い朝食をとってから、このホテルから遠くないトラウン&ゼーネ社の工場を訪ねた。この実習中の作業は大変単純なもので毎日朝8時から11時30分までだった。われわれの食事はホテルで出た。しかも、うまかった。午後は翌日の朝まで自由だった。この機会を利用して私はハンブルクをもっと知ろうと思った。エルプトンネル、ビスマルク記念碑、ユングフェルンシュテーク、ブローム&フォース造船所、旅客船ファーターラント、エッペンドルフ病院を見物したあとザンクト・パウリとアルト・ハンブルク [\[注15\]](#) にも行ってみた。われわれの実習期間中にトラウン&ゼーネ社で従業員たちのパーティが開かれ、われわれも招待されて大いに楽しんだ。われわれの作業の査定が終わると、この実習は終了した。

1914年4月8日

午後5時頃ハンブルクを發ち、夜9時30分頃キールに到着した。

1914年4月9日

今日、点呼のときに私は東アジアにいる砲艦「SMSヤーグアル」[\[注16\]](#)に乗艦することになったと伝えられた。この機会に私は休暇を申請して認められた。しかし、残念ながら4日間だけだった。午後に帰省する準備を整えた。夕方6時1分にキールを發ち、リュューベック、ヴィッテンベルゲ、ベルリンを経由して行った。

1914年4月10日

朝6時に同郷人一人と数人の同僚たちとともにベルリン・レールター駅〔現ベルリン中央駅〕に到着した。7時20分にふたたびわれわれはフリードリヒ通り駅を出發して、8時に私は目的地フルステンヴァルデに着いた。両親と心のこもった挨拶をした後、翌日の午後までフルステンヴァルデに滞在した。

1914年4月11日

午後4時、私は親類や知人たちを訪問するためにベルリンに向かった。休暇が短いので、ベルリンには翌日の昼前までしか滞在できなかった。

1914年4月12日

11時30分の列車でベルリンのシュレーゲン駅を發ち、昼の12時30分にふたたびフルステンヴァルデに着いた。日曜日の午後、私は両親と姉や知人たちと一緒にシャルミュツェル湖までハイキングをした。

1914年4月13日

私の短い休暇は終わった。そして、朝9時のキール行きに間に合うようにまた旅支度をしなければならなかった。両親とは心のこもった別れをした。なにしろ実家や故郷と2年間も離れなくてはならないのだから。両親は駅まで送ってくれた。そして別れの挨拶をすると、列車は故郷を離れた。両親にまた会うことができるだろうか。午前11時にベルリンに到着した。そしてレールター駅に2時間いて、1時に旅の続きが始まった。夜10時にキールに到着し、夜中の12時に兵營に着いた。20日まで私は歩哨の勤務に就かなくてはならず、アーダルベルト・フォン・プロイセン皇太子の館とバルト海基地司令官の館の前で前哨に立った。し

かし、こうした時間も過ぎ、出発の日がいよいよ近づいてきた。

1914年 4月21日

出国の準備。^{ずだぶくろ}頭陀袋を駅に運び列車に積込む。次に、小銃等の手交が行われた。

1914年 4月22日

朝4時に起床。コーヒーを飲み、各自何らかの食糧を用意すると、中庭に整列した。ここでわれわれは乗艦する艦ごと分けられ、私はここで新しい同僚たちを知った。6時に兵営から隊列を組んで出発し、ヴィークに別れを告げた。まず第1水兵団の中核をなす水兵たちに続いてフェルト通りを進んだ。ここで兵士は輸送指揮官クールマン大尉殿に引き継がれた。そして、第1水兵団軍楽隊が演奏するうちに駅に向かっていった。その途中では多くの別れを惜しむ光景が見られた。堂々とした隊列をなして一団の水兵たちがキールの町を通り抜けていった。人出が多いために駅には歩哨が配置されていた。われわれが乗車し、多くの兵士たちがなおも家族との別れを惜しんだあと、「別れの歌」^{注17}の歌声が響き、別れゆく戦友たちの嵐のような万歳^{フラー}が叫ばれるなか列車は7時に駅を出発した。ハンブルクでは2時間停車した。午後5時頃ヴィルヘルムスハーフェン^{注18}に到着した。われわれの乗った列車はまっすぐハンブルク・アメリカ・ラインの埠頭まで行った。そこでは遠くからでもわれわれの輸送船「パトリツィア」が停泊しているのが見えた。各自がふたたび自分の頭陀袋をもつと、船の前で整列させられ、乗船が始まった。「ヤークアル」の乗組員の居場所は中甲板の前方右舷側だった。各自が番号票をもらい、それを作り付けベッド兼頭陀袋棚に貼り付けた。夕方、私はこの周辺を船上から眺めた。というのはこれほど大きな船の甲板に立つのは初めてだったからである。全長約206メートル、時速14海里の船「パトリツィア」には1,600人の兵士を運ぶのに十分な広さがあった。確かに特別快適というわけではないが、誰もがそれに慣れざるをえなかった。実際、皆がほとんど一日の大半を甲板で過ごした。船の食事は初めのうちはよかった。

1914年 4月23日

正午に埠頭を離れた。ヴィルヘルムスハーフェン音楽隊が別れの曲を演奏するなかを小さな汽船がわれわれを水門に向かって曳航^{えいこう}していった。音楽の調べと盛大な万歳の叫びのなか、われわれはヴィルヘルムスハーフェンを出発した。港に残る人たちがわれわれに最後の別れの挨拶を送ってくれた。遠く離れてもなお「さらば、わがいとしの祖国よ」^{注19}の歌声が聞こえた。この故郷との別れは私の人生において重い意味をもつ瞬間であったし、いつまで

も忘れがたいものとなるであろう。われわれのなかの何人かは恐らく思ったであろう。「俺はふたたび故郷に戻ってくるだろうか？」と。海に出るまでのしばらくのあいだ水雷艇3隻がわれわれを護衛してくれた。礼砲を3発撃つと別れゆく戦友たちのために3度万歳を叫んで港に戻って行った。われわれはイギリス海峡に針路をとって北海を横断した。

1914年4月25日

午後4時頃ドーバー・カレー線に達した。天気がよくてわれわれは1909年に座礁した「プロイセン」の残骸をドーバーの近くで見ることができた。われわれはいまや外国の海域においてこれからは戦時法の下にあった [\[注20\]](#)。

1914年4月26日

ブレスト [\[注21\]](#) の岬を通過した。海はすでにいくらか荒れており、船酔いがあちこちで見られた。ブレストには「プロイセンの擲弾兵^{てきだんへい}」と呼ばれる灯台が立っている。

1914年4月27日

フィニステレ岬が遠くに見えた。これでイギリス海峡を出たことになった。

1914年4月28日

われわれは美しい光景を見せてくれるポルトガルの海岸に沿って航行した。午後1時50分、草木も生えていない急峻なベーリング島が見えた。同時にダ・リスカ岬、いわゆるナファガを見た。その右にテージョ川の河口があり、そこには素晴らしい町リスボンがある。船上からは入港する船が見えた。聳え立つ岩山の頂上には昔のシントラ王宮がある。そこではかつて統治していたポルトガルの国王夫妻が殺害されたのである。海岸に沿っていくつかの漁村があり、荒々しい波浪が打ち寄せている。ここはビスカリア湾 [\[注22\]](#) で、航海者たちに恐れられるところである。穏やかな天気の時きでもこの海は相当に荒れる。

1914年4月29日

午前10時頃ジブラルタル海峡を通過した。左舷側にジブラルタルがあり、その港には複数の軍艦が停泊していた。右舷側にはアフリカの海岸とタンジェの町があった。

1914年4月30日

鏡のように滑らかな海だが霧がかかって湿っぽく寒いなかを地中海に入った。天候が回復

し、午後5時30分、アルジェの海岸が遠くに認められた。このときから日ごとに暖かくなった。船上でのわれわれの仕事はこれまで指導、徒手体操、用具の洗浄と用具の補修であった。われわれの仕事は暑さが増すためにさらに制約された。

1914年5月1日

チュニスの町が視界に入った。われわれは最初の寄港地であるマルタ島にコースをとった。ここでわれわれは1頭のかなり大きな鯨に出会った。

1914年5月2日

朝5時、まだ暗いなかマルタ [注23] が目前にあるのが見えた。水先案内人が船に乗ると、われわれは港に入り2つの防衛施設のあいだに錨を下ろした。朝6時、上陸の準備をした。マルタは軍港をもつ厳しく防備を固めた都市で、英国が所有する。われわれは港を出て町を散歩した。郵便局、裁判所、^{アカデミー}学院、内部におよそ2,000の頭蓋骨を並べた礼拝堂 [注24] を見物した。マルタは海拔250メートルあり、海を眺めると素晴らしいパノラマがあった。山岳地勢のため道路はたいてい段々状に造られており、それが道路に独特の景観を与えている。多くの道路ぎわに聖母像や^{ネール・ターミード}永遠の灯火が設置されているのが見えた。マルタの住民はマルタ人とイタリア人である。かれらの産業分野は織物と商業である。住民のうち下層の者はたいへん汚らしくて怠惰であり、それは彼らの着ている物で見てとることができる。われわれの誰もがまだ数シリングをポケットにもっていたので、居酒屋に入ってワインを味わったが、ワインはここでは大変安い。ビールより安かった。何枚かのはがきを一人のイギリス人水兵に託したあと、みんな上機嫌で一列になって港に戻った。大部分のものにとって^{オリエント}東洋の活況を見るのは初めてであった。午後5時にわれわれは錨をあげてマルタを発った。

出航して3時間後、われわれが夕方の点呼のために集合しているときに突然「落水者発生！」という叫び声が響き渡った。あらゆる救助策が試みられたにもかかわらず、暗くて、その男を救出することはできなかった。われわれは彼がいまま航海を続けざるをえなかった。

1914年5月3日

今日日曜日は初めての礼拝があり、ペトリ従軍司祭が説教を行った。なかでも彼は昨夜死亡した男を偲んで語った。広い海、青い空の下で行われた心に染み入る追悼式だった。

1914年5月6日

5日から6日にかけての夜11時頃われわれはポートサイドに到着し、ここで数時間の予定で錨を降ろした。ポートサイドの町は1861年に建設され、1909年にはもう人口18,000人を数えた。スエズ運河の入り口にあり、防波堤にはスエズ運河の建設者の記念像も立っている。われわれはここで探照灯とその操作チーム、水先案内人1人、アラブ人3人、ボート1艘を船に載せた。探照灯は運河を通るためには欠かせない。スエズまで乗船する数人の商人たちは絵はがき、ジーモン・アルツト [たばこの銘柄]、エンゲルハルト・シガレット、その他の土産品やダチョウの羽 [当時流行の帽子の飾り] をもっていた。さらに今日は皇太子の誕生日でもあったのでそれにふさわしい祝いがなされた。朝になり甲板に出ると、すでに運河の中を進んでいた。この運河は1859年から1869年までにフランス人のフェルディナン・ド・レセップスによって建設された。ポートサイドについて言えば、それは大きな港をもつ重要な商業都市である。地球上のあらゆる人種の大変興味深い生活と混沌がある。道路は多くが舗装されていないし、この都市ではわれわれがヨーロッパで見るような清潔さも行き渡ってはいない。スエズ運河の眺望は一方では興味深い、他方ではこれまた大変退屈である。運河は幅およそ36~40メートル、長さ156キロメートルあって地中海と紅海をつないでいる。建設費用は4億マルクにのぼり、エジプトのカリフ [族長] たちによって調達された。われわれの通行料は2万マルクだった。その後この運河は株式の買い取りによってイギリスの所有に代わった。この運河の両岸に見えるのはほとんど砂漠ばかりである。ほぼ一定の距離をとって基地が設置されている。船舶の通行管制と運河の作業の管理をするためである。ここは植物の生育が豊かで、小さなパラダイスと言うことができよう。アフリカ側には運河に沿って鉄道が走っている。この荒野のところどころにアラビア人からなる労働者集団や岸辺で野営する小さなキャラバン隊が見える。しばしばアラブ人たちは「アラー、アラー」と叫びながらわれわれの船と併走してわれわれが彼らに向かって投げるパンや生のジャガイモを集めていた。ビッター湖を通るとき私の人生でまだ一度も見たことがないような素晴らしい日没の光景を見せてくれた。この湖の両岸にはいくつかのアラブ人の村があり、湖では数台のしゅんせつせん浚渫船が操業しているのも見えた。運河を通過中はほとんど耐えがたい暑さだった。

1914年5月9日

夜の11時30分、運河の終点スエズに到着した。ここでわれわれは探照灯とその操作チームを降ろし、われわれの郵便物を預けて、いくらかの食糧と水を船に積込んだ。朝にはもう紅海にいた。暑さはますます.... [原文はここで文章が途切れている]

1914年5月12日

われわれは左舷に見えるアデンを通過した。右舷からはアフリカの手前にあるいくつかの島々が見えた。ズボンとシャツだけで走り回ったのだがますます耐えがたい暑さだった。朝にはもうここの温度は摂氏35～40度もあり、時間がたつにつれて摂氏50度にまで上昇した。毎日水浴しても海水そのものが大変温かいためにたいして体は冷えなかった。この大変な暑さのために何人かのボイラーマンと石炭運搬人たちがへたばり、われわれのうちの何人かが穴埋めをしなければならなかった。乗組員のボイラーマン1人が熱中症で死んだ。海岸の景色はたいへん傾斜が急で岩だらけだった。日の出と日の入りの素晴らしい光景を見ることができた。ここでは朝夕の黄昏どきというものはほとんどなく、太陽が沈むとすぐに真っ暗になった。この紅海で大挙して泳ぐトビウオの群れに出くわしたが、トビウオたちは小さなニンシンほどの大きさで、海面を飛びあがり8～10メートルほど空中を飛んでふたたび水中に消える。甲板からはシナイ山と「12使徒」と呼ばれる12の小山が見えた【注25】。海面の〔夜光虫による〕燐光は私にとっては初めて見るもので、私は毎晩それを観察した。

1914年5月12日 [5月12日が2つあるが原文通り訳出した]

われわれはアデン湾を通過した。アデンは左舷にあった。右舷にはアフリカ大陸の前方にあるいくつかの島が見えた。今や、われわれはインド洋に入った。すると、海風によっていくらか涼しさを取り戻した。コロンボに向けて進んだ。

1914年5月18日

6日間の航海が過ぎ、今晚9時20分にはコロンボが視界に入ってきた。水先案内人を船に乗せると港に入った。コロンボは自然の港ではないが大変大きな港だった。というのは、ここはあらゆる国との活発な海上交通で賑わっているからである。夕方、私は甲板の上から港の賑わいを眺めていた。ここにはハンザラインの汽船が数隻停泊していた。

1914年5月19日

われわれは朝イギリスの通貨を手に入れると、白い服を着、大変な暑さに備えて防暑帽もかぶって、陸にあがった。小さな汽船がわれわれを上陸ロビーに運んでくれたので、そこからコロンボ市内の散策をはじめた。コロンボはイギリスが領有している。しかし、ここでもわれわれはドイツ人も住むヨーロッパ地区を見つけた。セイロン〔現スリランカ〕の気候はまさに熱帯性で、ここではパイナップルやココナツ、^{けんらん}絢爛たる美しさの熱帯の花々といった熱帯植物がたくさん見つかった。われわれはここでわずかな金でこの上なく素晴らしい果実

を手に入れた。そして、たいていの者が多かれ少なかれそうしたものをもって船に戻った。コロomboの住民はわずかなヨーロッパ人を除けば、たいていインド人かシンハラ人である。彼らの肌の色は暗褐色だが、まるで象牙のような非常にきれいな歯をしていた。主要な交通手段だと私が思ったのは幌付きの二輪車で、いつも原住民が急ぎ足で引っ張っている。この車は一人乗り用であり、乗車賃は1時間5～10セントである。われわれはまずヨーロッパ地区を散策したが、そこは建物の造りからして他の地区とは違っていた。次に原住民地区を通った。そこは低い竹製の家々が絵のような美しさを呈していた。原住民たちは腰布をつけターバンを巻いて行き来していた。もともと、われわれも彼らに十分驚きをもって見られていたのだが。小さなヤシの林を通り抜けてビクトリア・ガーデンに入った。それはまさしく熱帯地方独特の持ち味をもった植物園だった。ここの遊歩道脇に一軒のドイツ風クラブハウスを見つけた。われわれはコロomboで2頭の牛に引かれた2輪の大きな荷車に何台か出会った。これは現地の人たちにとって荷馬車である。その他の点では、セイロンの住民たちは、マルタ島の人たちとは対照的にたいへん働き者である。宗教に関していえば、彼らは仏教徒である。帰り道にわれわれは一軒のレストランに立ち寄り、そこで何杯かのレモネードを飲んだ。商店街を通るのもまた興味深かった。ここでは象牙の彫刻や海泡石の細工 [パイプのことか] を安く買うことができる。露天商たちが土産物や切手や果物を売っていた。こうして、われわれはまた上陸ロビーに着いた。そしてここから船に戻った。われわれが点呼を受けると、兵士が1人いないことが明らかになった。捜索隊が陸へ送られ、3時間後に兵士は発見された。彼はそのために数日間の禁固刑をうけた。5時頃、われわれはコロomboを離れた。コロomboはさらに、夕暮れ時のすばらしい眺めをわれわれに提供してくれた。

1914年5月20日

いまなお遠くにセイロン島の島影を認めることができた。

1914年5月21日

正午にわれわれはマラッカ海峡にあるシンガポールを通過した。この海峡はマレー半島 [原文はMalagaだが誤記と思われる] とスマトラ島のあいだを通りインド洋とシナ海を結んでいる。

1914年5月23日

夜中の3時半、「落水者発生！」という驚愕の叫びで起こされた。魚雷担当の水兵が高熱を発し、甲板を走って海に飛び込んだのである。あらゆる救助の手立てを尽くしたが、暗闇

のなかではどうにも発見するには至らなかった。

1914年 5月24日

今日日曜日は礼拝があり、溺死した兵士の追悼も行われた。

1914年 5月25日

今日は左右に陸地が見えた。右舷にはオランダ領ボルネオ島とジャワ島が横たわっていた。ここは汽船や漁船の往来も激しかった。われわれはここで赤道に1度45分という近さにいた。

1914年 5月28日

昨夜「イルティス」の二等焚火兵〔ボイラーマン〕が熱病で亡くなった。ドイツに送還されることになっていたので防腐処理が施されて亜鉛の棺に安置された。

1914年 5月30日

朝4時にわれわれは香港の沖合の停泊地に到着した。水先案内人を1人船に乗せてから入港した。そこで奇妙な光景が目映った。多くの中国の平底帆船が港のなかを縦横に走りまわっていたかと思ったら、たちどころに何艘もの通い船サンバンがわれわれの船を取り囲んだ。そこで私が初めて目にしたのは、くすんだ黄色い肌をした目の細い中国人の漕ぎ手たちだった。香港は大きな工場と港の町で東アジアの貿易の中心地でありイギリス領である。1日におよそ60隻もの船が出入りしている。われわれは香港に上陸することになっていたのですが、早々にその準備に取りかかっていたのだが、いま香港では腺ペストが蔓延しているため上陸はかなわなかった。したがって船の上からしか香港の町を眺めることが出来なかった。香港は大きな山の山腹から舌のように突き出た岬にあって多くの工場からほぼ一年中立ち上る煙に覆われている。いくつかの島と大きな山々のあいだを縫って入港したが、そこは絵のように美しい。ここでは食糧をいくらか買い入れただけで、5時間半の停泊の後ふたたび外海に出てわれわれの最終目的地青島チンタオ〔注26〕に舵を向けた。

1914年 6月1日

私にとって初めての海の上での聖霊降臨祭を過ごした。ペトリ従軍牧師が執り行った礼拝のほかは特筆することはなかった。みんなが喜んだのは今日が航海5週間半にあたり、その上、航海中初めての祭日ということもあって昼食にジャガイモとニシンが出たことであった。

1914年6月3日

われわれの新しい故郷をまもなく目にすることを期待しつつ、ずっと甲板にいつづけたが、まだ何も見えなかった。小さいが背の高い二つの島、それは二人の歩哨のように見え、ドイツ語では「マックスとモーリッツ」^[注27]と呼ばれるのだが、そこを通り過ぎたところで、遠くの細長い岬の向こうに青島が見えてきた。陸上はどこもかしこも旗がひるがえっていた。湾内に停泊している巡洋艦「SMSシャルンホルスト」、「SMSグナイゼナウ」そして「SMSライプツィヒ」も同様であった。音楽とともにわれわれは入港し、音楽と万歳の歓声が轟くなかで迎えられた。「デブっちょ」^[「パトリツィア」の愛称]が姿をみせると、ここではいつもなにかしら特別な空気に包まれる。とりわけ、われわれが勤務を交代することになっている前任者たちにとってはそうである。彼らには、ふたたび故郷へ帰還することが許される「その日」がようやくやって来たのである。「パトリツィア」はいま内湾に入港し、第2埠頭に停泊した。ここではわれわれの同郷人や非番の同胞たちが、故郷からやってきた昔からの知人らを歓迎するために待ち受けていた。いよいよ下船が始まった。各自頭陀袋を携行して棧橋に整列した。「ヤークアル」のモーターボートがわれわれをここまで迎えに来て、造船所へ送ってくれた。「ヤークアル」は造船所のドックの奥に停泊していた。「ヤークアル」、全長62メートル、全幅9メートル、4基のシュルツ式ボイラー、各750馬力の2基の機関、そして900トンの排水量をもつ砲艦が、まさに2年間のわれわれの故郷となるのである。艦に乗るとすぐ担当ごとに分班され、各自、簡易戸棚、ハンモック、折り畳み式テーブルを割り当てられ、艦番号を教えられた。簡易戸棚に頭陀袋をうまく詰め込み、ハンモックを取り付けて着替えたのち、仕事に取りかかった。というのは前任者たちは下船しなければならないし、われわれは彼らの仕事を引き継がなくてはならないからである。艦はまだ造船所にあっただけで夜になってほんの少し陸を散歩して近くの様子を見て回った。8時に夜の巡回が来たあと、私はハンモックに入って心安らかに眠った。

1914年6月4日

今日はわれわれにとって最初の勤務日であった。勤務日は朝7時に始まった。持ち場が割り当てられた結果、私は港に停泊中は艦尾にある機関室、海上ではボイラー室に入るようになった。停泊中の勤務は常にスケジュールが決まっていて、変化といえばせいぜい各種教練か用具の補修にかわるくらいである。初めのうちは指導にかわることもあった。航海中の勤務のほうがはるかに難しい。われわれは3班の当直に分かれ、4時間の当直、8時間の自由時間で、この自由時間には指導だけが行われるか、用具の補修を行うかである。私はレール機関兵曹長の当直第2班にあたった。さて、青島に関して言えば、そこはまさしくドイツを

手本にした美しく清潔な町である。ヨーロッパ人地区を青島といい、中国人地区を「大鮑島^{だいほうとう}」という。青島には何棟かの兵営、駅、食肉解体場、教会、船員会館があり、1万6千トンのドックと150トンのクレーンを備えたりっぱな造船所がある。中国人は人なつこくて、たいていは片言のドイツ語ができる。

1914年6月8日

われわれは初めての試験航行を行った。というのは、「ヤーグアル」はちょうどドックでの整備期間を終えたばかりだったからである。そこで、私は今日初めて海上での当直をすることになった。このとき初めて私は軍艦のボイラーマンの仕事に小さな夢を感じた。

1914年6月9日

今日正午、われわれは漢口^{かんこう}を目指して出港した。そこでわれわれは「SMSファーターラント」と交替するよう命令を受けている。私はこの航海で左舷側の2号ボイラーを担当した。換気設備のない航海だったのでなおさら私にとっては慣れないきつい仕事だった。4時間の当直が終わるといつもほっとした。そして、甲板に出ることができたときは、半ば疲れ果てていた。

1914年6月13日

午後4時頃、われわれは上海近くの呉淞^{ウーソン}の停泊地に着いた。そこには「イルティス」と交替した「ルクス」が停泊していた。ここは揚子江〔長江〕の河口であった。この河のこの辺りは河幅が広いので、両岸がほとんど見えなかった。この河はわれわれのライン河のほぼ3倍の長さがあり、東アジア最大の大河である。河の水は真っ黄色で、流れは非常に激しい。

1914年6月14日

今朝、われわれが錨を上げたとき、「パトリツィア」がやってきて、「ルクス」の交替要員を降ろした。われわれが漢口への航海を続けるために水先案内人を甲板に迎えると、祖国の三角旗で飾った「パトリツィア」もまた停泊地を離れて祖国に向けて旅立っていった。私は、河を遡るこの航海ですばらしい岸辺の風景を見る機会を幾度となく持った。水田、牧場、山々や仏塔、くすんだ中国の村々などが次々に入れ替わるパノラマを繰り広げるのだった。

1914年6月15日

古くてかなり大きい中国人の都市南京^{なんきん}に到着した。南京は中国特有の城壁に囲まれている。

1914年6月16日

未明の2時半頃、突然頭に強烈な衝撃を受けて目が覚めた、と同時に「隔壁を閉めろ」という合図のラッパが聞こえた。私は着の身着のまま甲板の自分の持ち場に駆けつけた。強い衝撃の原因は大きな中国の客船がわれわれの艦に激突したせいだった。左舷側の艦首に大きな穴があいたが、幸運にもその穴は喫水線より上にあった。応急班によってそれ以上の被害がないと確認された後、われわれはふたたびハンモックで寝ることができた。朝には大きな穴があるにもかかわらず航海を続けた。昼間になって初めて私は損傷をじっくりと見ることができた。大きな穴だけでなく、搭載艇揚降装置の第二ブーム〔支柱〕が折れ、舷梯は壊され、搭載艇はほぼ完全に破壊されていた。夕方近くアメリカの巡洋艦隊の旗艦「U.S.S. サラトガ」とすれ違った。「サラトガ」の軍楽隊はわれわれの国歌を演奏しての挨拶であった。南京を過ぎると揚子江の往来もますます激しくなり、たくさんの平底帆船やはしけが川の上流あるいは下流へと移動していた。独特な網を使う漁船や水に浮かんだ筏の上の小さな村々が私の関心を引いた。われわれの航海は今まで鎮江、安慶、南京、それと有名な九江壺で知られた九江の町々を通り過ぎた〔注28〕。

1914年6月17日

午後3時頃われわれは漢口に入港し、ドイツ領事館の前に投錨した。漢口は興味惹かれる国際的な都市で広範囲にわたるヨーロッパ地区がある。ここでドイツ、アメリカ、イタリアそして日本の領事館を見つけた。そのほかドイツ郵便局、市役所と付属の消防隊、警察署、肉屋、パン屋そして数軒の比較的大きな商店がある。また立派な船員会館もあって、私はそこで何時間もドイツの新聞や本を読んだりして過ごした。また発電所や独華大学さえもある。N.D.L.〔北ドイツロイド〕やH.A.L.〔ハンザアメリカライン〕といった海運会社はここに自前の埠頭と倉庫を持っている。しかもN.D.L.は2隻の大きな河川用蒸気船まで持っていて上海と漢口の間を定期的に運航している。山東鉄道もまたドイツの所有で上海・漢口間を走っている〔注29〕。上にあげた国々の軍艦もここに配備されている。熱帯の植物群に囲まれた競走用コース〔競馬場か?〕や立派な競技場もここを代表するものである。私は、人力車や中国人の歩行者たちがうごめく狭くてごみごみした通りを通過して中華街を散歩したのだが、いつも大変興味を引かれた。この地域はほとんどペストを思わせる悪臭がして、ヨーロッパ地区に帰ってくるといつもホッとした。暑さがひどくて夕方でも気温は摂氏28~30度になる。われわれの勤務は各種教練と指導だけだった。それも猛暑のために毎日2時間短縮された。

1914年 6月23日

生水を飲んだために乗組員のほぼ1割が病気になった。そのため生水を飲むことが禁止され、その代わりにお茶が入った2つの小さな樽が設置された。

1914年 6月24日

今日の朝7時に当直を除く乗組員全員がスポーツ競技をするために上陸した。私が艦に乗っているあいだで同僚と何かスポーツをすることができたのはこれが初めてだった。その喜びはしかし長くは続かなかった。というのは突然降り始めた土砂降りの雨のために、われわれは競技を中断せざるをえなくなり、びしょ濡れになって艦に戻って来てしまったからである。

1914年 7月 8日

昨夜は非常に暑くて摂氏35度もあった。たいていの者はほとんど裸で甲板に横になっていた。私は一晩中眠れなかった。

1914年 7月10日

今日は酷暑の中で石炭を積込んだ。非常に粗悪な石炭、カスばかりである。

1914年 7月17日

さらに14日間延長してここに滞在せよ、という電報を今日受けとったが、それはわれわれには必ずしもうれしいことではなかった。

1914年 7月22日

「SMSファーターラント」がふたたび河を下ってきてわれわれと領事館との間に投錨した。

1914年 7月23日

本日漢口を出発せよとの命令が司令部から下った。水先案内人が到着しなかったので、出発は明日に延期になった。

1914年 7月24日

午前10時に水先案内人を乗せた汽船「タフォー」が入港した。水先案内人は素早くこちらの艦に乗り移り、1時30分、結成されたばかりの我が艦上軍楽隊が演奏する「別れの歌」が鳴り響くなか漢口を後にした。気温は摂氏38～39度だった。

1914年7月25日

昨夜7時半に揚子江の真ん中で助けを求めて大声で叫びながら一人の中国人が泳いでいることにわれわれは気がついた。即座に「落水者発生！」との号令がかかり、すぐさま男は救助された。われわれは航行を続けた。この艦の将校担当料理人の中国人が通訳したが、その中国人によれば、男はわれわれの前を進んでいた河川航行の汽船から投げ落とされた？とのことである。男は食べ物をもって腹ごしらえができた。われわれが8時ごろ九江に立ち寄ったとき下艦した。午後1時、揚子江の真ん中にあり多くの寺院がある「小孤山」^{シャオグシヤン} [注30]に着いた。温度計は摂氏40度まで上がった。

1914年7月26日

午後3時に南京に到着した。ここで「エムデン」から、ただちに上海へ向かいドックに入るようにとの無線連絡を受けた。30分後にわれわれは全速力で南京を出発した。

1914年7月27日

午前11時に上海に到着し、そこの「オールド・ドック」に係留した。

1914年7月28日

準備作業を終えたあと、午前9時にドック入りした。われわれと一緒に小さな日本の汽船1隻もドック入りした。「SMSルクス」は上海をあとにして、青島へ向かう。

1914年7月29日

今日、「ルクス」の艦上で風邪のために亡くなった二等焚火兵 Fr・ノイマンの埋葬が行われた。私も葬儀に参列したが、その機会に上海の町の概要を知ることができた。埋葬がヨーロッパ人墓地で行われたため、われわれは路面電車に乗って町を横断する必要があったからである。上海は東アジアの中の重要な都市であるというだけでなく、たいへん古くからの国際的商業都市でもある。町の大部分はヨーロッパ各国からやってきた人々が住んでいる。わずかな土地に中国人が住んでおり、そこは町からいくらかはずれたところにある。ドイツ人地区は領事館と同じ港側にある。上海外灘にはイルティス記念碑^{バンド} [注31]が建っていて、そこから港を見渡した眺めは絶景である。数々のドック、造船所、建造中の船、そして、あらゆる国の船が入り交じる多彩な光景が目映る。路面電車に乗っているあいだに、にぎやかな往来が続くいくつかの街区を通り過ぎた。人、車、路面電車、とりわけ目立つのが人力車で、文字通りごったがえしていた。墓地のすぐ手前のところで中国人地区を通ったが、そこ

はヨーロッパ人地区とは正反対である。墓地そのものはりっぱな道路があり熱帯植物が生い茂って大変きれいに整備されている。ここで、故郷から遠く離れたところで亡くなった何人かのドイツ人の名前が読めた。

1914年8月1日

ただちにドックを出るとの通知を受けて、修理がまだ終わっていないにもかかわらず、この日の午後にはドックを出た。修理は沖合に投錨しているあいだに完了しなければならなかった。われわれの艦長リュウリング少佐^[注32]と二等水兵若干名が上海に残った。そして副長マティアス大尉^[注33]が艦長〔代理〕になった。われわれはできるだけ早く青島に回航するよう命令を受けていたので、ドックを出るとただちに石炭を積込んだ。その作業は午後8時まで続いた。明日も引き続き作業せよとの命令があつて急遽職人たちを陸に送ったあと、われわれはもやい綱を解き、照明を減光し「臨戦態勢」のまま全速力で上海を出航した。英国の2隻の軍艦が「軍艦」であることを誇示して港に停泊しているのもものともしなかった。いまや危険きわまりない航行をしながら青島をめざして進んだ。この航海については私も私の戦友の多くも後年になっても思い起こすことだろう。ボイラー室の温度は摂氏49～56度にもなり、ずっと最大出力で稼働している。何人かの戦友がぐったりしてしまった。私もこの大変な暑さに耐えられず、ボイラーを離れて軽微な仕事に就くほかなかった。この航海では夜半直〔0～4時の当直〕は1回の当直で2本のワインをもらった。さらに、われわれの班長は、もし無事に青島にたどり着いたときには一人ひとりにビールを1本やろうと約束してくれた。火砲を積込んだ「臨戦態勢」をとりながら、われわれは通常は水雷艇しか利用しない海岸ぎわの航路を進んだ。ここではいつ何時敵の艦船に遭遇するかもしれないとの覚悟をしていた。

1914年8月3日

途中何事もなく、朝方に、われらが青島に着いた。到着してみると、私には見慣れない光景が目映った。港内に停泊中の砲艦「ルクス」、「ティーガー」、「イルティス」、「コルモラン」と水雷艇「S 90」は武器を取りはずしたり、「臨戦態勢」を装うための準備をしていた。水兵たちは弾薬類を準備したり、小銃等に弾薬を装填したりしていた。その間、われわれは機関室やボイラー室から必要不可欠ではないものを全部陸に揚げた。自由時間なんてものはや考えられなかった。総督府の命令でわれわれは外湾〔青島港〕に偵察に出かけなければならなかった。というのは複数のイギリス艦が青島の手前に停泊するらしいということが分かったからである。屠畜を積んだイギリスの汽船が「ティーガー」によって連れ戻される。

この船はアメリカの国旗をつけて運航していた。夕方6時半、郵便船「プリンツ・アイテル・フリードリヒ」が無事に入港した。仮装巡洋艦として戦列に加えられるとのことである。

1914年8月4日

朝6時にわれわれはふたたび港内に戻ってきた。一日中武器を取りはずす作業をした。このときからわれわれは常時ボイラーを炊き、出航準備をして待機した。

1914年8月5日

われわれは未明に前哨としての勤務を終えると、昼間はわれわれが持っているすべての演習弾を艦からおろし、8.8センチ榴弾りゅうだんの実弾75発を積込んだ。今夜は「S 90」が任務を引き受けてくれるので、われわれは出動する必要はない。

1914年8月6日

中国人の手を借りて今日石炭の積込みが行われ、すべての燃料庫が満杯になり甲板にも積まれた。夕方近く、拿捕した石炭運搬船[注34]を引き連れて「エムデン」が到着したが、その石炭運搬船は茶、チョコレート、果物を満載していた。この石炭運搬船は、仮装巡洋艦として、艦装ぎそうするために起重機の下に曳航され、「プリンツ・アイテル・フリードリヒ」と同様に、廃船にされた他の砲艦の乗組員たちが配備された。また、われわれは今日「イルティス」から新しい艦長のフォン・ボーデッカー少佐殿[注35]を迎えた。

1914年8月7日

われわれは射撃演習を行った。また、午後にはオーストリアの巡洋艦「カイゼリン・エリーザベト」が天津からここ青島てんしんに到着し、戦闘準備を完了させた。

1914年8月8日

今日「カイゼリン・エリーザベト」が前哨任務に赴いた。われわれは依然として武器を取りはずす作業中であり、上海で修理が終わらなかった艦首の穴はここでようやく完全にふさがれた。

1914年8月9日

総督府の命令でわれわれは今日の早朝4時に外湾へ向かい、一方、「カイゼリン・エリーザベト」は湾内に戻った。われわれは「SMSシャルンホルスト」に合流することになってい

る1隻の石炭運搬船を外洋まで護衛した。

1914年8月10日

今日は造船所にずっと引き続き武器を取りはずす作業をし、空爆に対する防御の準備を整えた。数名の戦友と私は「艦の装甲目的で」鉄板を十字に組むために艦を降りて造船所に入らなくてはならなかった。

1914年8月11日

午後2時にまた石炭の積込み作業。これはいま非常に多くの回数必要である。夕方にはふたたび外湾に出た。「S 90」とわれわれの艦だけが青島にいるドイツの軍艦であった。「SMS コルモラン」、「SMSルクス」、「SMSイルティス」、「SMSティーガー」の乗組員たちはあの2隻の仮装巡洋艦組と上陸組に分けられた。われわれには補充要員として3名の二等焚火兵が加えられた。

1914年8月12日

朝の6時にわれわれはまた造船所に入った。午後には射撃演習を果たさねばならなかった。港に停泊中の商船の乗組員たちが召集された。

1914年8月14日

造船所にいる中国人の職人たちによって中甲板に2門の8.8センチ砲を取り付ける準備が整えられた。夕方にはわれわれはふたたび前哨についた。

1914年8月15日

朝6時にふたたび港に入るとただちに8.8センチ砲の弾薬20発が艦に積込まれた。

1914年8月17日

今日前方のマストにクローネストすなわちしょうとう檣頭「見張り台」が取り付けられ、そこにはただちに兵が入った。

1914年8月18日

「SMSイルティス」の8.8センチ砲2門が本艦の中甲板に据え付けられた。大部分の中国人がどこか他所に落ち着き先を求めて青島を去っていく。

1914年8月19日

情報によると日本がドイツに最後通牒を發したそうだ [注36]。

1914年8月20日

本艦の2丁の機関銃を装備と弾薬類ともども陸に降ろした。総督からすべてのヨーロッパ人の女性と子供に青島を離れよとの命令が下る。

1914年8月21日

艦尾の予備アンカーが艦から降ろされた。午後1時、女性と子供を乗せて汽船「プラカート」が青島を去った。目的地は天津である。彼女らは夫を戦場に残さなくてはならないし、彼女ら自身も不確かな未来に向かうことになるので、悲しい別れだった。午後にはここに住むわずかな日本人を乗せた小さな日本の汽船も同じく青島を去った。

1914年8月22日

今日午後1時30分、「カイゼリン・エリーザベト」と「ヤーグアル」の乗組員に非常呼集がかかった。まもなく「S 90」が入港し、同艦は30分にわたってイギリスの水雷艇駆逐艦の追跡にあい砲撃を受けたが、損傷はなかった、と報告した。われわれはただちに出動して追跡を開始し、皆がこの小さな戦いに心躍らせたが、残念ながら敵駆逐艦はすでに行方をくらましていた。夕刻近くわが軍の機雷敷設艦「ラウティング」が、みずから敷設した機雷が艦尾に触れ軽い損傷を負った。8月19日にドイツに対して發せられた最後通牒で、日本はイギリスの同盟国として、こうしゅうわん膠州湾租借地の無条件引き渡し、青島に停留する軍艦の武装解除、および、全軍の撤退を要求してきた。ドイツは、膠州が欲しければ自力で取ってみよ、そうたやすく引き渡しはしない、日本はそれに見合った高い代償を払うことになるろう、と回答したという。よかろう、そちらがその気なら、わが方は兵わずか5,000人とはいえ抜かりはない。とはいえ、いまや誰の目にも明らかだが、われわれは青島を未来永劫領有することはできないのではないだろうか。

1914年8月23日

14年8月23日付け総督府日令

本日をもって私は青島防衛の最高指揮権を引き継ぐため戦線に就く。添付した日令はすぐさま全軍の兵士に伝達されるべきものである。

8月15日に日本はドイツに対し最後通牒を發した。その内容は巡洋艦戦隊にお

けるすべてのドイツの軍艦を即刻撤収もしくは武装解除すること、ならびに、青島の無条件引き渡しを要求するものであった。回答期限は14年8月23日の正午。この前代未聞の不当な要求は、形式においても内容においても侮辱的である。われわれはドイツ軍旗がはためく領土は一片たりとて決して進んで引き渡すことはないであろう。

われわれはこの地から離れるつもりはない。12年間にわたって海の遠くかなたにある小ドイツを愛情込めて築きあげ、成果を上げてきた場所なのだ。日本人が青島を欲するのであれば、来るなら来て、取れるものなら取っていけばよい。待ち構えるわれわれを見つけることになるだろう。青島攻撃が迫っている。鍛錬を重ね、準備万端整えたからこそ待ち望むことができる。青島にいる守備隊の決意が固いことはわかっている。軍旗への変わらぬ忠誠心と、先祖代々の武勲にかけて持ち場を死守する決意である。今からわれわれも皇帝と帝国のために戦えること、そして、祖国にいる兄弟たちが激戦の状況にあるのにわれわれは何もせずに傍観している、との非難を受けずにすむことは誇りに満ちた喜びとなる。

青島要塞守備隊の諸君！

およそ100年以上前におけるコルベルク、グラウデンツ、ならびに、シュレージエン地方の諸要塞における輝かしい防衛戦^[注37]を思い起こしてみよ。その時の英雄たちを模範に仰ぐのだ。諸君が勇猛さと戦士の美徳を祖国にいる戦友たちと競い合うべく、それぞれが全力を尽くすことを期待する。われわれは防衛戦を余儀なくされている。防衛戦が正しく遂行されるのは、攻撃の精神に満ち溢れているときのみであるということを絶えず念頭に置くのだ。8月18日に無線で皇帝陛下に、任務遂行の責任は最大限私が負うことをお約束申し上げた。8月19日に陛下より勅命を拝受した。「青島を最後まで防衛せよ！」と。最高司令官である陛下に行動をもって証明しようではないか。陛下から賜った至高の信頼にわれわれも値するのだということ。

皇帝万歳！

要塞総督

(署名) マイヤー - ヴァルデック^[注38]

上記の日令は本日午前10時に発令された。これで私は状況を正確に認識することができた。午後、損傷した機雷敷設艦「ラウティング」がドック入りした。

1914年 8月24日

オーストリアはまだ日本に対して宣戦を布告していなかったので、「カイゼリン・エリーザベト」は武装解除をしなければならない。同様に弾薬類も陸揚げされる。同艦に残る15名の当直以外の乗組員は山東鉄道で天津に向かった。青島から多くの中国人が去っていくのがたいへん目についた。われわれの艦にいた将校担当の料理人3名も、ある晩、恐ろしさのあまり跡形もなく姿を消してしまっていた。

1914年 8月25日

外港の機雷堰がすでに完成しているので、今も港に停泊している船はもう外海へ出ることができない。本艦「ヤーグアル」と「S 90」の秘密裏の航行は別であるが。総督府命令に従い「カイゼリン・エリーザベト」はわれわれが購入する。

1914年 8月26日

われわれは「カイゼリン・エリーザベト」に乗り込み、弾薬類を受けとり、ビールとたばこ類を贈った。今日、造船所に勤めていた3名が義勇兵に志願してきた。彼らはポナペ（南太平洋諸島）出身者たちでドイツ語を上手に話した。彼らが軍服に着がえると、副長のもとで宣誓式が行われた。水雷艦「タークー」は試験航行をしていたが、最終的に廃船処分にされた。

1914年 8月27日

青島は封鎖の準備を整えていた。午前中はふたたび石炭の積込みを中国人の手を借りて行った。正午に日本から2度目の最後通牒が届いたということである。青島は戦争の空気に包まれた。日本軍はすでに艦隊を青島の前面に配置し、「マックスとモーリッツ」の2島に砲撃を加えたという。

1914年 8月28日

今日、オーストリアが日本に宣戦布告したとの報告があった。すでに天津に向けて出発していた「カイゼリン・エリーザベト」の乗組員たちは、私服のまま隊ごとにまとまって青島に戻ってきた。今日は2名の将校と44名の兵士が到着し、彼らの戦友とわれわれの熱烈な歓迎を受けた。

1914年8月31日

午前10時に総督府から命令が発せられ、青島に接近しようとして座礁した日本の水雷艇駆逐艦 [注39] を撃沈するためにただちに出動せよとのことである。好機到来！ 機雷堰の間を縫って誘導してくれる水先案内人を乗せたあと、われわれは出動した。わが艦が敵艦に104発の砲撃を浴びせてとどめを刺したとき私はちょうど非番だった。4隻の巡洋艦と5隻の水雷艇駆逐艦が追跡してきたので、われわれは安全を確保できる要塞内に引きあげるしかなかった。多勢に無勢だったからである。正午にわれわれは港に戻った。

1914年9月1日

われわれはこれより毎日外湾に行き、アルコナ島に停泊することになった。今日早くも本国から最初の戦況報告が届いた。

1914年9月2日

本日午後、日本兵11,000人が龍口りゅうこうに上陸したとの知らせを受けた。

1914年9月4日

今日はふたたび石炭の積込みである。よりによって、この雨天に。

1914年9月5日

午前10時頃、突然、飛行機 [注40] が1機造船所上空に現れた。すぐに信号所から敵機だとの報告を受け、水兵たちはすぐさま銃を持ち地上配備につかなくてはならなかった。残念ながら飛行機が高すぎて銃火では届かなかった。午後1時、われわれはふたたび青島湾に向かった。夕方6時に入港したときにオーストリア人将校たちから、あの飛行機がビスマルク砲台およびモルトケ兵営付近に爆弾を3発投下したが被害はなかった、と聞いた。

1914年9月6日

日曜日の今日、ちょうど食事をとっていた1時45分に、例の日本軍の飛行機「オトモダチ」がやってきた。下からちょっとちょっかいを出してやろうと、われわれはすぐさま湾に向かったが、オトモダチは適度な距離を保っており、銃火では届かなかった。機関砲を用いた対空砲でないとオトモダチは砲撃できなかった。午後8時頃、オーストリア兵75名およびわれわれが上海に残してきた数名がここに到着した。彼らの報告によると、山東鉄道の一部が破壊されたということである [注41]。

1914年9月9日

今日、われわれは上海からの郵便を受けとった。上海にいるドイツ人たちが、青島守備隊のために募金をしてくれたのだ。1人当たり85ペニヒ分の葉巻とビールをもらった。

1914年9月12日

午前中、オーストリアの水兵20名が到着し、われわれの同胞も次第に帰ってきた。^{そくぼく}即墨（山東半島）から約40騎の日本の騎兵隊、そして、それに続いて歩兵隊と砲兵隊が到着したという報告を受けた。つまり、敵の第一陣がもうそこにいるというわけである。彼らは、われわれがドイツ人だということを思い知るだろう。来るなら来い。

1914年9月13日

朝早く、1名の将校と6名の兵士で構成されたドイツ軍の偵察団が日本の騎兵隊に出くわした。彼らは中国服を着て待ち伏せをして撃ってきた。このような戦い方は、文化国家の民のやり方ではなく、強盗団のそれのようなものである。午後8時、オーストリアの残りの水兵が到着した。「カイゼリン・エリーザベト」はふたたび任務に就くことができる。

1914年9月14日

今日、午前11時、私服を着ていた日本の将校1名がスパイ活動のかどで射殺された。午後には石炭の積込みと認識票の配布があった。番号は [.....]。

1914年9月15日

われわれは今日ずっと造船所にいた。軽砲や銃火なら防御できるように上甲板に装甲を施したり、艦艇の手すりに胸壁を築くためである。今日もまたわれわれには重労働の一日だった。当直のあいだはボイラー室か機関室の中で過ごし、非番のときは造船所で12~20ミリ厚の鉄板を十字に組んで艦艇に運びこむ作業である。

1914年9月16日

われわれは今日もまだ造船所にいる。作業が終わらないからである。午後1時にまた「オトモダチ」がやってきたので、3時まで榴散弾^{りゅうさんだん}と銃火を浴びせてやった。お返しに向こうはこちらに5発の爆弾を投下し、そのうちの1発はわれわれの艦から20メートル先に落ちた。しかし、ほんのわずかな被害も与えることはなかった。

1914年9月19日

「オトモダチ」はこのところ毎日やってくる。われわれと「カイゼリン・エリーザベト」を殲滅せんがためである。今のところその目的は達成されていない。今後もできはしないだろう。

1914年9月21日

朝8時に、第5および第4歩兵堡壘^{ほるい}の様子を見ることを目的とする上陸のために準備を整えた。われわれにとっては散歩の機会ができてありがたかった。2、3時間とはいえ狭いボーイラー室から抜け出せるのだから。正午にはふたたび艦に戻った。「オトモダチ」がまたやってきて7、8発の爆弾を投下していったが、命中はしなかった。

1914年9月24日

今朝8時に「オトモダチ」がまたやってきて、鉄の挨拶をしていった。この日のうちに艦尾のマストが艦から撤去され、それが無線通信設備の変更という結果にもなった。

1914年9月26日

午前9時頃突然敵機が2機あらわれ、上空から爆弾を投げ落としたが、どれも効果はなかった。それからしばらく^{そうこう}滄口水路で前哨に就いていた「S 90」から、敵の砲兵隊、騎兵隊および歩兵隊が青島に接近中であるとの無線連絡を受けた。われわれは即刻「臨戦態勢」で出動し、敵のすべての部隊に向けて砲火を浴びせたが、皆、蜘蛛の子を散らすように姿を隠してしまった。夜間われわれと「S 90」は探照灯を使用しその地域を探索したが、敵の痕跡は見つからなかった。いまや全乗組員が戦闘態勢にあり、戦闘服を着たままハンモックで眠っている。

1914年9月27日

朝から晩まで敵の陣地に砲撃を加えて成果をあげた。午後、「カイゼリン・エリーザベト」も膠州湾にやってきて周辺地区の陣地に榴散弾を浴びせた。

1914年9月28日

夜の間日本軍がシュピッツベルク [労山の一郭] に到達したため、われわれの前哨部隊は後退しなくてはならない。しかし、われわれは敵に砲撃を加えてまたも成果をあげた。おそらく彼らはこの場所でそのような抵抗を受けるとは思ってもいなかったであろう。夕方、

「ルクス」、「イルティス」、そして「コルモラン」が自沈した。「SMSティーガー」は造船所での緊急時の水確保のために引き続き予備艦とされた。夜8時にわれわれの信号所、イルティス山砲台、ビスマルク山砲台が日英軍混成艦隊による海上からの砲撃を受けた。「トライアンフ」[英国艦]はわれわれの海上要塞から甲板に命中弾を受けた。

1914年9月29日

暗闇に紛れて日本軍は煉瓦製造工場と絹紡績工場に到達し、これらを占拠した。彼らはその近くに4門の(15センチ)大砲を備えた砲兵隊陣地を配備したが、われわれは完全にこの陣地を破壊した。その際、われわれは他の砲兵隊から砲撃を受けたが、その砲兵隊をすぐに沈黙させた。40分継続したこの戦闘中、われらが「ヤーグアル」は損傷を受けることはなかった。午後4時、「S 90」に任務が引き継がれ、その後、われわれは石炭の積込みのために石炭庫のある埠頭に向かった。

1914年9月30日

砲撃戦が続いている。われわれは、日本軍の2つの重要な陣地を砲撃することに成功した。彼らは、今、われわれを屈服させようとさらに大きい大砲を戦列に並べているが、そう簡単にはいかせない。

1914年10月1～3日

ここ数日來のわれわれの主要任務は味方陣地の左翼を援護することであり、それは成果をあげていた。日本軍はわれわれに対する強力な陣地を構築しはじめ、われわれはそう簡単には完成させないように、必要な妨害策をとっている。われわれは今ではつねに膠州湾内にとどまり、測量船から食糧を供給されている。石炭も同様に海上で補給している。

1914年10月4日

今日日曜日にわれわれを徹底的に「本国送還兵士」にしようとして、またも日本軍の飛行機が2機やってきた。同時にわれわれは重砲台によって地上からも砲撃を受けた。われわれは前方マストに21センチ砲の大きな弾片を受け、さらに甲板にも多くの弾片を受けたが、怪我をした者は誰もいなかった。味方の小泥洼シャオニワ [台西鎮] 砲台(21センチ砲)がわれわれを援護してくれたのである。

1914年10月5日

午前中本艦の乗組員15名が塹壕^{ざんごう}を補強するために陸に上がった。命令に従って本艦はこれよりわが軍の重砲隊を監視する任務についた。敵の砲兵隊がブイを砲撃して破壊してしまったために、われわれはこれまでの場所をもはや通過できなくなったので、新しいブイを投入しなければならない。

1914年10月7日

近日中に敵の急襲が予想されるので今月の6日付で全帳簿を締めるようにと総督府から命令があった。陸上では今や昼も夜もぶっ通しで砲撃戦が行われている。

1914年10月8日

朝は石炭の積込み。その後で中甲板から2門の8.8センチ砲とすべての3.7センチ機関砲、それに付属の弾薬類が陸に降ろされた。噂によると「ヤーグアル」の乗組員は[膠州]湾の対岸に上陸して中国の領土に行こうとしているのだそうである。

1914年10月9日

今日は大部分の乗組員が陸に上がった。一部は昨日陸上に設置された大砲の操作のため、一部は海軍中隊の強化のためである。われわれ二等焚火兵のなかからも、陸にあがらなくてはならない者たちが出た。こうなるとわれわれ艦内勤務の者にとってはさらに厳しい状況になる。なにしろその分の仕事がこちらの双肩に掛かってくるからである。だが、われわれはよく励んだ。ボイラー室に下りるとき、いつも思うのは、果たしてわれわれはふたたび日の光を見ることができるのだろうか、ということである。ある出撃の際、私はちょうど当直についていたのだが、艦首前方に命中弾を受けた。しかし、その砲弾は危険なものではなかった。このとき私は6時間にわたって当直を務めたが、戦闘が終わってうれしかった。今やボイラー室にいるのはわずかに4名のみで、蒸気ボイラーに2名が常駐し、2名が石炭を運び込む。11時頃に本艦は「S 90」とともに再度出撃し、敵の陣地^{ひそ}を秘かに偵察しようとしたのだが、激しい砲撃のためにすぐに引き返さざるをえなかった。われわれの大砲はもはや敵の陣地に届かなかったので、監視役として湾内にとどまるしかなかった。

1914年10月10日

この日、敵機1機がわれわれを訪問し、本艦「ヤーグアル」と「カイゼリン・エリーザベト」に対し、狙いの的確な爆弾数発の贈り物をよこした。

1914年10月11日

正午頃にイルティス山が海上から砲撃を受けた。この陣地には2度の砲撃で30.5センチ砲およそ45発が落とされたが、特段の被害には至らなかった。

1914年10月12日

今日午前、われわれがふたたび孤山陣地グシャンに向けて出動したところ、敵からの砲撃はなかった。夜10時頃、「S 90」が敵艦隊の囲みを破って出撃しようとした。しかし、11時頃、その務めを果たせないまま帰還した。

1914年10月13日

朝8時にわが軍の飛行機が偵察飛行のために飛び立った。日本軍の飛行機1機に追跡されたが、ピストルを撃って相手を牽制し、無事に味方陣地内に着陸した。10時頃われわれはふたたび出撃して、孤山にある砲台を発見した。われわれは雨あられのごとく激しく砲撃されたが、命中はしなかった。無線で地上に偵察事項を連絡すると、それに応じて台西鎮砲台から敵陣地に砲撃をあげ、上々の戦果をあげた。

1914年10月14日

今日午前、台西鎮〔砲台〕が海上から30.5センチ榴弾で砲撃された。その弾着の様子は対岸にあるイェシュケ岬〔注42〕から見えた。夕方6時に石炭を積込む。8時頃2隻の貨物船、「ドゥーレンダート」と「エレン・リックマーズ」が内湾への入り口で沈められた。アメリカ領事が青島から退去した。

1914年10月14日

警告

1914年10月3日 軍司令部

敬愛する要塞の将兵諸君！

まだ使用に耐える武器、軍艦および建造物を、戦術上の要請に供することもなく、無為にしてしまう、しかも、それらが敵の手に渡る事をねた妬ましく思いつつ行くとすれば、それは神の意思にも人道にも背くことであろう。われわれは将兵諸君がこのような無思慮な行為を実行することはないと考えることはできるのだが、以上述べたことをわれわれの意見として敢えて表明させていただきます〔注43〕。

攻囲部隊司令部

<サイン>

このビラは日本軍機によって青島湾の岸辺に、5枚ずつ巻いた形で3本が投下された。

[この部分、別紙に記載し右側に添付]

1914年10月17日

今朝、「カイゼリン・エリーザベト」が孤山砲台から激しい砲火を受けた。すこし反撃した後、同艦は巧みな操船によって命中弾を受けることなく最前線から引きあげた。

1914年10月18日

今晚、「S 90」がわれわれに別れを告げるため横付けしてきた。というのは、同艦は夜に突破作戦を計画していたからだ。「S 90」の戦友たちはすでに敵軍に近づくことを楽しみにしていたが、われわれはこの突破作戦に加われないことを残念に思うばかりだった。翌朝、「S 90」は日本の巡洋艦一隻 [\[注44\]](#) を沈めたが、別の巡洋艦を追跡中、触雷して損傷を受けたことが明らかとなった。「S 90」はもはや戻ることができず、乗組員が陸に上がるのを待って爆破せざるをえなかった。

1914年10月20日

航海日誌によれば、「SMSヤーグアル」は約900発という最も多くの砲撃を受けた艦であるが、その中でわずかに擦過弾が1発あったにすぎない。甲板に飛び散った砲弾の破片が示すところでは、その砲弾は15~24センチであった。荒天のためわれわれはさらに湾の内側に停泊しなければならなかった。

1914年10月24日

われわれは一晩中歩哨についた。というのも、日本の水雷艇がこの天候に乗じて機雷封鎖域の突破を試みるだろうと思われたからである。朝になってわれわれは、「S 90」の乗組員が中国軍に捕まり南京に送られたと聞いた。爆破された艦は中国兵によって監視されている。日本軍は歩兵堡壘まで進軍してきており、今や陸と海から青島に砲撃を開始してきた。わが軍の砲台も昼夜を問わず砲撃を行っている。

1914年10月27日

あらゆる障害をものともせず、日本軍は重砲隊を青島の目前まで移動させ、陣地を確立した。すでに四方に歩兵隊が置かれている。砲撃が続いている。皇帝陛下が、電報で、勇猛なる青島守備兵に温かい言葉をかけてくださった。

1914年10月28日

午後、内湾に停泊していた「ティーガー」が孤山から砲撃を受けた。しかし、損害はなかった。われわれは湾の反対側から敵の軍用車両の隊列に砲撃を加えた。

1914年10月29日

朝8時から午後1時まで、第1歩兵堡壘と会前岬砲台に対し、海から大口径弾による砲撃が加えられた。損害は、電信柱4本、銃剣1本、小銃1丁。ただし、小銃はまだ遊底が使用可能である!!

1914年10月30日

今日、孤山の21センチ砲台が「ティーガー」に150発浴びせてきた。102発目が後部煙突に命中した。さらに甲板にも命中弾を2発受けた。午後9時「ティーガー」は湾内の41メートル地点〔最深部〕で自沈した。

1914年10月31日

今日午前ふたたび大きな砲撃が陸と海からあった。砲火は主に第3、第4、第5歩兵堡壘、イルティス山砲台、ビスマルク山砲台および信号山砲台、台西鎮砲台および会前岬砲台に集中した。昨夜、アメリカ石油株式会社の貯蔵タンクが砲撃され、いまも炎上している。午後にはドイツのアジア石油会社の貯蔵タンクも燃えあがった。夜遅くに暗闇に紛れて湾内で石炭の積込み。夜中に造船所数カ所と150トンクレーンの爆破が行われた。われわれはいつ何時あるかもしれない急襲に備え、ただちに戦闘に加わることができるように、昼も夜も部署に就いていた。寝ている暇はあまりなかった。ボイラー室から出るや戦闘配置である。

1914年11月1日

日本軍は砲撃を続け、朝には、いまにも急襲をしかけてきそうな様子だった。日本軍の歩兵隊は新型モデル（6ミリ）の銃〔当時の主力銃の（口径6.5ミリの）三八式歩兵銃のことか〕で撃ってくる。午後5時、われわれの親愛なるフォン・ボーデッカー艦長が病気のために下艦

した。われわれは艦長を悄然と見送った。彼は乗組員全員からとても好かれており、幾度もわれわれを戦火から救い出してくれたからだ。これからは副長を頼るしかない。彼があまり勇猛ではないこと、むしろ艦長とは正反対であることは誰もが知っていた。夜中に造船所にある機械作業室および修理工場の爆破が行われた。

1914年11月2日

砲撃が続いている。午後3時、「カイゼリン・エリーザベト」は最後の弾薬を孤山陣地に撃ちこんだ。

1914年11月3日

夜中1時頃、陸上で警報が鳴り響いた。われわれは戦闘に加わるため、突撃を試みたものの第3および第4歩兵堡壘が砲撃されたためになかなかつた。弾丸、ロケット弾、照明弾、彩光弾が激しく入り乱れていた。孤山砲台に見つけられ、われわれは15センチ榴弾の激しい砲火を浴びた。ほとんどすべての砲弾が実によい狙いだった。われわれが幸いにも無傷で砲撃を免れたのはひとえに操舵手のおかげであった。急襲がいつ起こってもよい状態にあるため、艦にまだあったほんのわずかな所持品も自分たちでつくった背囊はいのうに入れて、準備を整えなければならない。われわれは皆、市街戦を覚悟していた。最後の一兵になるまで戦うつもりであった。夜、「カイゼリン・エリーザベト」も湾内で自沈し、乗組員たちは塹壕に入った。これで「ヤーグアル」は青島でいま防衛に参加している唯一の艦となった。

1914年11月4日

「オトモダチ」が今日は、直接われわれ「ヤーグアル」に狙いをつけてきた。その爆撃の狙いはとても的確だった。1発は艦首ぎりぎりに、2発は右舷ぎりぎりに落ちた。

1914年11月5日

ここ数日というもの、すぐに戦闘に加わることができるよう、われわれはつねに準備態勢を維持しなければならない。9時30分、われわれはふたたび孤山に向けて出動し、第5歩兵堡壘の前面におよそ25発の砲弾を打ち込んだ。退却の際気づいたのだが、われわれは反対側から背面の砲台によって必然的に砲撃を受けることになる。しかし、われわれは100発の砲弾を撃ち込んで、弾薬運搬車もろとも砲台にとどめを刺した。副長が総督府に、「ヤーグアル」を爆破すべきかどうか、また、爆破するならいつにすべきかを問い合わせた。なぜなら、われわれは背面のいくつもの砲台に全方向から囲まれているからである。午後、副長も病気

(?) のためなのか下艦した。夜10時、台西鎮砲台は弾薬が尽きたために大砲を爆破した。

1914年11月6日

総督府から命令が下った。「「ヤーグアル」を極限まで維持せよ」とのことである。夜10時頃、われわれの新しい艦長であるミュンデル少佐 [\[注45\]](#) が乗艦し、ただちに偵察に向かった。

1914年11月7日

夜中の2時頃、信号山から作戦行動を起こせとの命令がくだった。日本軍が突撃に転じたのだ。われわれはとうに造船所のすぐわきを進んでいたが、敵の陣地に最後の砲弾を放ち、それによって第5歩兵堡壘への攻撃を撃退した。われわれは孤山砲台から激しい砲撃を受け、退却するしかなかった。陸上では大砲と機関銃による激しい攻撃。われわれの大砲はすべての弾薬が尽きたためもはや沈黙している。突然、信号所が最後の合図をわれわれに送ってきた。5発の白色発光信号弾、すなわち、「ヤーグアル」を爆破せよ、の合図である。われわれは41メートル地点に向かった。いよいよ「小銃と背囊の用意なせ、の号笛」が吹かれる。乗組員を陸に運ぶため補給船の「ブッサルト」と「ハービヒト」を舷側に横着けせよとの命令が下った。全員が艦尾のほうに整列した。艦長がわれわれに対して状況を報告し、われわれが皇帝陛下と祖国への万歳を三唱すると、艦長は艦を降りていった。次に弾薬が支給され、どこから食べるものをもらえるのかは知る由もなかったのだが、パンも分配された。食堂にある備蓄も分配されたが、ちょうど私はブリケット [練炭の一種] の当直であったので、交代のためにボイラー室へ行かなくてはならなかった。青い制服に上着も着たままだった。戦友と一緒に爆破のためにボイラー室での最後の作業を行った。私は最後の乗員として艦を降りた。われわれがちょうど「ヤーグアル」から20メートル離れた時、爆発が起こり [「ヤーグアル」は] われわれの視界から消えた。「ヤーグアル」とともに私の財産の一部も消えた。それからわれわれは「カイゼリン・エリーザベト」の乗員の一部がまだいる機雷保管庫へ向かった。上陸隊に属し銃を持っている者たちはフリーゲルキャンプ少尉の指揮下で、必要とあれば、一緒に行動するために総督府に向かわなければならなかった。私は機雷保管庫にとどまり、これから降りかかってくる出来事をひたすら待っていた。何より腹がたったのは私には手元に武器がないことだった。朝7時頃、われわれの上官であるレップラー砲兵将校がわれわれに、前夜日本軍が歩兵堡壘の第3と第4の間を突破したことを知らせてくれた。われわれは10倍優位に立つ敵軍に直面しており、無用の流血を避けるためにいまや白旗が掲げられたということである。われわれ皆にわかっていたことが起こったのである。極東

の小ドイツである青島は陥落した。10週間もの長い間4万人の兵力に対して戦ったが、その兵力に対してわれわれが動員できたのはわずか3,900名だった。われわれは敗者ではなくむしろ勝者だと感じ、少数で守りを固めた町を奪うためにこんなにも長い時間を必要とした敵軍を笑った。われわれは日が暮れるまで機雷保管庫にとどまり、その前には歩哨が1名立っていた。今からわれわれは日本軍の捕虜なのだ。現在、交渉と町の引き渡しが行われていた。日が暮れるとわれわれは機雷保管庫の一部である兵員室に入り、健やかに眠れる夜が来るのを早くも楽しみにしていた。午後9時、われわれは荷物を持って一時的に収容されることになったビスマルク兵営に向かった。

1914年11月8日

よく眠れなかった夜が明け、私は服を完全に着込んだ状態で板張りの寝台に横たわっていた。非常に寒かったからである。午前から午後にかけてわれわれは墓地へ行き、戦死した戦友たちのために最後の安らぎの場を整えた。

1914年11月9日

午後、福音派、カトリック、ルター派の聖職者たちの心打つ言葉の後、われわれの戦友の埋葬が行われた。青島にいるすべてのドイツ人がこの式典に参列するため姿を見せた。私は久しぶりに女性と子供たちを見た。第3海兵大隊の戦友たちが礼砲を撃ち、われわれは深い感銘を受けて墓地を後にした。

1914年11月9日

日本軍が青島で獲得した戦利品

大砲	24門
機関銃	100丁
小銃	2,500丁
砲 - 弾薬類	なし
小銃 - "	多
	12,000円
糧食	5,000人 3ヵ月分
衣服	なし
公的建造物	10棟

自動車 40台、内20台は使用可

船舶 なし

石炭 多

日本軍はわれわれに対し140門の大砲を戦場に設置し、その多くは大口徑であった。大型巡洋戦艦3隻。内30.5センチ砲を装備したイギリス軍の巡洋戦艦1隻、そして何隻かの小さい巡洋艦および数隻の水雷艇があった。われわれドイツ軍は戦線に3,900名いたが、日本軍は40,000名であった。われわれの軍の戦死者は約500名であったが、日本軍は約15,000名であった。

<サイン>

[この部分、別紙に記載し右側に添付]

1914年11月10日

必要な準備を終えると、われわれは営庭に集合した。フォン・ケッシーンガー中佐 [\[注46\]](#) が挨拶を述べ、最後は「皇帝陛下ならびに祖国万歳」の三唱をもって締めくくった。わずかな自分の荷物を背負い、われわれは青島を後にして台東鎮への途につき、その日のうちに到着した。ここでは中国人の汚いあばら家に宿営させられた。われわれはまずこのあばら家を掃除しなくてはならなかった。曲がりなりにもその中で寝られるようにするためである。この村は砲撃で完全に破壊されており、粗末な家々の瓦礫の下には避難しそこねた沢山の中国人が死んで横たわっていた。日本軍に許可されたので、われわれはこの村の中は自由に歩き回ることができた。

1914年11月11日

われわれは准士官らとともに宿営することになったが、彼らがこの「ぼろ家」をお気に召さなかったため、今日は新たな宿所を探すことになった。当然、「家畜小屋」をまたもや掃除するという楽しい作業もさせられた。食事は自分たちが持参した備蓄食糧を使って自分たちで用意した。主に保存食ばかりである。まずは自分たちでかまどを作らなければならなかった。まるで放浪民の暮らしそのものだった。

1914年11月14日

今朝は2時30分に起床、3時30分に行軍を続行するために整列した。4時半頃自分の荷物を背負い、まだ眠りについている台東鎮を後にした。キャラバンのようにわれわれの隊列は

目的地^{さしこう}沙子口に向かって前進した。それは見た目に色とりどりの隊列だった。水兵、海軍および海軍砲兵隊からなり、荷物を持って運んだり、人力車で運んだりする中国人のクーリーも入り交じっていた。途中大きな車両集積場や日本軍が青島を前にして使用していた数多くの大砲を目にした。車両の大多数は2輪の荷車だった。ある村の近くで行軍が休止しているあいだに、私は元気を回復するために梨をいくつか買った。携行している糧食が乾パンと水だけだったからである。8時間にわたるきつい行軍の末、12時45分頃、われわれが乗船する港である沙子口によりやく到着した。4時になるまでなお陸にいたが、その間に一籠の梨をめぐって中国人たちと交渉し、15セントで（籠ごと梨約30個を）手に入れた。4時にはしけを使って乗船が始まった。われわれは「第2ヨーロッパ丸」に乗船した。収容されたのは中甲板の前方で、そこで眠った。ほとんどウサギ小屋状態であった。われわれの食事はお茶とよばれるお湯、飯、乾パン、そしていやに甘ったるい味の缶詰の肉だった。劣悪な寝床にもかかわらず私はその晩ゆりかごの中にいるかのように眠った。

1914年11月15日

固い寝床で密集して横になっていたのも、今日になって私は様々な影響を感じた。一日中節々が痛かった。寒さも必然的に加担していた。朝7時頃出航し、沙子口湾を後にした。われわれのすることといえば眠ること、食べること、飲むこと、そしてトランプをすることだった。食事は飯、湯、乾パン、缶詰の肉だった。温かい食事に代えて「我ふたたび故郷へ帰らん」^[注47]を歌うしかなかった。

1914年11月16日

今日、われわれは下関海峡に着いた。海峡の両側には日本のすばらしい風景が横たわっていた。ここは主に海運が盛んである。なにしろ、日本の大きな内海に通じる主要な海峡なのだから。

1914年11月18日

朝7時頃にわれわれの船旅の目的地である宇品^{うじな}^[注48]に到着した。しかし、われわれはなおも船にとどまっていなければならず、この時間をさまざまな気晴らしをしてすごした。今日も温かい食事にはありつけず、われわれはまたもやいつもの「腹ぺこマーチ」^[注49]を歌うしかなかった。今日聞いたところでは、あと2日船にいななければならない。私はこの日のうちにこのみすばらしい「舷側掃除用ボート」から下船できると期待していたのだが。そんなわけで私には、船の中から近辺の様子を観察する機会がたっぷりあった。ここから見え

たのは、高い山々に囲まれた大変美しい港の景色だった。はるか後景の山のふもとには広島
の町があるのが見えた。

1914年11月20日

午後1時に、われわれは上陸を開始した。駅前の広場に整列させられ、そこで各人に番号
が割り当てられ、行動規則も伝えられた。さらにここで知らされたのは、われわれは東京に
行くことになっていて、それにはこれから列車で46時間かかるということだった。夕方6時、
われわれは車輛を指定されて乗車した。なかはひどいすし詰め状態だった。荷物は手荷物車
輛に載せられた。7時頃に列車は動き出し、われわれを乗せて日本の中心へと向かった。各
車輛に3人の監視がついていた。列車のわれわれ一行は総勢300人ほどだった。

1914年11月21日

半ば寝たり半ば起きたりするうちに一晩が過ぎた。朝、両側に見える素晴らしい景色がわ
れわれにたっぷりと気晴らしを提供してくれた。早朝5時36分、初めて岡山で48分間停車し
た。ここで、各自、ゆで卵2個、白パン、そして温かいお茶をもらった。われわれは、停車
する駅ごとにこれと肉と冷えた皮付きジャガイモとを交互にもらった。10時30分、姫路で1
時間の停車。9時12分、神戸を通過。ここで、われわれは ^{いかりやま} 錨山 [注50] の素晴らしい眺めを
見る事ができた。駅では、数名のドイツ人から挨拶を受けた。一人の日本人女性が各車両
に近づいてキャンディーを配ってくれた。4時34分にわれわれはかつての日本の首都である
京都を過ぎた。

1914年11月22日

朝7時、静岡に到着した。午後3時5分頃、横浜を通過し、4時30分に東京の近郊の町で
あり、われわれの列車旅の終着駅である品川に到着した。われわれが通過した駅は以下の通
りである。

1 Oitsima	うじな 宇品	6 Kochi	こうち 河内
2 Katachi	かいたいち 海田市	[6・7間に「本郷」が抜ける]	
3 Seno	せの 瀬野	7 Mihara	みほら 三原
4 Hachkumatsu	はちほんまつ 八本松	8 —	いとざき [糸崎]
5 Saigo	さいじょう 西条(西條)	9 Onomicha	おのみち 尾道
	[5・6間に「白市」が抜ける]	10 Watsunaga	まつなが 松永

11	Fukuijama	ふくやま 福山	38	Osaka	おおさか 大阪
12	—	[この間5駅]	39	Suita	すいた 吹田
13	Kurashiro	くらしき 倉敷	40	Ibaraki	いばらき 茨木
14	—	にわせ [庭瀬]	41	Tahazuki	たかつき 高槻
15	Okamaja	おかやま 岡山	42	Yamazaki	やまざき 山崎
16	—	[16・17で8駅]	43	Mukōmashi	むこうまち 向日町
17	—		44	Kioto	きょうと 京都
18	Naba	なば 那波[現：相生]		[44・45間に「稲荷」が抜ける]	
19	Tatsumo	たつの 龍野	45	Iamashia	やましな 山科
20	Aboshi	あほし 網干		[45・46間に「大谷」が抜ける]	
		[20・21間に「英賀保」が抜ける]	46	Otsu	おおつ 大津
21	Himeji	ひめじ 姫路	47	Iuarsh	いしやま [石山]
		[21・22間に3駅抜ける]	48	Kunatsu	くさつ 草津
22	Kakogaw	かこがわ 加古川	49	Morijawa	もりやま 守山
		[22・23間に2駅抜ける]	50	Yasu	やす 野洲
23	Mashi	あかし 明石	51	—	はちまん [八幡]
24	Maiko	まいこ 舞子	52	Ashusaki	あづち 安土
25	Tarumi	たるみ 垂水		[52・53間に「能登川」が抜ける]	
26	Saioja	しおや 塩屋	53	Kaisasse	かわせ 河瀬
27	Suma	すま 須磨	54	Kikone	ひこね 彦根
28	Tokatori	たかどり 鷹取	55	—	[該当なし]
29	[29・30は空欄。不明。]		56	Maibaira	まいばら 米原
30			57	—	さめが 醒ヶ井
31	Hyogo	ひょうご 兵庫	58	—	ながおか [長岡]
32	Kobe	こうべ 神戸	59	Kishinibesa	かしわばら 柏原
		[以上、山陽線。ここから東海道線]	60	—	せきがほら [関ヶ原]
33	Sanowija	さんみや 三ノ宮	61	Tarui	たるい 垂井
34	Sanijoski	すみよし 住吉	62	Ogaki	おおがき 大垣
35	Ashiga	あしや 芦屋		[62・63間に3駅抜ける]	
36	Nishinomija	にしみや 西ノ宮[現：西宮]	63	Ihinomijo	いちみや 一ノ宮
37	Kauzaki	かんざき 神崎[現：尼崎]	64	—	いなざわ [稲沢]

65	—	びわじま [枇杷島]	57	Mishima	みしま 三島
66	Nagoja	なごや 名古屋	58	Sano	さの 佐野
67	Atsuta	あつた 熱田	59	Gotenba	ごてんば 御殿場
68	—	おおだか [大高]	90	Surug	するが 駿河
69	Obu	おおぶ 大府	91	Iamakita	やまきた 山北
70	Kaziga	かりや 刈谷	92	Matzuda	まつだ 松田
71	Anijo	あんじょう 安城	93	Kotsu	こうづ 国府津
72	Ohazaki	おかざき 岡崎	94	Ninomiga	にのみや 二ノ宮
73	Kowakon	[?]	95	Oisa	おおいそ 大磯
74	[73~75には幸田—蒲郡—御油—豊橋	こうだ がまごおり ごゆ とよはし	96	Hairadzu	ひらつか 平塚
75	—二川—鷺津—新居町—辨天島—舞	ふたがわ わしづ あらいまち べんてんじま まい	97	Chigasaki	ちがさき 茅ヶ崎
	坂—浜松—天竜川—中泉—袋井—	さか はままつ てんりゅうがわ なかいづみ ふくろい	98	Fujioga	ふじがわ 藤沢
	掛川—堀ノ内がある]	かけがわ ほり うち	99	Ohena	おおぶね 大船
76	Kamaja	かなや 金谷	100	Totsuka	とつか 戸塚
77	Mishomao	[?]	101	Kadogaija	ほどがや 保土ヶ谷
	[島田—藤枝—焼津—用宗のいずれか]	しまだ ふじえだ やいづ もちむね	102	Yokohama	よこはま 横浜
78	Shidomoku	しずおか 静岡	103	Kanagawa	かながわ 神奈川
79	Ieyire	えじり 江尻	104	Higashikauema	ひがしかながわ 東神奈川
80	Okitsen	おきつ 興津	105	Tsurumi	つるみ 鶴見
81	Kambara	かんばら 蒲原	106	Kasawashi	かわさき 川崎
82	Iwabushi	いわぶち 岩淵	107	Kamara	かまた 蒲田
83	Fuji	ふじ 富士	108	Oinoni	おおもり 大森
84	Satzukawo	すずかわ 鈴川		[108・109間に「大井町」が抜ける]	
85	Kara	はら 原	109	Shimagawa	しながわ 品川
86	Numadzu	ぬまづ 沼津	110	Shimagawa	[?]

われわれは品川に到着し、これまでの人生でまったく見たことのないような最高に素晴らしい日本縦断汽車の旅の終わりを迎えた。素晴らしい山地を通り、広い川筋を渡り、日本で一番大きく最も崇高な山である富士山の麓のトンネルを通り抜けた。富士山は火山を起源にした山で、この種の山が日本には170あるそうだ。山腹は雪に覆われていてはるか遠くからでもそれとわかる。神戸付近では列車の中から錨山がよく見えた。どの駅でもわれわれは大

勢の野次馬たちから驚嘆され、じっと見つめられたりした。何しろそれらのどの地方でもめったにドイツ人が来たことがなかったのだから。4時には東京から二駅手前にある品川駅に到着した。駅付近の通りや広場はあふれんばかりの人で混みあっていた。やっと下車の命令がおりた。すでにホームにいたときから数えきれないほど何度も写真を撮られたが、それは他のたいていの駅でも同じだった。われわれは列車の前で整列し、50名ずつの班に分けられた。それが終わると、突然一人の日本人女性が供の者を連れて現れ、花を配った。皆が一本ずつもらった。よく見てみると小さなメッセージカードが付いているのに気づいた。そこには次のように印刷してあった。

あるドイツ人ご夫婦がわたくしに親切にしてくださったことに
感謝の意を込めて、皆さまにご挨拶を申し上げます。

ハママ アキ夫人

[葉山あき]

東京[市]芝[区]南佐久間町一丁目一番

[現：東京都港区西新橋一丁目一番付近]

この挨拶はわれわれ一同に大きな喜びを与えた。私は不思議な気分になった。捕虜なのに花の贈り物をもらう、しかも、敵国にいるというのに。花を胸に飾ってわれわれは駅を後にした。駅前で大群衆による出迎えを受けた。彼らは「万歳！万歳！」と叫んでいた。この叫び声が喜びなのか感嘆なのかそれとも怒りなのか私にはわからなかった。四方八方から写真と活動写真の撮影が行われた。警察と軍隊はわれわれが乗る市電までの通り道を確保するだけで精いっぱいだった。こうしてわれわれは市電でほぼ東京全体を通り抜けた。それはわれわれが見世物にされているように思えた。われわれが通った道はすべて人でいっぱいだった。そのため、人々が道を塞いでいるので、市電はしばしば停車しなければならなかった。2時間乗った後、われわれの目的地に到着したが、そんなことはわれわれの誰も知らないことだった。ここで下車ということになった。われわれは人混みをかき分けて大きな門に向かっていった[注51]。その門は広い中庭に続いていた。そこはそれほど混んでいなくて、2つ目の門を通り過ぎたときには、人混みを脱していた。全員が集合すると、お堂の前で整列しなければならなかった。必要な報告が行われると、別のお堂に移った。その上り口では靴を脱がなければならなかった。その後、われわれは広間に集まり、捕虜収容所の所長である侯爵西郷中佐[注52]の片言のドイツ語のスピーチで迎えられた。そして、行動規則が読み上げられた。それから、それぞれの宿舎を割り当てられた。木の壁、紙の窓[障子]、藁の床[畳]の部屋だった。われわれは夕食をとるため、すぐに個々のグループに分かれた。長い間の乾

パン食だったが、ついに何か違うものに見つけた。それがそもそも何なのか、わからなかったが、その食事は美味しかった。ただ、量が十分ではなかった。食事の後、荷物が届き、久しぶりに着替えをして、リラックスすることができた。各自就寝用に毛布6枚、シーツ2枚、そして枕1つを受けとった。床が寝床であった。46時間の旅の後なので、この夜、私はぐっすりと眠った。

1914年11月23日

今朝6時半にわれわれはラッパの合図で起こされた。10分後に朝の点呼のために整列した。お茶とパンとバターの朝食が出た。日本側の待遇は大変に人道的である。午前中、小本堂の前にある中庭で1時間半の運動があり、同じように午後にも1時間ある。また、今日は新しい収容所を詳しく観察する機会をたっぷり持つことができた。現在ここでは盛大な法要が行われているので、まだわれわれは自分たちの運動はできなかった。そこで、ここではみんなトランプをしたり、読書をしたり、ものを書いたり、たばこを吸ったりして暇をつぶしている。ここには酒保が一つあり、ちょっとしたものなら何でも買える。私はここで最後の持ち金を両替した。18ドルだった。私は今日、4ヵ月ぶりに故郷に宛てて手紙を1通とはがきを4通書いた。

1914年11月29日

今日は運動したあと、10時半に礼拝が行われた。礼拝は東アジア海軍分遣隊の宣教師によって行われた。簡潔なものだったが、大変感動的でよい説教であった。また、夕方にはポナペから2人のドイツ人兵士がやってきた。彼らはポナペで医師の治療を受けているときに日本軍に捕えられたのだった [\[注53\]](#)。

1914年12月4日

夕方6時に同じ収容所にいたユーバーシャール博士殿 [\[注54\]](#) が日本についての大変興味深い連続講演を始めた。第1回のテーマは「日本の国土と国民」であった。

1914年12月5日

午前中に日本人医師による予防接種を受けた。

1914年12月6日

今日ここにいくつかの慰問品が届いたが、それはもっとも援助を必要とする者のためと指

定されていた。

1914年12月7日

今日、東京の仏教徒の団体が青島の戦いで亡くなった日本人とドイツ人たちに敬意を表して法要を行ってくれた。法要が終わるとわれわれは全員が小さな贈り物もらった。

1914年12月8日

今日もまた日本人の一等軍医 [吉岡量平] による健康診断があった。戦争に起因すると思われる負傷や内臓疾患の検査である。私の体重は19貫40^{もんめ}匁 [72.75kg] であった。このときからわれわれも故国の戦場のニュースをより多く得ることができるようになった。われらがクロー中佐 [注55] がいつも英字新聞から最新のニュースを読みあげてくれたからである。新聞はいつもひどい嘘を書くものだが、われわれは行間から故国の戦友たちがゆっくりではあるが確実に前進していることを読み取ることができた。戦勝が報じられるたびにいつも大いに喜んだ。なにしろわれわれはすぐにでもまたここから出撃したいと望んでいたのだから。夕方6時に講演の続きがあった。テーマは「日本の憲法」。

1914年12月11日

無為に過ごしたこの日、夕方に日本の宗教「神道」についての講演があった。

1914年12月15日

これまで日本人が取りしきってきた厨房を今日われわれ自身が引き継いだ。日本人の料理も馬鹿にならないが、われわれの料理人がわれわれのために調理した食事の方がもちろんわれわれには日本人の料理より口にあう。夕方6時にふたたび講演の続きがあった。テーマは「日本のキリスト教と仏教」。

1914年12月23日

運動の後はクリスマスの準備をした。色とりどりの紙や厚紙を手に入れて鎖飾りや壁の張り紙を作成した。宿舎をできるだけきれいにするために全員が最善を尽くした。

1914年12月24日

外国で初めてのクリスマスを体験した。しかも、日本の東京で捕虜として。われわれみんなが喜んだのは、とても素晴らしいクリスマスツリーも手に入れることができたことである。われわれドイツ人にはこの木なくしては楽しいクリスマスを思い描くこともできない。樅の

木は南日本や中部日本〔関東以西〕にはないために、東京のキリスト教日本青年協会の呼びかけで、北日本に住むドイツ人の学者とドイツで博士号を取った日本人の学者の二人が、最高に美しい55本の樅の木を捜し出し、各地の捕虜収容所に送ってくれたのである。日本の鉄道当局も急行列車による輸送を無料にしてこれを支援してくれた〔注56〕。われわれがすべての飾りつけを済ますと、夕方6時に式典が始まった。それからわれわれの愛する故郷の人たちから寄贈されたたくさんの贈り物の配布が続いた。

1914年12月24日〔注57〕

クリスマスのプロローグ

こんにちは、中へどうぞ、
幸せをこちらへ届けてください
と多くの玄関の上に書いてある。
ここには書いてないが、私は入るよ、
君たちの愛する人たちの挨拶を届けるために。
私は少しの時間しか居られない、
あちらこちらのドイツ人のところへ急がねばならないのだ。
フランスとベルギーにはもう行った、
そして塹壕の中でプレゼントを配ってきた。
まさにクリスマス日和の銀世界で凍りついていた。
けれど誰の機嫌も損ねることはなかった。
ドイツ人なら誰もがきっと知っていることだが、
まもなくパリに向かって進撃が始まる。
ポーランドではドイツ人たちの明るい顔を見て、
両手いっぱいプレゼントを贈ってきた。
ロシアの荒くれどもにもプレゼントを贈ってやりたかった、
だが、まもなくそこで私の手持ちが底をついてしまった。
なにしろ、いくらそうしたくとも足りなかったのだ、
われわれが捕らえたのが50万人もいては。
ドイツで、私は聞いた、つぎは日本へ行きなさい、
そして捕らえられた者たちの面倒をみてきなさい、と。

しかし見たところ、君たちは皆たいへん元気だ。
そして皆上機嫌だ。
君たちは収容所生活が気に入っている、
そして今日は現金までもらった。
フランスやイギリスの様子はそうではない
そしてシベリアときたら恐怖そのものだ。
そこでは同胞たちがどれほど虐げられ酷使されていることか。
だから今日は君たちに警告として伝えておく、
君たちの感謝の念を日本人に表すべきであり
それは君たちが模範的に振る舞うことによって示されるのだ、と。
君たちが青島で勇猛果敢に戦ったことは、
私も天国でなにかで読んで知った。
それを心底感謝する気持ちから
同胞たちは君たちにどっさり贈り物をしたのだ。
中国と日本から贈り物の木箱が殺到したのは
君たち一人ひとりの欲求を満たすためだった。
北京、天津、神戸、横浜、そしてことのほか称賛の意を込めて言うが
東京から、こんなにもたくさんの贈り物が届いて、
君たちのどんな願いもかならずかなえられるほどである。
君たちは決して不平を言うてはいけない、
それではごきげんよう、戦友たちよ。
これからも行いを良くしなさい
楽しい気持ちでクリスマスを過ごしなさい。
そしてまたよい新年を迎えなさい、
サンタクロースは君たち全員にそう願っている。

1914年クリスマスに、東京俘虜収容所にて朗読された。

私は防寒シューズ1足、リンゴ4個、クルミとピーナツ、レープクーヘン1袋、そして紙巻きたばこ1箱をもらった。さらに全員がくじを引いた。何が手に入るかは運次第であった。私の箱には靴下1足と便箋が入っていた。私が一番うれしかったのは誰もがさらにもらった

2円であった。クーロ中佐が挨拶をし、われわれ合唱隊が数曲歌った。というわけで、私は期待した以上の素晴らしいクリスマスイブを過ごした。皆が満足している様子はそれぞれの表情に見てとれた。

1914年12月25日

午前、礼拝があった。その後クーロ中佐が昨日の講演の続きをした。われわれは昼過ぎから夕方にかけて楽しくご機嫌だった。私は皆から少し離れて、故郷の愛する人たちにあれこれ思いを馳せた。今日は10時まで起きていてもよいとの許可を得ていた。

1914年12月31日

いつもの日課を終えた後、夕方6時に大晦日ジルヴェスターのお祭りが始まった。最初に合唱団が歌を歌った。「1年の最後の時が重々しい鐘の音とともに鳴り響く」[\[注58\]](#)という歌だった。この歌が終わった後、クーロ中佐が今の戦争について講演した。われわれは今日もまた10時まで起きていられるので、歌と踊りで過ごした。

1915年1月1日

運動の後、クーロ中佐がわれわれに「諸君、新年おめでとう」と挨拶した。そして昨日の彼の講演を締めくくった。ほかには何も新しいことはなかった。

1915年1月7日

今日、東京では初めての大雪となった。今はどんどん寒くなってきて、このような簡素な造りの建物の中では寒さがとても肌身にこたえる。われわれの部屋にはガスストーブが数台あるが、天井の高い部屋を十分に暖めることは到底できない。今晚6時半から講演があった。テーマは「日本の教育」。

1915年1月12日

今日の講演は「日本における学校と教会の違い」。それ以外には何も変わったことはなかった。

1915年1月14日

浅草本願寺にある日本の幼稚園から絵はがきの贈り物をもらった。また慰安のための蓄音機も手に入った。

1915年 1月15日

各自が日本側から60銭の支払いを受けた。

1915年 1月19日

夕方6時半に講演があった。テーマは「産業と繊維業界」。

1915年 1月23日

講演「日本の鋳業と鉄鋼業について」。

1915年 1月26日

講演の続き、テーマは「家内工業」。

1915年 1月27日

皇帝の誕生日を祝った。礼拝終了後にクーロ中佐が挨拶の言葉を述べ、皇帝陛下万歳の三唱で終えた。合唱団がさらに数曲の歌を歌い、それをもって式典は午前中に終了した。夕食の後もわれわれはさらに数時間を将校たちと一緒にすごした。ブレーメンの音楽隊の歌と舞台上で2、3時間のあいだめいっぱい楽しい思いをした。日本の羽生〔能敬〕^{はぶ のりよし}中尉も皇帝の健康を祝して乾杯した。さらにわれわれは今日1人当たり30銭とビール1本とクルミをもらった。われわれボイラーマンは「ヤークアル」の〔ディージング〕機関少尉〔注59〕からもさらに30銭と数本の葉巻と紙巻きたばこ、それに小さなソーセージ1本をもらった。

1915年 1月28日

今日、ドイツ帝国海軍省が日本にいるドイツ兵捕虜のために75,000マルクの支出〔注60〕を承認したことが発表された。それは兵士1人当たり月1円25銭の支給額になるという。

1915年 1月29日

今晚は「日本の家内工業」についての講演の続き。

1915年 2月2日

「日本の貿易と陸軍と海軍」についての講演が〔ユーバーシャル博士の〕日本に関する全講演の最終回であった。

1915年2月8日

東アジア海軍分遣隊への初めての義援金が届いた。また、今日、われわれの艦長についてのニュース[青島から神戸に到着し、大阪衛戍病院に転院したこと]も入った。

1915年2月15日

今日、私は天津からの義援金から50銭をもらった。

1915年2月19日

記念の品を故郷にもって帰るために、なけなしの金を払って長崎に紋章[注61]を注文した。

1915年2月26日

今日東京で二番目の大雪が降った。

1915年3月1日

今日、例の75,000マルクから2回目の支給があった。各人が1円20銭受けとった。その他にマニラにいるわれわれの同胞からの慰問品の葉巻も受けとった。一人当たり19本。素晴らしい香りがした。

1915年3月3日

今日、私は自分の24回目の誕生日を静かに祝った。偶然にも日本の祝日に自分の誕生日ができるという幸運に恵まれた。すべての日本の女の子が、それぞれ誕生日があっても、毎年3月3日には皆で一緒に誕生日をする。同様に男の子の誕生日もある。それは5月5日で国の祝日である。そして女の子の誕生日よりもはるかに盛大に祝われる。

1915年3月7日

今日、日曜日午前、小本堂の前の庭で横浜のドイツ人聖職者によって礼拝が行われた。それはこの半年間の捕虜生活の間にわれわれのところに来ることを許された初めてのドイツ人だった。こんな異郷で、これほど久しぶりに同胞が話すのを聞くことはわれわれ全員にとって喜びだった。そして、彼が行った説教は見事で感動した。

1915年3月10日

今日、長い時を経て初めて故郷から来た郵便物を受けとった。それは、私のいとこからの

はがきで、彼が赤十字に属していてフランスの戦場にいることがわかった。

1915年 3月13日

今日ここ東京でまた大雪が降った。

1915年 3月15日

1人当たり2円の義援金がわれわれに支払われた。

1915年 3月19日

今日、友人のブルーノ・フォン・エッレルンから手紙を受けとった。その文面から、今、彼も前線に駆り出されていて、ロシアにいることがわかった。彼が元気であることがうれしかった。

1915年 3月20日

今日、私はオーバーゲルツィヒ [\[注62\]](#) から1枚のはがきを受けとった [\[注63\]](#)。

1915年 3月21日

今日、私の親友ヴィリー・ヴェントから手紙をもらってうれしくもあり、びっくりもした。彼も予備役に編入されていたのである。彼の心のこもった一行一行から私は、彼が最近決して調子がよいわけではないこと、そして彼がいろいろ苦しい目にあってきたことを知った。まったく不幸なことに、母親が亡くなり、彼の若い妻が病気になったのである。可哀想なヴィリー。

1915年 3月30日

長い間心配して待っていた両親からの初めて便りを受けとった、しかも34フラン=13.37円の郵便為替の形で。このお金は1915年2月15日の消印のあるスイス（ベルン）を經由して3月29日に東京に届いた。驚いたことに私はこれまで両親からの手紙はまだ1通も受けとっていなかった。ということは故郷からの最初の郵便は紛失してしまったと考えざるをえない。

1915年 4月1日

今日私は兵役期間の前半を終え、これで山も下りに入る。ビスマルク生誕100周年の今日、ここでも簡単な記念式典が行われ彼を偲んだ。クロー中佐の帝国宰相の誉れ高い活動についての講演と短く感動的な挨拶、そしてその後続く合唱団の歌が記念式の内容だった。午後

に各自1円ずつもらったが、これはミュンヘンからの義援金だった。うれしいことに、夕方、私の友人Fr. H.が彼の故郷からくれた一通の手紙を受けとった。また両親から受けとったお金も支払われた。今やこう言える。何も不足はない、そう、ここにはすべてがある、と。

1915年4月4日

復活祭だ！——日本で戦時捕虜として迎える復活祭。情けない復活祭だ！ 復活祭初日10時半に礼拝があり東アジア海軍分遣隊の宣教師によって執り行われた。午後5時から合唱団が演奏会を催した。私を最も喜ばせ、そして、故郷での愛する復活祭のお祝いをはっきりと思い出させてくれたのは復活祭の卵で、卵は本当に彩色されていた。この卵が朝食と夕食に出た。一人5個も。

復活祭の2日目はまったく他の日と同じように、静かに、何の刺激もなくすぎた。われわれは今後どれだけここにいななければならないのだろうか。聖霊降臨祭、あるいはそれどころかもう一度愛すべきクリスマスの祝いをここ極東で、しかも、この隔絶された場所で迎えないなければならないのだろうか。

1915年4月9日

日本に来て半年たった今日、両親からの初めての手紙を受けとった。その手紙の内容からして日本に送られた最初の郵便物もその逆の郵便物も行方不明になったと推測される。昼前に「ヤークアル」の乗組員はハイメンダール少尉殿 [注64] に写真を撮ってもらった（集合写真）。

1915年4月10日

今日思いがけずも嬉しいことに故郷のクーベ家から11.36フラン（4円47銭）の郵便為替を受けとった。こんなことは夢にも思わなかった。世の中にはまだまだ善い人もいるものである。すぐにこの義援金の御礼をお返しすることができるようになればよいのだが。

1915年4月11日

今日は日本の皇太后 [昭憲皇太后] の一周忌であった。この収容所の日本人将校たちは正装であった。われわれはできるだけ静かにしていると告げられた。同じく楽器の演奏や歌うことも禁止された。ほら、われわれもお墓の中の皇太后のお邪魔をしないようにと気遣いましたよ、なにしろこの日は雨模様で、われわれはみんな毛布をかぶって寝ていたのだから。

1915年 4月14日

今年の2月19日に長崎に注文した紋章を受けとった。手際のよい仕事ぶりと美しい出来映えが大変うれしかった。これは素晴らしいお土産になる。

1915年 4月15日

今日、クーベ家から送られた4円47銭が私に支払われた。

1915年 4月16日

今晚は青島から一枚のはがきをもらって笑ってしまった。それは次のような内容だった。

「拝啓 カウル様

私はあなたの家の管理をお引き受けしておりますが、ひとりの日本人医師に1ヵ月100円で貸しました。そのお金を私はどうしたらよいか、全権委任状をどうか私に送ってください。私はそのお金をあなたのために保管しておくべきでしょうか、それとも、あなたにお送りしたらいいでしょうか。ヴェッツェル警察署長は利息も支払い義務があると主張しています。私はどうしたらよいか、どうかお手紙でお知らせください。

あなたのフェリングより」[\[注65\]](#)

1915年 4月17日

今日はこの捕虜生活に入って三度目の体重測定をした。私の体重は19貫4匁（71.40kg）であった。

1915年 4月18日

日本の花々の絢爛さを愛でる機会が与えられた。実に様々な花やまた別の植物らも大きな仏教寺院の中に展示されていて、恐らくわれわれの花を愛する気持ちを伝え聞いた日本人たちがそれらを鑑賞するようにとわれわれを招待してくれたのであろう。その上、われわれは今日、西郷中佐殿の言う通り、いくつかの鉢植えの花をもらった。この鉢植えの花は食卓に配置された。

1915年 4月24日

今日、われわれはニューヨークのシーメンス社 [\[注66\]](#) からの義援金から1円25銭をもらった。

1915年 4月29日

今日、日本人一等軍医からわれわれは目の検査を受けた。その他、今日は両親からの手紙を受けとった。

1915年 5月 1日

今日はちょっとした苦痛のために私は診療所に行かざるをえなかった。医師に痔病と診断され、診療所に入院しなければならなかった。

1915年 5月 5日

われわれは給与 1 円25銭の支給を受けた。

1915年 5月 9日

今日日曜日は、拝礼があり、横浜のシュレーダー牧師様 [\[注67\]](#) により執り行われた。残念ながら、私は診療所の病室にいなければならなかったので出席できなかった。

1915年 5月12日

医師の診察により治癒したと診断され病室から解放された。

1915年 5月14日

夕方 6 時半よりユーバーシャール博士の新しい講演が始まった。テーマは「1. ドイツ国家に関する概論と入門」。

1915年 5月17日

今日、われわれはミュンヘンの同胞が集めた義援金から 1 円50銭を支給された。

1915年 5月21日

夕方 6 時半から講演の続きがあった。テーマは「ローマ帝国 没落と復興」。

1915年 5月23日

今日は聖霊降臨祭の祝日の一日目にあたり、礼拝があり、東アジア海軍分遣隊の宣教師によって執り行われた。夕方は「ヤークアル」の将校たちと一緒に過ごした。皆にとって楽しい数時間となるように、全員が最善を尽くした。合唱団の歌がトゥルネングループの徒手体操と交代すると、そのピラミッドが「ヤークアル」の数名の屈強な若者たちによる力技へと

かわった。生粋のベルリン子の若者がこの場にぴったりの笑いを振りまいたので、皆の笑いが止まらなかった。

祝日二日目はこれよりずっと静かに過ぎていった。午後には歌と踊りがあった。そういうことでこの祝日も異国ではせいぜいこんな風にしか過ごさざるをえなかった。われわれの解放される日がこれ以上遠すぎることはないといいのだが。

1915年5月28日

夕方6時半から講演の続きがあった。テーマは「ドイツ憲法の序論と第1条」。

1915年5月29日

今日ベルタからの手紙を受けとった。手紙ではリヒャルトも今ロシア戦線にいると伝えていた。

1915年5月30日

夕方、両親からの手紙を受けとった。

1915年5月31日

われわれはシーメンス社と帝国海軍省から給与と義援金を受けとった。一人当たり1円20銭。

1915年6月4日

大変驚いたことに、今日、ライプナー嬢 [カウルとの関係不明] から一通の手紙を受けとった。夕方、講演があった。テーマは「英国とドイツの国家概念の相違」。

1915年6月6日

今日、日曜日は礼拝があり、横浜のシュレーダー牧師様が執り行った。

1915年6月11日

夕方、講演の続きが行われた。テーマは「君主の権力と皇帝の権利」。他には変わったことは何もなかった。

1915年6月13日

今日、両親からの手紙を受けとった。

1915年6月14日

今日は、マニラの同胞たちからここに届いた慰問品が私には大変うれしかった。それは、葉巻で素晴らしい香りがした。全員が20本ずつもらった。そこで私はマニラに所在地があるドイツの海軍協会の会長宛に感謝の手紙を送った。この収容所でわれわれの担当だった2名の日本人陸軍中尉のうちの1人が、今日、元の連隊に戻り、別の1人が補充された。

[欄外に鉛筆書きで「Terrakura」^[注68]の書き込みがある。]

1915年6月15日

今日、われわれは1人当たり1円50銭の支給があった。

1915年6月18日

この日、このわれわれの収容所で最高におもしろく、思いがけないできごとが起こった。日本の巡洋艦一隻がドイツの潜水艦により魚雷で撃沈されたのである^[注69]。午後に、また健康診断があった。私の体重は今回は18貫18匁[約68.18kg]だった。したがって、私の体重は日本滞在中に9ポンド[約4.05kg]減ったことになる。夕方、上海からここに届いた慰問品の分配があった。「ヤークアル」の乗組員だけを指定したもので、各人がシャツ1枚、ハンカチ3枚、タオル1枚、長靴下1足、そして喫煙者たちには刻みたばこ用のパイプ1個だった。夕方6時に、講演があった。テーマは「国王の大権、王位継承と国会」であった。

1915年6月25日

午後にわれわれはまたニューヨークのシーメンス社と帝国海軍省から義援金を受けとった。1人当たり1円20銭だった。

1915年7月7日

今日両親からの手紙を受けとった。とくに目新しいことはない。

1915年7月12日

午前中に1人当たり1円30銭の義援金をもらった。これはニューヨークのドイツ人からの寄付でシーメンス社を通して送られてきた。

1915年7月14日

今日私のいとこのハインリヒから初めて手紙を受けとった、この手紙から彼からの郵便も行方不明になっていることが窺われた。

1915年7月15日

午後2時に義手・義足と義眼に関する勅令が西郷中佐によって告げられた [注70]。

1915年7月18日

暑い季節のあいだここで大量発生するノミと蚊の被害がひどいため、今日われわれの宿舎が徹底的に消毒された。

1915年7月19日

今日、「SMSコルモラン」に乗艦していたよき戦友であり同郷人でもある男が抑留されているアメリカ領グアムからくれたはがきを受けとった。

1915年7月24日

今日、われわれは各自1円20銭の給与を受けとった。

1915年8月1日

今日でドイツが敵国と戦争に入ってから一年が過ぎた。同じ時にワルシャワの陥落もあった。そのことはこの収容所でも大きな喜びを引き起こし、それにふさわしいお祝いが行われた。(面白い行列が出て大笑いを誘い盛大な拍手を浴びた。)

1915年8月9日

今日の午後、1人当たり1円30銭の義援金の配付があった。

1915年8月10日

今朝7時頃ここで部分日食があり、私はこの収容所から非常によく観察することができた。

1915年8月11日

今日、4週間ぶりに両親からの手紙を受けとった。

1915年8月16日

今日、健康診断があった。体重は18貫30匁 [68.63kg] だった。

1915年8月21日

待ちに待ったが、すでに1915年4月12日にノイケルンから発送された私の小包をようやく

今日の夕方受けとった。すべての品々が良い状態に保たれていたので私の口にあうとよいのだが。

1915年 8月25日

今日、いつもの給与1円20銭を受けとった。そのほかには、ノイケルンのベルタからはがきを受けとった。

1915年 8月26日

今日は、ディーゼルエンジンの技術についての大変興味深い講演が、われわれの機関中尉によって行われた。この講演は、当初、下士官たちのためだけのものではあったが、実際にこのエンジンを担当したことのある乗組員たちも出席させてもらえることになった。

[この項、別紙片に記載して右側に添付]

1915年 9月2日

今日は友人のブルーノ・フォン・エッレルンから久しぶりに2通目の手紙をもらった。そのほかには、ディーゼルエンジンについての講演の続きがあった。

1915年 9月3日

今日、われわれは6日に新しい収容所へ引っ越すことになったと知らされた。そのあとでわずかなこまごまとした持ち物をせっせと荷造りした。

夕方にはミュンヘンとニューヨークからの義援金一人当たり1円30銭を受けとった。

1915年 9月4日

一日中引っ越しの準備。

1915年 9月6日

荷物の積込み。

1915年 9月7日

早朝2時30分に起床。まあ、ゆっくりと身支度をした。というのもわれわれがよく知っている日本人の律儀さからするとまだ出発するとは考えられなかったからである。4時20分になるとやっと小本堂の前の小さな中庭に整列し、4時30分に駅に向かって出発した。30分の行軍だった。早朝のこともありわれわれの出発が秘密裡だったために通りで邪魔が入ること

はなかった。にもかかわらず2、3人のカメラマンには知られていたにちがいがなかった。というのも駅でわれわれはたびたび写真に撮られたからである。車輛を割り当てられて乗車するとすぐに出発した。われわれの荷物は別に輸送されていたので、クロー中佐から贈られてやむを得ず持っていかざるを得なかった大きな2つの鉢植えの花だけは自分で運ばなければならなかった。同じくウサギたちや飛行船団の模型も持っていくことになったが、数名の優しい仲間がこの仕事を分担してくれた。汽車の移動には1時間かかり、この最近10ヵ月に見たよりもずっと広い空をふたたび見て、本当に自由だと感じた。汽車は田んぼや蓮池や日本の村々や小さな町を走り抜けていった。あるところからはほんの少しばかり海さえも見え、自由への願いがますます大きくなった。われわれは順々に次のような町を通過した。5時20分に錦糸町を出発して亀戸、平井、小岩、市川、中山を過ぎ、6時に船橋、終点津田沼には6時20分に着いた。小さな町にある駅舎の前に整列すると、新しい宿舎へと行軍した。6時30分だった。最初はよかったが、それからあとはでこぼこ道を新しい宿舎へと向かった。われわれは歌を歌ってもよいという許可をもらったので、すぐさまそれを実行に移し、歌いながらいくつかの日本の村々を通って行った。村の住民たちが珍しそうな様子で道端に立っていた。なにしろ彼らは兵隊が歌を歌うのに慣れてなかった。というのは日本の軍隊ではそのようなことはしないからである。1時間の行軍の後7時30分頃われわれの目的地習志野に到着した。われわれの宿舎は4つの大きな兵舎で、それはドイツの軍事演習場にもあるようなものだった。ここの良いところはいつでもバラックから出られることと素晴らしい新鮮な空気があること、前より広い芝生が生えた広場があることである。他方、ここには東京にいた時よりもさらに世間から切り離されている。その他、ここではマットももらい、自分の毛布を引き続き使うことができた。健康に関してはここには大きな利点がある。仕事のないとき私は朝食の後、いくつかの徒手体操をしたり、あるいは散歩をしたりする。朝食はここでもパンとお茶と卵1個である。朝食の後には頭を使った仕事をしたり、彫りものとか、それに類したことをした。昼食の後は1時間昼寝をした。それからまた仕事をして、夕食後にはまた散歩やありとあらゆる退屈しのぎをした。そのようにしてここでも一日一日が永遠の単調さで続く。そして早く平和が来てほしいと望むことがずっとわれわれの慰めであり続ける。

1915年9月11日

今日、日本人の陸軍大将による視察があった。

1915年9月12日

午前中、シュレーダー牧師様による礼拝があった。

その他、今日はヴィルスター [\[注71\]](#) から初めての便りがあった。それは写真入りの絵はがきだった。

1915年9月15日

福岡からここへ移ってきた海軍砲兵隊が到着し、挨拶があった。

いつも通り、今日もまた一人当たり1円30銭の義援金を受けとった。

1915年9月19日

うれしいことに私は今日は故郷からフルステンヴァルデ新聞とベルリン新聞の2紙を数部もらった。

1915年9月21日

今日私の姉がベルリンから数紙の新聞を送ってくれたので大変うれしかった。これは私が東アジアにいるあいだに姉が生きているという証しを初めて受けとったものだった。

1915年9月26日

ユーバーシャール博士殿のドイツ国家に関する講演の続きがあった。

1915年9月30日

今日、私は姉から1枚のはがきの形で初めての便りをももらった。他にベルリン新聞数部。また、旧友カールも私のことを思って1枚のはがきをくれた。

1915年10月2日

今日、私は久しぶりに両親からの手紙を受けとった。この手紙は1915年8月18日に出されたものである。

1915年10月3日

うれしいことに今日ベルタからの軍事郵便の手紙と6本の葉巻を受けとった。葉巻は残念ながらすべて折れていたが、それでもすべて吸うことができた。その他、姉が送ってくれた2回目の新聞を受けとった。

1915年10月6日

今日、オーバーゲルツィヒから大勢の人の挨拶の言葉が寄せ書きされたはがきを受けとっ

た。

1915年10月7日

今日は大変うれしいことに大分前に注文していた刻みたばこが1パック両親から届いた。次に送られてくるのはあまり長く待たせないで欲しいものである。

1915年10月8日

今日の嵐のような日に、日本で最大にして最も神聖な火を噴く山、富士山が沈む太陽の輝きの中にきわだたくっきりと見えるというめったにない機会に恵まれた。

1915年10月8日

そのほか、今日はミュンヘンからの義援金の配分があった。一人当たり1円だった。

[この項、別紙片に記載し左側に添付]

1915年10月13日

ベルタから紙巻きたばこ20本入りの小さい小包が送られてきてうれしい驚きだった。できれば私もこうした多くの慰問品のお返しを早くたっぷりとしたいものである。

1915年10月14日

今日、驚いたことにヴィルスターから3円58銭(10.75スイスフラン)の小口の支援金を受けとった。昨日は20本の紙巻きたばこ、今日は金、と毎日何かしら手に入る。そうだ、窮すれば通ず。これも生きていればこそである。

1915年10月15日

今日、一人当たり1円30銭の給与支給。

1915年10月17日

午前中、同じ国家概念に関する講演の続き。

[この項、別紙片に記載し左側に添付]

1915年10月19日

午前中に健康診断があった。それは体重と歯の検査にまで及んだ。体重は18貫61匁 [約69.79kg] だった。今日から私はエーラー中尉 [\[注72\]](#) から幾何学の授業を受け始めた。

1915年10月22日

グアムの親しい友人から1通の手紙を受けとった。

1915年10月24日

ドイツの国家概念に関するユーバーシャール博士殿の講演の続き。

1915年10月26日

横浜のシュレーダー牧師様による礼拝があった。

蒸気タービンについて機関中尉の講演があった。

1915年10月31日

ドイツの国家概念についての講演が終了し、日本の国家概念に移行。日本の天皇誕生日だった。食事に果物と砂糖が出た。

1915年11月10日

日本の天皇の即位式があった。いつもよりよい食事。歩哨の風変りな儀式。

故郷に注文してあった本が届いた。

1915年11月12日

夜中3時半に大きな地震があり、さらに日中にもやや小さい地震が何度もあった。日本では年間約150回の地震がある。

1915年11月14日

今日は私が現在捕虜の境遇にあるにもかかわらずスポーツ大会の開催によって面白い一日を過ごした。この運動会では次のような競技が行われた。1,560メートル走、シュロイダーバル（擲球）^{てききゅう} [注73]、投石、円盤投げ、500メートル走、ファウストバル [注74]、走り幅跳び、走り高跳び、棒高跳び、100メートル走、卵運び競走、たばこ吸い競争、リレー、サッカー、綱引き、ジャガイモ運び競走、障害物競走。競技後に賞が授与される。

各競技の上位の記録は次の通り：

1,560メートル走：1位 5分54秒 2位 5分56秒、

シュロイダーバル：1位 41.65メートル 2位 38.20メートル、

投石：1位 12.65メートル 2位 12.15メートル、

円盤投げ：1位 29.70メートル 2位 28メートル、
500メートル走：1位 128秒2 2位 130秒1
棒高跳び：1位 3.00メートル 2位 2.95メートル、
走り高跳び：1位 1.7メートル 2位 1.65メートル、
走り幅飛び：1位 6.00メートル 2位 5.45メートル 3位 5.4メートル、
100メートル走：1位 12.1秒、2位 12.3秒 3位 12.4秒、
リレー：1分40?秒

賞品は「ヤークアル」と海軍中隊と海軍砲兵隊の海軍部門には、1等賞6個、2等賞4個、3等賞1個が与えられた。ファウストバルは東アジア海軍分遣隊だけが試合した。サッカーは1対1だった。賞品は現在の境遇にふさわしいそれなりのものであった。行事は皇帝万歳で終了した。

1915年11月15日

今日は1人当たり1円30銭の給与の支払いがあった。久しぶりに故郷（の両親）から手紙を受けとった。

1915年11月16日

一日中ずっと激しい地震があった。

1915年11月21日

今日は死者慰霊日の礼拝があった。

1915年11月30日

冬の肌着類を支給された。（神戸のドイツ人たちから）1人当たり小さな包み1個と長靴下2足を受けとった。午前9時に横浜のシュレーダー牧師による礼拝があった。

〔（ ）内は欄外の鉛筆の書き込み〕

1915年12月2日

今日、両親から1915年11月2日付けのはがきを受けとった。

1915年12月3日

また故郷からはがきを受けとったが、それはずいぶん前の1915年10月22日に投函されたものだった。

今日は「ヤーグアル」の機関中尉へのクリスマスの贈り物にされている額縁の注文を引き受けた。「ヤーグアル」の下士官たちから私にその製作を任されたのである。クリスマスの準備ももう始まっている。

1915年12月4日

ずいぶん前の1915年9月25日に投函された両親からはがきを受けとった。

1915年12月10日

兵士1人当たり1円30銭の給与支給。夕方、日本の国家概念についての講演。1915年9月6日付けのベルタからはがきを受けとった。

1915年12月11日

私は今日、姉から小包を送ってもらって驚きかつうれしかった。これは私のクリスマスのために、というものだった。

1915年12月17日

健康診断、体重は18貫28匁 [68.55kg]。講演。テーマは「日本の教育」。

1915年12月21日

兵士1人当たり1円15銭の給与支給。

機関中尉のためにと頼まれた額縁を仕上げた。

1915年12月23日

クリスマスのための準備。大騒ぎの豚の解体処理とソーセージ作り。

1915年12月24日

クリスマスイブ。このクリスマスを故郷で過ごせたら、という私の望みはかなわなかった。私は、他の多くの者たちも同じだが、われわれの一番すばらしいお祭りを故郷からはるか遠いところで過ごすよう運命づけられているのである。願わくば、新しい年が平和な年でありますように。今日私に与えられた最初の喜びは、ベルタからの1通の手紙だった。夕方、礼

拝とそれに続くクリスマスプレゼントの分配があった。愛すべきサンタクロースもちゃんといた。われわれの将校たちは、収容所全体を覆っていた落ち込んだ雰囲気や陽気な表情と愉快なジョークで追い払おうとしていた。プレゼントを分け合った後、誰もが何かを得られるハズレのないくじ引きが続いた。われわれは日本人から11時15分まで自由にしてよいとの許可をもらっており、そのときまで祝賀パーティに夢中になることができた。次第に、われわれの雰囲気も盛り上がったが、よく言えば「やせ我慢の陽気さ」だった。巡回が回ってきたので、寢床に入り故郷に思いを馳せながら眠りについた。

1915年12月25日

ぐっすりと眠って朝食をとった後、われわれはストーブを囲んで朝の一杯 [注75] をやった。ほとんど誰もがやっているわずかな蓄えの中からビールを2、3本奮発したのである。われわれは冗談を言い合ったりして午前中を過ごした。正午には礼拝があった。午後には将校や兵士たちの協力を得て弦楽演奏会が行なわれた。ピアノ1台と自作も混じるヴァイオリン何本かの演奏であった。午後は私の最も仲の良い戦友たちとコーヒーを飲みながら楽しいおしゃべりをした。それには勿論みんなが故郷からもらった小包の中の菓子を提供するのが義務だった。愉快的な冗談を言ったり戯れ唄を歌ったりして和気あいあいと一緒に過ごした。

1915年12月26日

今日、私は、他の5名の戦友たちと一括してもらったクリスマスのプレゼントの箱の中から中身を豪華な2度目の朝食にして食べてしまった。うれしいことに今日もまたカール伯父さんから手紙をもらった。

1915年12月31日～1916年1月1日

昨夜はひとり引きこもって静かに過ごした。12時半までは好きにしてよかったのだが、私は早々に眠りについた。

1916年1月1日

午後に私も一員である合唱団の演奏会があった。

1916年1月5日

今日は随分と久しぶりに両親からの手紙を2通受けとった。

1916年 1月6日

今日はブルーノから手紙を受けとり、彼が健康でいまも生存者の一人であることを喜んだ。
両親とエルゼ宛にはがきを送った。 [この行、右欄外に記載]

1916年 1月8日

講演。テーマは「日本の学校」。

1916年 1月10日

両親から1通の手紙。 [この日の項、左欄外に記載]

1916年 1月12日

ベルタから1915年12月6日付けの2パック目の刻みたばこ [が届いた]。

久しぶりにまたフルステンヴァルデ新聞数部が届いた。1915年12月15日付けだった。10月3日以来初めてである。したがって、この間の新聞はすべて行方不明になったのである。

1916年 1月13日

ベルタからののはがきを受けとった。「刻みタバコ」2パックの確認だった。

1916年 1月14日

講演。テーマは「世界大戦における日本の立場 Okuma (駐英大使) Takato (Okumaの門下生)」[\[注76\]](#)。

1916年 1月16日

ベルタ宛にはがきを送った。

1916年 1月17日

収容所全体で突然の私物検査があった。

1916年 1月21日

講演。テーマは「ドイツ人と日本人の精神的な相違について」。

1916年 1月22日

今日の私の大きな喜びは、姉から1通の手紙を受けとったことである。それは長い間受け

とったことのないような心のこもった数行の手紙であった。それと今日、両親からも手紙をもらった。手紙からは輸送中の小包が何口かあると読み取ることができた。

1916年 1月26日

仲介者を通して久しぶりにヴィリーの消息を知った。シュミトケ夫人からブルーノと彼女の夫に関する手紙。それに、比較的古い日付の両親からの手紙と同じく両親からの1915年12月28日付けで封筒に入れて送られた刻みたばこを受けとった。

1916年 1月27日

皇帝誕生日の祝典。午前10時に礼拝。クーロ中佐の挨拶。合唱協会の演奏会。機関中尉から50銭。それに加えて全員に1人当たり20銭の義援金とビール2本。午後9時半まで弦楽演奏と戯れ唄による祝典。

エルゼとヴィリーに手紙を送った。最後に『群盗』[シラーの戯曲]。

フルテンヴァルデ新聞の送付2通。2度目の刻みたばこ2パックの送付。[この行、左欄外に記載]

1916年 1月28日

両親にはがきを送る。

1916年 1月29日

うれしいことに今日は3通の手紙を受けとった。1通は両親から。そして久しぶりにヴェント夫人からの便りも。それによってヴィリーの正確な住所も分かった。シュミトケ夫人もブルーノからの挨拶を伝えてくれた。

両親からの手紙。

[この行、左欄外に記載]

1916年 1月31日

1人当たり60銭の支給。

1916年 2月4日

講演。テーマは「ドイツ人と日本人のあいだの心理的緊張」。

1916年 2月7日

今年になって初めての雪が一日中降り続く。まったく思いがけずクーベ一家からの小包1

個を受けとった。またまたうれしい一日だった。その他フルステンヴァルデ新聞を受けとった。

1916年 2月 7日

ハイメンダール少尉による英語の授業開始。 [この項、紙片に記載し左端に貼付]

1916年 2月 8日

ライヒボルツ [不明] のカールから手紙を受けとった。

クーベ夫人宛にはがきを送る。 [この行、左欄外に記載]

1916年 2月 9日

ベルタから刻みたばこ 1 パック (郵便封筒)。

1916年 2月10日

ライプナー嬢から 1 通のはがき (1915年 8月 8日付け)。 1人当たり65銭の給与支給。

1916年 2月11日

講演。テーマは「ドイツ人と日本人の相違」(日本の古い伝承によればこの日に初代の天皇が天から降りてきたという。)

1916年 2月14日

待ち焦がれていた両親からのクリスマスの小包を受けとった。

1916年 2月15日

エルゼからの誕生日のお祝いのことばとハインリヒからの手紙を受けとった。両親宛の手紙を送った。

1916年 2月16日

健康診断並びに体重と胸囲の測定。体重18貫70匁 [70.13kg]。

ベルタから紙巻きたばこ20本入り郵便小包。

フルステンヴァルデ新聞が2便。

両親とベルタからの誕生日の祝いのことば。

1916年 2月20日

エルゼとベルタ宛にはがきを送った。

1916年 2月21日

今年 2 度目の大雪が降った。

1916年 2月23日

機関中尉による講演。テーマは「内燃機関について」。

1916年 2月24日

天津からの義援金 1 人当たり 1 円31銭。

1916年 2月25日

収容所の視察を目的とした米国赤十字から派遣された 3 人の婦人の訪問があった。

1916年 3月 3日

カール伯父さんとシュミトケ夫人に宛てた手紙を各 1 通、両親へのはがき 1 枚を送る。

両親から手紙。

講演。テーマは「ドイツ人と比較した日本人の食事情について」。1911年の統計に基づく
と日本人労働者 1 人の日給は平均60銭。食費は20銭。つまり 1/3の支出。ドイツの労働者
(金属工や左官) 1 人の 1 日当たり [の収入] は平均 3 マルク60ペニヒ～4 マルク。食費は
90ペニヒ、つまり 1/4である [\[注77\]](#)。

1916年 3月 6日

ブルーノから手紙をもらった。

1916年 3月 8日

未明の 4 時に突然、具合が悪くなった。下腹部の不調。営内病室で 4 日間寝ていた。

1916年 3月11日

今日、営内病室から解放された。

1916年 3月13日

[ギュンター・] フォン・ヴィルツキ歩兵大尉の誕生日に、合唱協会の一員として招待された。

1916年 3月15日

東京の米国公使館員 2 名による収容所視察 [注78]。

1916年 3月17日

両親へ手紙 1 通とエルゼにはがき 1 枚を送った。

1916年 3月26日

スイス人牧師による礼拝があった。

1916年 3月30日

ライプナー嬢にはがきとベルタに手紙を送った。

1916年 3月31日

久しぶりに今日またフルステンヴァルデ新聞数部が郵送されてきた。

講演。テーマは「日本国憲法」。

1916年 4月 5日

金がまったくない者に 1 人当たり 1 円30銭の給与支給。

1916年 4月 7日

講演。テーマは「日本の発展について」。

1916年 4月 7日

羽生中尉が交代になり、収容所を去った。

[この項、紙片に記入して左端に貼付]

1916年 4月10日

ハインリヒ宛に手紙、オーバーゲルツィヒへはがき。

1916年 4月12日

ベルタから刻みたばこ入りの手紙を受けとった。

1916年 4月15日

健康診断。体重18貫72匁 [70.20kg]。

1916年 4月18日

グアムにいる同郷人から手紙1通。

1916年 4月20日

困窮者のために給与4月分1人当たり1円30銭が支給された。

1916年 4月21日

母とベルタにそれぞれ誕生日カード。

1916年 4月22日

クーロ中佐から40銭。

1916年 4月23日

復活祭だ！ こんなにすばらしい祝日を今年もまた捕虜の境遇で過ごさざるを得なくなり、私の今の状況がこの先どれだけ続くのかまったくわからない。いつ平和がくるのだろうか？ 捕虜生活の長い月日が、祭日をわれわれの置かれた状況に合わせて、自分たちでできるだけ楽しく盛り上げるすべを教えてくれた。今日もまたそうして行われた。午前中に礼拝が先行して行われたのち、夕方の5時に将校たちも加わって合唱団の演奏会があり、クーロ中佐までもそれに参加してくれた。そのおかげでわれわれは数時間にわたる素晴らしいときを作りだし、美しい故郷の歌のおかげでまるで愛する故郷にいるかのように感じた。心は満たされ新しい希望を抱いて眠りについた。

1916年 4月27日

クーロ中佐の誕生日。これには合唱隊も夕方招待された。われわれは、歌を歌い提供された70リットルのビールをすっかり飲み干して、この夜もできるかぎり楽しく過ごした。

1916年5月1日

たった今、フルステンヴァルデ新聞数部が入った2つの郵便物を受けとった。フルステンヴァルデから2月22日に発送されたものだった。

1916年5月2日

エルゼ宛に手紙。

1916年5月3日

父宛に誕生日カードを1枚。

1916年5月5日

[クーロ] 中佐の講演。テーマは「日露戦争について」。

1916年5月12日

日露戦争についての講演の続き。クーベ夫人宛にはがきを送った。

1916年5月13日

ヴィリー宛の手紙とブルーノ宛の手紙を送った。

1916年5月14日

2回目のスポーツ大会が催された。

1916年5月16日

スポーツ大会の続き。

1916年5月17日

日本の一等軍医が交代する。

1916年5月21日

カール伯父さん宛にはがき。

1916年5月23日

両親宛にはがき。

1916年 5月25日

夕方、めったに見られないほど美しい夕日をじっくり眺める機会を得た。

1916年 5月30日

ベルタ宛のはがきとオーバーゲルツィヒへのはがき。

1916年 5月31日

給与 1 円30銭。

[この日の項、左端欄外に記載]

1916年 6月 2日

エルゼとベルタから軍事郵便小包 1 個。中身は刻みたばこ。

エルゼ宛にはがきを 2 枚と両親宛の聖霊降臨祭のはがきを 1 枚。

1916年 6月 5日

私は今日大切な使命を果さなくてはならなかった。というのは、^{えいじゅ}衛戍病院で肺結核のために死亡した海軍中隊のある戦友 [注79] の葬儀に参列する必要があったからである。日本側はその意思がある者には誰でも葬儀に参加することを許可していた。埋葬は習志野にある日本の陸軍墓地で行われた。合唱隊が「復活」[注80] と「私には一人の戦友がいた」[注81] を歌っているあいだに、収容所の二人の宣教師が弔辞を述べた。日本人将校たちのなかから西郷中佐、原田 [武] 中尉、それに一等軍医が参加した。

1916年 6月11日

聖霊降臨祭の祝日の初日。

われわれのお祭りのなかで最も素晴らしいこのお祭りを私はこの年も捕虜の境遇で過ごさなくてならなかった。お祭りは午前中の礼拝と夕方二つの兵舎のあいだで行われた和気あいあいとした集いからなっていた。チェロとヴァイオリン 2 本とバンドネオンの楽団がここになくはない楽しい舞台を作ってくれた。それには合唱団も参加してくれた。祭りは11時半まで続いた。残念ながら、私はこの祭りでビール 1 本を奮発できる状況にはなかった。私の懐具合がこれを許さなかったからである。お祭りの 2 日目はここに挙げるに値する日常生活を中断させるような出来事もなく、まったくいつもと同じように過ぎていった。

1916年 6月13日

今日私は 1 枚の壁掛け用絵皿を届けた。それは注文を受けてレッフラー中尉のために私が

製作したもので、贈答品として横浜へ送られた。

1916年 6月15日

義援金の分配。1人当たり1円30銭。

1916年 6月17日

健康診断。体重18貫80匁 [70.50kg]。日露戦争における海戦についての講演。レックラー中尉が講演。

1916年 6月19日

エルゼからの軍事郵便小包を受けとった。中身は刻みたばこ。

1916年 6月22日

エルゼと両親とベルタにそれぞれはがきを送った。

1916年 6月30日

両親に手紙を送った。

1916年 7月 2日

両親からの手紙を受けとった。

1916年 7月 3日

両親とハインリヒにそれぞれはがきを送った。

1916年 7月 5日

久しぶりにまたブルーノからの手紙を受けとった。

1916年 7月 7日

今日、紙巻きたばこと刻みたばこが入った2個の軍事郵便小包が送られてきて大変うれしかった。その中にはエルゼの写真が入っていた。発送されたのは1916年5月16日である。

1916年 7月13日

エルゼ宛に手紙。

1916年7月16日

両親とクーベ一家にそれぞれはがき。

1916年7月24日

両親あてに手紙を送った。長いあいだ待っていた1月13日付の小包を受けとった。

1916年7月28日

両親宛にはがき。カール伯父さん宛にもはがきを送った。1円30銭の給与支給。

1916年8月8日

クーベ夫人から小包を受けとった。残念ながらわずかにオイルサーディン2缶だけしか食べられなかった。小包全体がそもそも底が抜けた状態だった。

午後1時半にかなり激しい地震があり数秒間続いた。

1916年8月9日

クーベ家宛にはがき。フォン・エッレルン氏宛にはがき。

1916年8月13日

ブルーノ宛に手紙を送った。ベルタから紙巻きたばこ50本を受けとった。

1916年8月15日

両親から手紙を受けとった。

1916年8月16日

健康診断。体重17貫79匁 [約66.71kg]。赤痢のような下痢 [\[注82\]](#) による急激な体重の減少。

1916年8月21日

両親宛に手紙。ベルタ宛とヴェント夫人宛にはがき。給与1円30銭。

1916年8月28日

カール伯父さんから(1916年7月29日付の)はがきを受けとった。

1916年8月28日 [原文のママ]

両親からの手紙4通と刻みたばこを受けとった。

1916年9月1日

両親に手紙、エルゼとハインリヒにそれぞれはがき。

1916年9月2日

ヴィリーからの手紙を受けとった。

1916年9月4日

ブルーノからの手紙を受けとった。

1916年9月8日

両親とベルタからそれぞれ手紙をもらった。

1916年9月9日

ハインリヒから手紙をもらった。

1916年9月14日

ライプナー嬢から手紙をもらった。

1916年9月15日

ブルーノ・フォン・エツレルン宛にはがき、ベルタ宛にはがき。

1916年9月18日

ヴィリー（ティーデ夫人）宛に手紙。

1916年9月20日

健康診断。体重は18貫99匁 [約71.21kg]。

1916年9月22日

両親から手紙をもらった。

1916年 9月25日

1 円30銭の給与支給。

1916年 9月30日

両親宛に手紙を送った。

1916年10月 6日

両親宛に手紙を、ハインリヒとライプナー嬢にはそれぞれはがきを送った。

1916年10月11日

両親からの手紙を受けとった。日本側の規則によると 1 人当たり 1 ヶ月に手紙 1 通とはがき 1 枚しか出せない [注83]。

1916年10月13日

エルゼから手紙をもらった。それにはW.W. [ヴィリー・ヴェントか?] の手紙が同封されていた。

1916年10月15日

日本の当局からの命令により今から 1 人当たり 1 ヶ月に手紙 1 通、はがき 1 枚しか出せない。日本のスタンプがついた便箋やはがきが配られる。

1916年10月19日

健康診断。体重は18貫80匁 [70. 50kg]。

[この項、別紙片に記入して左端に貼付]

1916年10月20日

両親宛の手紙とベルタ宛のはがきを送った。

1916年10月21日

今日、ここでトゥルネンの練習が行われた。開催したのは当地で結成されたトゥルネン協会である。

1916年10月22日

福岡の収容所から73名の兵士が到着。われわれの収容所は今や約500名の兵士を収容する。

日本側の許可を得ればわれわれはクリスマスカードを送ることができる。しかし、これには私の意に添わない条件がついているので私は送るのを断念したい。

1916年10月26日

1人当たり1円30銭の給与支給。

1916年11月3日

日本の天皇の息子が皇太子として布告される。

1916年11月6日

エルゼからの手紙を受けとった。

1916年11月10日

両親からの手紙を受けとった。

1916年11月19日

両親宛の手紙とヴィリー宛のはがきを送った。

1916年11月22日

健康診断。体重 [体重の記載はない]。

1916年11月26日

1人当たり1円30銭の給与支給。

1916年12月1日

最近目立つことだが、日本側は捕虜に対して以前より厳しく対処するようになった。例えば、最も軽微な違反行為に対しても、即座に拘留の罰を下す [注84]。手紙とはがきは1ヵ月当たり1人1通ずつしか出せない。用紙は日本側から支給されるが、便箋は2枚だけで、しかもあらかじめ行数が指定されている。今は将校も一般兵士と同じ時間に起床しなければならず、一般兵士のいる領域には足を踏み入れてはいけなくなった。同様に新聞記事も、もう将校側から兵士らに読んで聞かせてはならない。さらに、食事である。福岡の収容所から80

名の捕虜がこちらに来たにもかかわらず、肉の量は以前と同じである。唯一比較的多めにあるのはジャガイモである。肉は夏にはほとんど食べられない。なぜならここに届く頃にはもう臭くなっているからである。脂身なんぞも、たいていの場合とても食べられたものではない。納品されたレバーがあまりにもひどいので、即刻土に埋めなくてはならないこともあった。昼食はたいていジャガイモかライスにグーラシュ [パプリカ入り肉シチュー] である。ところがほとんどの場合、皿の中に肉は見つけれない。一人前が驚くほど少ないことがしょっちゅうである。夕食には、キャベツ、赤エンドウマメ、ソラマメ、ニンジン、インゲンマメといった野菜が使われてしかるべきなのに、実際のその中身は多くの場合、水とたくさんのタマネギに、ジャガイモが少々というのがほとんどである。今やほとんどの場合、野菜は皿の中にほんのわずかししか入っていないので、どんなに頑張っても見当たらない。肉といっても脂身の塊しかないが、わずかばかりのそれを皿の中に見つけても、あまりにまずくて食べずに取り出してしまう。目下のところ、食事は質も量も命がつながるぎりぎりの状態である。ここに長くいればいるほど、待遇はひどくなっている。

1916年12月3日

エルゼからの1916年9月19日付け軍事郵便小包を受けとった。中身は本1冊、刻みたばこ3パック、それに写真1枚。

1916年12月18日

紙巻きたばこが50本入ったベルタからの軍事郵便小包を受けとった。1916年11月2日に発送されたものである。

1916年12月20日

注文していたギター教則本を受領。

1916年12月21日

健康診断。体重18貫78匁 [約70.43kg] [\[注85\]](#)。

1916年12月23日

給与1円30銭。義援金2円95銭。

[この日の項、右端欄外に追記]

1916年12月28日

クリスマスが過ぎた。この最も素晴らしい祭りを、3度目も捕虜の境遇で過ごさねばならなかった。故郷や中国、日本そしてアメリカにいる親切な同胞からの十分な寄付やその他の贈り物があるのに、愛する人たちの輪の中そして愛すべき祖国でこの素敵な祝祭を祝うことが許されないのはまったくもって惨しい。とはいえ習慣の力は大きい。われわれはもっと前から故郷のさまざまな喜びがなくてもやっていくことに慣れなくてはいけなかったのである。今回が、故郷でも親元でもないところで過ごす最後のクリスマスになることを望むことしかできない。せめて故郷からクリスマスの手紙かはがきを受けとっていたらよかったのに、まったく来なかった。今からでも届きますように。

1916年12月30日

今日、久しぶりにはがきを受けとった。オーバーゲルツィヒからだった。これで両親がオーバーゲルツィヒにいることがわかった [\[注86\]](#)。

1917年1月2日

旧年は過ぎ去った。1年前よりももっと多くの希望を持って新しい年に突入する。平和になるという風の便りとかすかな平和の足音がこの地に孤立しているわれわれのところに近づいてきて、新年は平和な年になるであろうとたしかに考えることができる。それに捕虜生活の大きな葛藤と生活に終止符が打たれるときでもある。

1917年1月5日

両親とブルーノ宛に手紙を、ベルタとカール伯父さん宛にはがきを送った。

1917年1月6日

久しぶりにF.H. [F・ハーネマンか?] から手紙をもらった。

1917年1月25日

クーベ夫人から刻みたばこと葉巻12本が入った1916年11月10日付の小包を受けとった。

1917年1月27日

エルゼからの手紙とハインリヒからの手紙を受けとった。(小包を送ったとの知らせ)

1917年2月9日

クーベ夫人からの小包を受けとった。中身はクッキー、チョコレート、オイルサーディン。

1917年2月19日

両親からの手紙を受けとった

1917年2月24日

ハインリヒからの小包を受けとった。1916年10月8日に発送されたものである。中身は焼き菓子、菓巻35本、紙巻たばこ25本、ニシンの缶詰1缶、オイルサーディン、刻みたばこ1パック。

1917年3月3日

今日はひとり静かに26歳の誕生日を過ごした。

1917年3月4日

両親とハインリヒ宛に手紙、クーベ夫人とF・ハーネマン宛にはがきを送った。

1917年3月6日

両親からの手紙を受けとった。

1917年3月7日

久しぶりにブルーノからの手紙を受けとる。

1917年3月14日

ヴェント夫人からの新年を祝うはがき。

[この項、別紙片に記入して左端に貼付]

1917年3月27日

両親からの手紙を受けとった。

1917年4月8日

つまらない復活祭だ！ 唯一興味をそそったのは、将校らと合唱協会が催す演奏会だった。

1917年 4月10日

両親宛に手紙を、ブルーノ宛にはがきを送った。

1917年 4月11日

一度限りの給与として15円30銭が支給された（戦後の返済を見越したものである）。

1917年 5月 2日

エルゼからの小包を受けとった。中身は刻みたばこ 4 パックと紙巻きたばこ 20 本。1917年 2月13日発送。

1917年 5月 6日

両親宛にはがき。

1917年 5月14日

両親からの手紙を受けとった。

1917年 5月17日

驚いたことに、今日、ペチュケ氏の娘さん L からの手紙を受けとった。

1917年 5月21日

ベルタ宛の手紙、と同時にペチュケ氏の娘さんからの手紙に対する返事を、今日、送った。

1917年 5月27日

聖霊降臨祭の日々もいつものように過ぎた。唯一の気晴らしになったのは実に楽しく演じられた二つの寸劇だった。それ以外はまったくもって単調でつまらなかった。

1917年 6月10日

フリーゲルキャンプ中尉のために箱をひとつ作り上げ、3円もらった。ペチュケ氏にはがきを送った。

1917年 6月12日

ベルタからののはがきを受けとった。

1917年6月27日

両親からの手紙を受けとった。

1917年7月1日

両親宛に手紙を送った。

1917年7月3日

エルゼからの手紙を受けとった。

1917年7月10日

目下、この収容所はひどい状況が蔓延し、それが正当な苦情を訴える契機になっている。格別ひどいのは食事のことである。例えば、塩漬け肉を調理しろと言われるが、この肉はすでに強烈な臭いを発し、部位によってはウジ虫がわいているのである。それなのに日本の一等軍医 [この時期の収容所付き軍医は富澤禎重郎二等軍医] は、肉はもはや完全によいとは言えないが、まだ食べることはできる、と説明したのである。炊事係は肉の調理を拒否した。その結果その炊事二等下士は拘留されてしまった。悪臭のする魚があったことも何度かあり、もちろん誰もそれに手を付けなかった。それ以外にも、どんな些細な違反行為であっても拘留の処罰を受けるということが目につく。例えば朝礼にちょっとでも遅刻すると5日間の厳しい拘留である。

1917年7月29日

エルゼ宛に手紙を、ハインリヒ宛にはがきを送った。

[1917年] 8月29日

フランツ・ゾーラン死亡。[死因は結核性髄膜炎]

[この項、右欄外に記載]

1917年9月19日

今日、驚いたことに横浜のエーファ・シュラム夫人からの小包（中身はメットヴルスト1個とレバーペースト1/2ポンド缶を2個）を受けとった。

1917年9月23日

横浜のエーファ・シュラム夫人に手紙を送った。

1917年10月1日

昨夜、人生でかつて一度も経験したことのないような嵐【注87】を体験した。どのバラックも倒壊しなかったし、地表から消えてなくなることもなかったということは幸運な偶然のお陰であった。

朝4時頃のことだった。騒がしい声で突然私は目を覚ました。驚いたことに戦友のほとんどがすでに起きていて、寝床を部屋の隅に積上げていた。彼らが早起きした理由を聞く必要はなかった。というのは、不気味にヒューヒュー鳴り響く暴風とザーザーと打ち付ける雨が私に十分な説明を与えてくれたからである。よし、私も起きなければ。いたる所で雨漏りがし、突風が吹きつけるたびにバラックが揺れてギシギシと音を立てて今にも倒壊せんばかりであった。幸運なことに、そのようなことは何も起こらなかった。明るくなり、初めて外に出ると実に悲しい光景が広がっていた。

屋根の大棟のトタン板が若干はがれ落ちているのを除けば、収容所内の建物はどれも大して破損していなかった。しかし、われわれ兵士の庭園と将校の庭園、さらに収容所の外へと目をやるにつれ、悲惨さは増していくように見えた。ほんの数日前には花が咲き誇っていた庭園は、見る影もなくなっていた。ラウベ【あずまや】は瓦礫の山と化しているか、そうでなければ跡形もなく消えてしまっていた。日本兵の歩哨小屋は、もとあったところから遠く離れた場所でバラバラに砕けて瓦礫となりそこらじゅうに散らばっているか、ペしゃんこになって金網のフェンスに引っかかっていた。われわれの収容所のすぐ裏手にあったバラック（軍馬の厩舎）は、完全に倒壊していた。われわれの収容所からは少々離れたところにあった陸軍兵舎の屋根はほとんどが、剥がれているか、吹き飛んでいるかであった。ある日本人の農民の家は、われわれの収容所の周りを二重に囲っている柵のすぐ向こうにあったが、完全に滅茶苦茶になってしまい、家族のほぼ全員を押し潰してしまった。その家屋や調度品の一部は、収容所の広場にも落ちていた。電線もずたずたに切断されてしまい、そのせいでそれだけでなく退屈な夜の時間を、獣脂ロウソクの明かりの下で過ごさなくてはならなくなった。以上が、ごく狭い範囲のことではあるが、私が実際に見聞きした被害状況である。

だが、新聞（『ジャパン・アドバタイザー』【注88】）で知ることができた被害は、もっと大規模なものであった。今日の夕方までに報道された限りでは、以下の通りである。家を失った被災者＝東京だけで15万人。沈没した漁船＝1万6,000隻。倒壊した千葉県内の学校＝53校。

米やその他農産物の被害は600万円。人口300人の島【不明】は跡形もなく海に消えた。クジラ6頭が神戸村（千葉）【現在の館山市】の海岸に打ち上げられた。

同じくその海岸で、かなり大きな貨物船が座礁した。この台風は数日前からすでに予報されており、その中心は60キロメートル沖合にあった。一番巻き添えをくったのは東京と習志

野のあいだの地域であった。われわれは幸いにも台風の端を体感しただけだったが、それでも先にあげた被害を引き起こすほどの台風は十分に強力だった。

1917年10月2日

絶好の天候に恵まれ、今日、毎年恒例のトゥルネン大会がここで行われ、とても素晴らしい成果の数々が披露された。トゥルネン大会は陸上競技と器械体操に続き、トゥルネンの模範演技と人間ピラミッドから構成されていた。

1917年10月31日

今日の夕方、宗教改革400年記念のささやかな式典が行われ、ユーバーシャル哲学博士が、ドイツ民族が400年前に近代という時代に入ってからいかに発展してきたかについて大変興味深い講演を行った。さらに、合唱団と新たに組織された弦楽合奏団の30名が活躍した。

1917年11月18日

食事の貧弱さについてはまたしてもペンを取ってここにいくつかの点を書き留めておかずにはいられない。特にひどいのは夕食で、本来ならジャガイモと野菜と肉が出るべきであり、以前は肉がごくわずかだったとはいえそのような内容であった。ところが、今現在は食事があまりにも粗悪で、食べているときでさえ、自分がいったいどんな食材を食べているのか確認できないことがしばしばである。夕食は今では水85%、小麦5%、ジャガイモ2%、肉2%、野菜5%、香辛料1%である。食事がどんなものかは、485人に対して調理されるエンドウ豆またはソラ豆が15ポンド [約6.8kg] あるいはキャベツが14~16個であることを考えれば誰にでもはつきり理解できる。

昼食も以前よりはるかにひどくなった。5マルク硬貨の大きさと厚さの肉が一人前であることもまれではない。それに3~5切れのジャガイモである。ジャガイモはいまでは大変少なくてほとんど昼食ごとに塩ゆでのジャガイモが出るほどである。なんとか生きていくのにぎりぎりの量である。

食事を改善するためにわれわれは今ではドレンクハーン氏 [注89] から野菜とジャガイモとカブの分として少額の補助金をもらっている。(しかし、) それによって大いに好転したかというところではない。というのは、われわれが補助金で手に入れる分を日本側がまた差し引くからである [注90]。上の人たちに苦情を言っても無駄である。こうした状況であるにもかかわらず、月々俸給をもらっている人 [文官] たちはドイツに次のような内容の報告を送

っている。兵士たちは大変元気であります。ただ、庭に蒔く肥やしだけは不足しています、と [\[注91\]](#)。 [この部分は別紙に記載し右側に貼付]

1917年11月22日

6月27日以来初となる両親からの手紙を今日受けとった。

1917年11月24日

今日、横浜のシュラム夫人からソーセージが2本入った小包を受けとった。

1917年11月25日

シュラム夫人に小包を受けとったことを確認するはがきを送った。

1917年11月26日

両親宛に手紙、エルゼ宛に手紙、それにベルタ宛にはがきを送った。

1917年12月22日

横浜のシュラム家からの手紙を受けとった。

1917年12月25日

今日は私にとってまさしく幸福の日となった。というのは、まずは横浜から2つの小包が届いたからである。1つはシュラム家から、もう1つはポール夫人からであった。さらに、横浜のアルトシューラー夫人からもソーセージが1本届いた。格別にうれしかったのは、故郷から送金があったことと友人のブルーノから手紙が届いたことである。

1917年12月27日

クリスマスはいつもの通りだった。順番は、礼拝、プレゼントの配布、そしていつものお祭りが12時まで続いた。

1918年1月2日

新年の祝いもまたいつもの通りだった。お金を送ってもらったおかげで、大晦日の夜は思いっきり愉快に過ごすことができた。それにしても、この神に見放された土地で過ごした新年の祝いは、願わくばこれが最後になってほしいものである。

1918年 1月 8日

横浜のシュラム一家宛に、いただいた小包に対するお礼の手紙。
同じくポール夫人宛に、いただいた小包に対するお礼のはがき。
シーメンス&シュッケルト社経由で10円71銭を受けとったという証明書を送った。

1918年 1月 9日

エルゼからの手紙を受けとった。

1918年 1月29日

今日ペチュケ氏から初めての手紙を受けとった。

1918年 2月 5日

両親宛に手紙とブルーノ宛にはがきを送った。

1918年 2月 8日

両親から手紙。 [この日の項、右欄外に記載]

1918年 2月10日

水兵カール・ノーヴァクが死んだ [\[注92\]](#)。 [この日の項、右欄外に記載]

1918年 2月23日

驚いたことに今日ヴェティヒ嬢 [カウルとの関係不明] から手紙を受けとった。

1918年 3月 3日

エルゼ宛に手紙、ペチュケ氏宛にはがきを送った。

1918年 3月11日

横浜のシュフナー氏から手紙を受けとった。
市立ベルリン実業学校の管理部宛に手紙を送った。

1918年 3月12日

エルゼからの手紙を受けとった (シーメンス&シュッケルト社からの受取証が同封されていた)。

1918年 3月13日

横浜のシュラム家からの小包を受けとった（中身はソーセージ1本とワイン1本）。

1918年 3月14日

横浜のシュフナー氏からの小包を受けとった（中身はソーセージ1本、ハンカチ7枚、石鹼1個）。

1918年 3月15日

ベルタからの手紙と写真が同封されたルイーゼ・ランゲ [\[注93\]](#) からの手紙を受けとった。

1918年 3月16日

横浜のシュラム家から手紙。

1918年 3月16日

シュフナー家にはがきを送った。

1918年 3月24日

横浜のE・シュラム宛にはがき（小包と手紙のお礼）。

1918年 3月25日

今日、福岡に収容されていた最後の戦時捕虜たちがここに到着した。マイヤー - ヴァルデックと参謀将校たちを含め全部で75名だった。

1918年 4月4日

うれしいことに、今日は故郷（の両親）から焼き菓子の小包が届いた。菓子はすっかり潰れてしまっていたが、十分おいしく味わうことができた。

1918年 4月13日

ケルナー夫人（ハンブルク）宛にはがきを送った。

1918年 4月15日

エルゼ宛に手紙を送った。

1918年 4月17日

両親からの手紙を受けとった。

1918年 4月18日

横浜の E・シュフナーからはがきを受けとった。

1918年 4月19日

E・シュフナー宛にはがきを送った。

1918年 4月25日

今日は私の給与未払い分27円54銭を受けとった。うれしい驚きだった。というのも、せいぜい2円か3円だろうと思っていたからである。

1918年 5月3日

ついでに両親からの手紙を受けとった。

1918年 5月8日

うれしいことに今日また姉からの手紙と同じくベルタからの手紙を受けとった。

1918年 5月9日

エルゼ宛に手紙とベルタ宛にはがきを送った。

1918年 6月5日

今日われわれは初めて遠足に連れていかれた [\[注94\]](#)。収容所からおよそ2時間半のところにある村まで遠出した。そこで30分の休憩があり、村の中では自由行動で、店でささやかな買い物をすることもできた。帰り道ではいくつかの村を通ったが、そこでわれわれヨーロッパの者にとっては興味深いものをたくさん見た。

1918年 6月7日

今日、横浜からやってきた人からソーセージを1本もらったときには驚いた。そのソーセージはシュラム家が私のために託してくれたものだったのである。

1918年6月13日

今日、久しぶりに両親からの手紙を受けとった。

1918年6月16日

今日、ここでまた小さなスポーツ大会が開催され、私も綱引きに特別参加した。

1918年6月30日

横浜のシュラム家に手紙を送った。

1918年7月8日

横浜の幼い友人ゲルハルト君 [\[注95\]](#) からの手紙をもらった。

1918年8月25日

エルゼからの手紙を受けとった。

1918年9月11日

ペチュケ家からはがきを受けとった。

1918年9月18日

両親からの手紙を受けとった。

1918年10月4日

市立ベルリン実業学校から手紙の返事を受けとった。

1918年10月6日

両親と姉に手紙を送った。同様に横浜のシュラム家にも手紙を送った。

1918年10月13日

クーベ夫人宛のはがきを
ベルタ宛のはがきを
ブルーノ宛のはがきを } 送った。

1918年11月3日

今年になって何度か繰り返す持病のために、今日また営内病室に行かざるをえなくなった。

1918年11月5日

久しぶりに今日ベルタからの手紙を受けとった。

1918年11月8日

今日横浜のシュラム家の人たちが収容所を訪ねてきた。残念ながら、私は病気のため寢床を離れられなかったので、彼らに挨拶をすることができなかった。一家は私にワインとソーセージとビスケットの入った小包を送ってくれた。

1918年11月18日

今日、営内病室をふたたび出ることができた。

1918年11月25日

義援金の分配が不公正であるとして収容所内で大きな騒ぎが起こった。兵士たちの集会。代表委員の選出。対策を求めて司令部のトップに陳情 [\[注96\]](#)。

1918年12月3日

うれしいことに久々にブルーノ・フォン・エツレルンから手紙をもらった。

1918年12月5日

今日衛戍病院で ^{えいじゅ} [グスタフ・] シュルツェ砲兵伍長が死亡した [\[注97\]](#)。

1918年12月7日

陸軍省によると今日シュルツェ砲兵伍長は埋葬ではなく火葬されたとのことである。

1918年12月18日

私の幼い友人が今日横浜から私に手紙をくれて、また私に小包を送ると約束してくれた。

1918年12月24日

うれしいことに今日両親から小口の送金があった。S.S. [シーメンズ&シュッケルト社] 経由で30マルク = 8円33銭の支払いを受けとった。

今日は横浜からもここに小包が届いた。

1919年 1月7日

故郷が置かれている深刻な状況 [注98] のために、クリスマスの祝祭は大変静かに過ぎた。全体として打ちひしがれた雰囲気が見て取れた。新年は私にとって悲しい始まりだった。ふたたび病気になり、寝床で寝ていなければならなかった。私の健康状態は総じてよくない。ああそうだ、4年間の捕虜生活は一人の人間を次第に廃人にしてしまうものかもしれない。健康で思慮深く罪のない人々を鉄条網の中に閉じ込めることは犯罪である。それも4年以上もの間。これをいまや「20世紀の進歩」というのである！

1919年 1月9日

新年になって初めての郵便物である手紙を、今日、ブルーノと両親それぞれに送った。シユラム家にはがきを送った。

1919年 1月22日

5ヵ月ぶりに、今日またエルゼと両親からの手紙を受けとった。

1919年 1月26日

今日のような日曜日は二度と経験することはないであろう。およそ6日前から収容所で「インフルエンザ」 [注99] が大流行している。今日の状況をみるとこの病気は頂点に達した。およそ650名の兵士が床についている。今日は8名の重症患者が担架で衛戍病院に運ばれた。この衛戍病院はわれわれの収容所から45分のところにある。そこへ行く道はほとんどでこぼこである。4名の兵士が担架を運び、別の4名がこの兵士たちを支えなければならないし、さらに4名が交替要員として同行する。衛戍病院では患者たちは収容されるまで何時間も横になれなかった。ここでは絶望的な状態が支配していた。1名の兵士が今日衛戍病院で死んだ。

1919年 1月27日

今日もまた8名の患者が衛戍病院へ運ばれた。また今日も死者が1名出た。

1919年 1月28日

最後の重症患者4人が今日衛戍病院へ運ばれた。

1919年 1月29日

衛戍病院が超満員になったため、今日、兵舎1棟がまるごと病院として整備された。そこへ130名の重症患者が収容された。5名の医師、数名の衛生部下士官と兵士たちがいまこの病院にいる。衛戍病院で2名、この収容所で1名が死んだ。数少ない健康な兵士たちはつらい仕事をこなさなければならなかった。患者の搬送、埋葬、夜警、看護勤務のどれか、それに加えて収容所の仕事もあった。

1919年 1月30日

今日1名が収容所病院で、1名が衛戍病院で死んだ。

1919年 1月31日

今日2名が収容所病院で、1名が衛戍病院で死んだ。

1919年 2月 1日

今日また3名の死者。2名が収容所病院で、1名が衛戍病院で。

1919年 2月 2日

2名が収容所病院で、1名が衛戍病院で死んだ。

1919年 2月 3日

今日は収容所病院と衛戍病院で各1名が死んだ。

1919年 2月 4日

2名の死者。1名は収容所病院で1名は衛戍病院で。

1919年 2月 5日

今日1名が収容所病院で死んだ。

1919年 2月 6日

衛戍病院で今日1名が死んだ。

1919年 2月 8日

今日われわれの収容所病院で1名が死んだ。

1919年 2月10日

今日もまた収容所病院で2名が死んだ。

1919年 2月22日

今日はインフルエンザで死んだ者のために葬儀が執り行われた。プロテスタントの信者のためにはシュレーダー牧師が説教した。カトリックの信者には彼らの司祭によって読唱ミサが行なれた。

1919年 3月3日

今日、私は28歳の誕生日を迎えた。捕虜になってから5回目の誕生日である。

1919年 3月5日

今日、横浜のシュラム一家がここに来てジーベル陸軍少佐 [\[注100\]](#) と私を訪ねてくれた。彼らが私のために持ってきてくれた手土産は勿論だが、彼らと短い時間ながら話ができただのはうれしかった。遠い極東にいて久しぶりに同じドイツ人と少しでも話しができるというのはこの上なくうれしいものである。

1919年 3月7日

驚いたことに今日ヴェティヒ嬢から手紙を受けとった。これは5年ぶり2通目の手紙である。

1919年 3月22日

ベルタ宛にはがきを送った。

1919年 3月24日

両親への手紙を書いた。

1919年 4月17日

今日、私には永遠とも思われる程長く待ち望んだ両親からの手紙を受けとった。奇妙なことに、手紙をもらってもこれまでのように心からの喜びはなかった。文面は私にとってはますます空疎に思えた。愛する両親を非難するつもりはない。しかし、とにかくこの事実を私はどうすることもできない。

1919年 4月22日

またもや復活祭が過ぎ去った。戦時捕虜になって5度目だった。喜びもなく、わずかな時間でも楽しく過ごしたという記憶も残さず過ぎ去った。何年も前に愛すべき古き故郷で過ごした復活祭は何とちがっていたことか。私にももう一度あのような時間がもたらされるのだろうか。・・・・・・・・ ああ、なんて愚かなことを書いているんだ。感傷はなしだ。

1919年 4月26日

今日横浜の幼い友人ゲルハルト君からの手紙を受けとった。両親と一緒に次の日曜日に私を訪ねると伝えてきた。というのは、次の日曜日にこの収容所でトゥルネン大会があり、東京と横浜のドイツ人たちは〔陸軍〕省から収容所を訪問する許可をもらったのである。われわれのいつまでも続く気の抜けた日々にもまたちょっとした気分転換がやってくる。

1919年 4月27日

たったいま、また、本を1冊読み終えた。収容所の図書室にある良書の中の1冊である。この図書室はわれわれみんなにとって、特に私にとってはまさに宝庫である。私はすでにその中のたくさんの本を読み、それらの本からたくさんを学んだ。本は私が心の糧を得る源泉である。本は私の考えに元気を与え、私がけっして住むことのできない世界へと私を導いてくれる。本を通して私は、他の社会の人々のものの考え方、多面性、性格、人生を知り、そして、これこそ肝心なことだが、判断することを学んでいる。本には私にとって立派な教えと知恵が一杯詰まっていて、私の精神と魂をより豊かにしてくれる。

1919年 5月16日

友人のブルーノからの手紙が今日また私にはちょっとした気分転換になった。驚いたことに、彼の文面から私が彼にもっと便りをくれよと頼んだために、彼が痛い所をつかれたと感じていることが読み取れた。愚かにも私が二人の昔からの友情に甘んじて敢えてこの小さな頼みをしようと考えたとすれば、私はそもそもまったく思い違いをしていたのだ。まさに、人生なんてこんなものさ (Ja, such is life.)。

1919年 5月28日

今日両親からの手紙を受けとった。両親は私がすでに帰国途中であると思っている。しかし、私はまだこの金網の柵の中にいるのだ。

1919年7月8日

この収容所で1名の予備役軍人が罹病後まもない今日死んだ。ある商船の船長だった。亡き骸は火葬された。

うれしいことに両親からの手紙を受けとった。

1919年7月11日

今日、久しぶりにまた数行の便りを故郷に送った。両親宛の手紙と友人ブルーノ宛の手紙。

1919年7月14日

今日は、ほぼ1年ぶりに金網の柵の外で数時間過ごすことができた [\[注101\]](#)。

それはおよそ1時間半で行ける海に向かう散歩であった。田んぼや森や村々を通る道で、私には日本人の田舎生活を見るよい機会であった。しかし、ここは故郷とはまったく違っていた。われわれが海に着いたときは丁度干潮だった。ああ、何と目にも気持ちいいことだろう。ほぼ5年ぶりに青い海を眺め、1時間もすると視界が変わるといふのは。われわれは海辺に1時間いて、村の中を自由に歩きまわり、ちょっとした買い物もすることができた。それから往きとは別の道を通って引き返し、ふたたび有刺鉄線の柵の中に戻った。

1919年7月23日

われわれのトゥルネン協会の模範演技を見るために、今日はたくさんのドイツ人の同胞が横浜や東京からここを訪ねて来てくれた。残念ながらかれらは収容所の中に入る許可されなかったのだから、トゥルネンを見ることができなかった。本当に日本側の腹立たしいところである。訪問者の中には、私の支援者である横浜のシュラム氏親子も一緒にいた。息子の方は収容所に入る許可をもらっていたので、私は戦時捕虜の境遇で得たこの9歳の友人にトゥルネン競技者たちのわざの数々と収容所のすばらしいところを見せて楽しんだ。

1919年8月11日

今日、両親、ベルタ、そしてハインリヒにはがきを送った。これらのはがきはこの収容所で作成されたものである。

1919年9月3日

今日、私は久しぶりに両親宛に手紙を送った。

1919年9月7日

リヒャルト宛の手紙を出した。

1919年9月9日

日本側の管理事務所とのかなり長い交渉の末、ついにこの収容所で映画が上映出来るようになった。1本目が早くも上映された。

1919年9月14日

今日の夕方映画が上演された。上映は土砂降りの雨に見舞われてしまった。それでも観客たちは全員が最後まで耐えた。全員が全身ずぶ濡れになった。こんなことは習志野の愚かな戦時捕虜のほかには決してやってのけられないであろう。

1919年9月21日

今日、久しぶりにハインリヒに手紙を送った。

同じく今日ブルーノにはがきを出した。

1919年9月22日

やっとこの日本にいる戦時捕虜たちのことも気に掛けてくれるらしい。今日、公式の報告があり、条約が批准されるより前にわれわれが解放されるようにする、とのことである。スイス公使館がわれわれの本国移送を引き受ける。そのための諸準備が急いで行われている。

ああよかった、ようやくここまで来たか。やっと前向きな気持ちになれるのである。仮に諸準備にあと4週間から6週間が必要だとしても、もしかしたらクリスマスを故郷で迎えることができるかもしれない。

1919年10月16日

スイス公使館が今日われわれに、ドイツ人戦時捕虜を引きとり本国まで移送する全権委任をドイツ政府から電信で受けたと通知をしてきた。——諸準備のために6週間を要すると想定されている。

1919年10月17日

今日、日本にいるすべての戦時捕虜たちの結束を目的とする久留米〔俘虜収容所〕からの提案が当地の収容所委員会によって公表された。すべての要求を共同で〔ドイツ〕政府に提出することができるようになるそうだ。この団体 [\[注102\]](#) は祖国にすでに存在する元戦時捕

虜たちの協会に特別団体会員として加わるとのことである。

1919年10月20日

ザクサー大佐 [\[注103\]](#) が、スイス公使ならびに日本政府の要人数名と本国移送について協議するために東京へ行く許可を得た。

1919年10月31日

今日、突然発病して衛戍病院に運ばれた。

1919年11月9日

病気が治って衛戍病院を退院した。

1919年11月17日

一方はザクサー大佐とスイス公使館、他方は日本政府と数社の海運会社の両者協議の結果、3隻の汽船をチャーターし、12月15日、12月20日、12月末に出航させることになった。

1919年11月18日

両親と姉に宛てここからは最後となる手紙を送った。

1919年11月19日

リヒャルト宛に日本からは最後の手紙を送った。

1919年11月26日

青島で「SMSヤーグアル」に乗艦して戦った3名のポナペ人ヴィルヘルム、ゲオルク、ザムエルが今日ここから解放された。彼らは今では日本の臣民だがもっと早く彼らの故郷に送り返されなかったのは奇妙なことである。

1919年12月7日

今日ハインリヒのために最後の手紙を書いた。

1919年12月12日

今日、私の隣に寝起きしている戦友の不注意で私のギターが壊されてしまった。このギターは私が1916年に極めて簡素な道具を使って自分なりの方法で製作したものである。捕虜生

活で気分が沈んだ時にはしばしばこのギターで気を紛らわせたものである。そして思い出の品として是非とも故郷に持ち帰りたいと思っていたのだが。

ブルーノ宛に最後の手紙を送った。

1919年12月15日

今日、横浜のシュラム氏から1通の手紙を受けとった。彼はその手紙の中で、私がドイツへ旅立つ前に、いま一度彼と彼の家族を訪ねるよう休暇をとってほしい、そしてそのときには横浜を案内したいと希望を述べていた。残念ながらいろいろな理由でこれは実現できなかった。

1919年12月17日

今日、シュラム氏が突然現れて、ジーベル陸軍少佐殿と私を訪ねてきた。彼はわれわれの出発前にもう一度われわれと会って話がしたかったのである。彼は彼の家族からの挨拶を伝え、私には日本製の漆塗りのアルバムを1冊餞別として手渡してくれた。

1919年12月18日

収容所中が大忙し。いくつも箱詰めを作り、輸送用にそれを紐で縛る。これらの荷箱を駅まで搬送。

1919年12月19日

今日、総勢将校1名、兵士32名の先遣隊が収容所を去った。それは乗船する神戸港において習志野に割り当てられた汽船「喜福丸」で、われわれの到着までに受け入れ準備をするためであった。われわれが解放されるまであとほんのわずかしかないのに、まるで二度と再会できないかのような別れ方であった。

1919年12月23日

今日、直接故国ドイツからやってきた初めてのドイツ人の訪問をうけた。彼はうれしい知らせをもってきた。

1919年12月24日

出発に向けた諸準備。食糧の配布。車両等級や船内の分隊の振り分け。ああよかった。これでわれわれの帰還の旅がついに本物になる。

午前11時にわれわれの分隊長であるディージング機関中尉が別れの挨拶をするためにわれわれを呼び集めた。彼は早々に最初の便で収容所を去るからである。彼は熱のこもった言葉で海軍や捕虜生活でともに過ごした日々を振り返り、最後に、よい旅を、そして無事に故郷に着くよう祈る、と言ってくれた。

いつもよりいくらか多めの金と食糧を用意し、何年も待ち焦がれていた最後のクリスマス伊ブをできるだけ楽しく盛り上がるように努めた。そこで素晴らしい夕食も準備し、はやくも帰還の旅と愛する祖国への帰国に酔いしれた。

私は上官である機関中尉に部屋に来るようにと言われ、最高潮に盛り上がる戦友たちのおしゃべりから抜け出した。1時間半の話しが終わり、私はまた戦友たちのもとに戻った。まじかに迫る旅路を祝した最後のグラスを飲み干し、床についた。そして、ついに解放の時の鐘になった、鉄条網の内側で寝なければならないのはこれが最後だ、と考えながら眠りについた。

1919年12月25日

クリスマス最初の日。身の回りをすっかり片付け、出発の用意をした。10時10分、大きな広場に整列。日本の収容所長 [\[注104\]](#) が別れの挨拶をした。行軍の順番と列車車輛の振り分け。

1919年12月25日昼11時18分、私はふたたび手に入れた自由への第一歩を踏み出した。

12時50分津田沼駅に到着。ここで故郷の両親からの最後の手紙を受けとった。1時27分、津田沼を出発。夜の12時40分横浜を通過したが、そこには数名のドイツ人がわれわれを待っていてくれた [\[注105\]](#)。

1919年12月26日

品川に到着すると4時間停車した。朝6時10分、日本で一番高く(3,900m) [\[3,776.12m\]](#) 最も聖なる山、富士山の裾野を回って走った [\[注106\]](#)。富士山はあたかも雪に覆われた白い頭を下げてわれわれに別れの挨拶をしているようであった。

1919年12月27日

朝8時38分われわれは神戸に着いた。1時半 [\[注107\]](#)、港へ隊列を組んで出発。しかし私は、列車の旅もあと数時間というところでまた私を苦しめはじめた持病のために人力車で運

んでもらわなければならなかった。10時に埠頭に着いた。スイス公使館の委託を受けて東京の救済委員会のケストナー氏が捕虜たちを引き継いだ。今やわれわれはほんとうに自由であり、自由な市民である。自由だ、どこへ行こうと自由なのだ、と心は高ぶった。引き継ぎの後、直ちに喜福丸に乗船した。午後は荷物の引き取りに時間を費やした。各自が寝床などを確認した後、われわれは陸に上がることができた。

1919年12月28日

われわれは今朝8時5分、悪天候のなか、神戸を出港した。

1919年12月29日

午後4時、門司着。荷物数個と神戸で乗り遅れた数名を乗船させた。

1919年12月30日

午前10時50分、非常に寒くてどんよりとした天候のもと門司を出港した。午後7時、機関の故障のため海上でしばし停船。

1919年12月31日

持病が「喜福丸」の船上で初めて発症した。

1919年12月31日から1920年1月1日にかけて

日本と中国の間の公海上で大晦日の夜を迎える。具合が悪い。

1920年1月2日

夜中の2時に青島の外湾に到着し、朝8時15分に入港した。まだ青島に残っていたわずかなドイツ人たちが万歳の声を張り上げハンカチを振りながらわれわれを待っていてくれた。多くの中国人たちが彼らのかつての主人を待ち望んでいて、到着した人たちの中に見つけると子供のように喜んでいて、夕方には今も青島に置いてある荷物の受けとりが始まった。

1920年1月3日

両親、ギュンター、ランゲ、エッレルンにはがき。引き続き荷物の受けとり。

1920年1月4日

上陸許可。ファーバー病院のヴァイヒェルト博士が船内にいる病人たちを診察し、助言と、

できれば薬を与えて助けたいと申し出てくれた。そこで私も出かけてみた。残念ながら診察は午後遅くなってからしか行われなかった。私は診てもらうのを諦めた。というのは、午後には他の戦友たちと一緒にエガーという婦人に招待されていたからである。そこに着くとわれわれはそれぞれ暖かいお風呂につかった。それに続いて、ウサギ肉のロースト、ジャガイモ、ムラサキキャベツの昼食が出た。給仕は中国人の男だった。その後たわいない話を夕方まで続けた。さらにもう一度軽い夕食をとって元気になり、多くの葉巻や紙巻たばこをもらってこの厚遇してくれた家を出た。船に戻る途中さらにわれわれのかつて馴染みのペーターの中国風カフェに寄った。

1920年 1月5日

午後2時10分、われわれはあとに残る人たちが打ち振るハンカチの波の中、青島の港を後にした。残念ながらわれわれの最初の死亡者をここに置いておかざるを得なかった。われわれの航海は今やオランダ領インド〔現インドネシア〕に向かって進んだ。

1920年 1月17日

今日、火工下士のヴァイスが発病から24時間後に肺炎で死んだ。午後2時シンガポールとサバン [\[注108\]](#) のあいだの海上で葬儀が行われた。

1920年 1月18日

今日、「喜福丸」の船内で初めての発作が起こった。午前10時サバンの港に入り、錨を下ろした。午後3時30分、船は埠頭に係留された。4時にわれわれは上陸することができた。私は病気のためにこの機会を利用することができなかった。

1920年 1月19日

石炭、家畜、食糧、氷、水の積込み。上陸許可。

1920年 1月20日

午後4時半にサバンを後にした。就職口を手にした数名をサバンに残してきた。われわれの旅はさらにセイロンへと向かった。

1920年 1月24日

午前9時、セイロン沖。

1920年 1月25日

サバン到着前に始まった呼吸障害が、今日またベッドから離れられないほどひどくなった。この病気が実に嘆かわしい。ひょっとするともはや生きて故郷に帰れないかもしれない。

1920年 1月28日

私の病状はふたたび起き上がれるまでに回復した。

1920年 1月29日

病気が突然再発したので船内の医務室に連れて行ってもらわなければならなかった。

1920年 1月30日

まったくよくなるらない。

1920年 1月31日

まったくよくなるらない。私は故郷の愛する人たちと再会したいという夢を間もなく捨てるだろう。

1920年 2月 1日

比較的気持ちよい夜を過ごした後、朝方になっていくらか快方へ向かった。アデンを通過。バブ・エル・マンデブ海峡に入る。

1920年 2月 2日

病気は夜から昼へと次第によくなっている。バブ・エル・マンデブ海峡を通過。午後4時、ペリム島沖を通り過ぎた。

1920年 2月 5日

初めてベッドを離れた。

1920年 2月 6日

ゆったりと本を読みながら、紅海の真昼の太陽を浴びて元気を回復。何枚もの毛布に包まれ、腰掛けに座っていた。

1920年2月7日

真昼どき。ふたたび毛布に十分くるまって手すりのそばに腰掛けて、ま近に迫った帰郷について考える。医務室から出た。両親宛に手紙を書いた。夜10時にスエズに着いた。11時にスエズ運河に入る。

1920年2月8日

スエズ運河を航行。それにしても1914年の5月にここを初めて通過した時とは何と多くが変わってしまったことだろう。トルコとイギリスとの戦闘の跡がはっきりと認められる。運河兩岸にある大きなイギリス軍の兵舎を通過する。

1920年2月9日

イギリス軍の部隊を乗せた何隻もの旧ドイツ艦とすれ違った後、午前11時ポートサイドに到着した。

1920年2月10日

食糧と生きた家畜と水を積込み、午後の2時10分にポートサイドを出港した。
地中海は大しけ。

1920年2月17日

機雷の恐れがあるため急遽北に針路変更。

1920年2月19日

絶え間なく続く悪天候の中を9日間航海した後、今夜10時と11時の間にジブラルタル海峡に着いた。

1920年2月24日

発作の兆候。

1920年2月25日

今夜10時にドーバー・カレー間を通過。病気のためベッドに寝ていた。

1920年2月26日

午後はこれまでにない深い霧。ハーケ灯台船 [灯台代わりに係留された船] を見つけるため

に何回も停船。しかし、(午後2時にきわめて深い霧の中でハーケ灯台船を通り過ぎてしまって)すでに33海里も北に離れてしまったので、いくら探しても無駄であった。夕方5時に投錨。電信でヴィルヘルムスハーフェンに水先案内人なしで航海を続行することができるかを問い合わせる。本船の現在位置を知らせ、針路の指示を求める。

1920年2月27日

朝6時錨を引き上げた。ヴィルヘルムスハーフェンから返事が届いた。われわれの船は機雷堰の真ん前にいる。新しい針路が指示されて、水先案内人なしで先へ進めとのことである。

私の健康状態は、また起き上がれるほどに回復した。

1920年2月28日

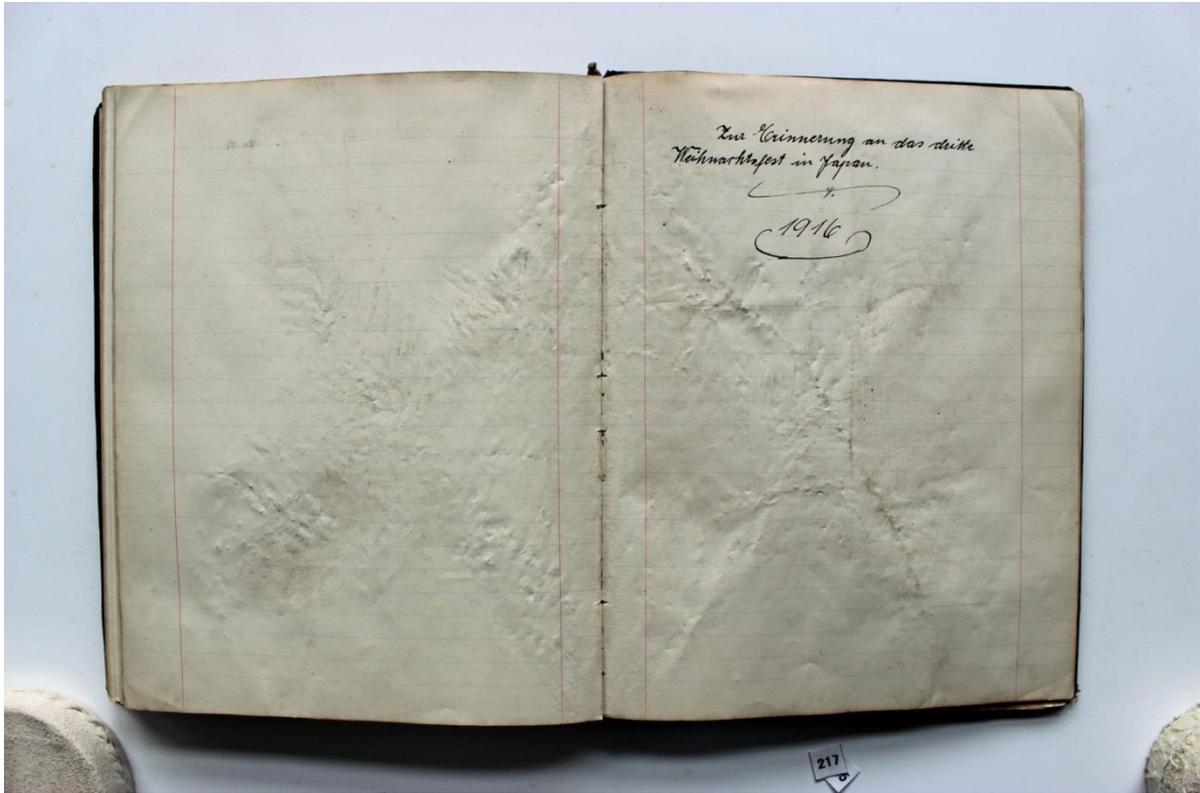
夜12時少し過ぎにわれわれがヤーデ灯台船にたどり着くと、そこで水先案内人が乗船した。ここからヴェーザー河口を上りヴィルヘルムスハーフェンの水門まで進み、朝3時に投錨した。これでわれわれはこの船旅の最後の区間も過ぎ、今や無事にドイツの港の前に着いたのである。この旅は64日かかったが、病気、悪天候そして絶え間ない機雷の危険に見舞われたにもかかわらず無事に終えられたことは、幸運だったといえることができる。船酔いは私は旅の間じゅうまったく感じなかった [注109]。

朝8時、われわれは水門を通過してヴィルヘルムスハーフェンの内港の中へと入った。

ヴィルヘルムスハーフェンの水門にいるあいだに、一人の上級海軍将校の挨拶を受け、感動的なことばで心からの歓迎をうけた。儀仗隊が整列し礼砲が轟き、海軍軍楽隊の演奏が流れるなか、われわれの艦はゆっくりと内港に入って行った。心からの歓迎を受けたにもかかわらず、われわれは多くの船の残骸と不気味な静けさに満ちた港の光景にぞっとした。1914年4月22日に私が出港した際にはここには堂々たる船が何隻も停泊していて、どこもかしこも活気にあふれ生に満ちていたのに。今は何と悲しい光景だろう。ここ以外のドイツはどんな様子なのだろうか。

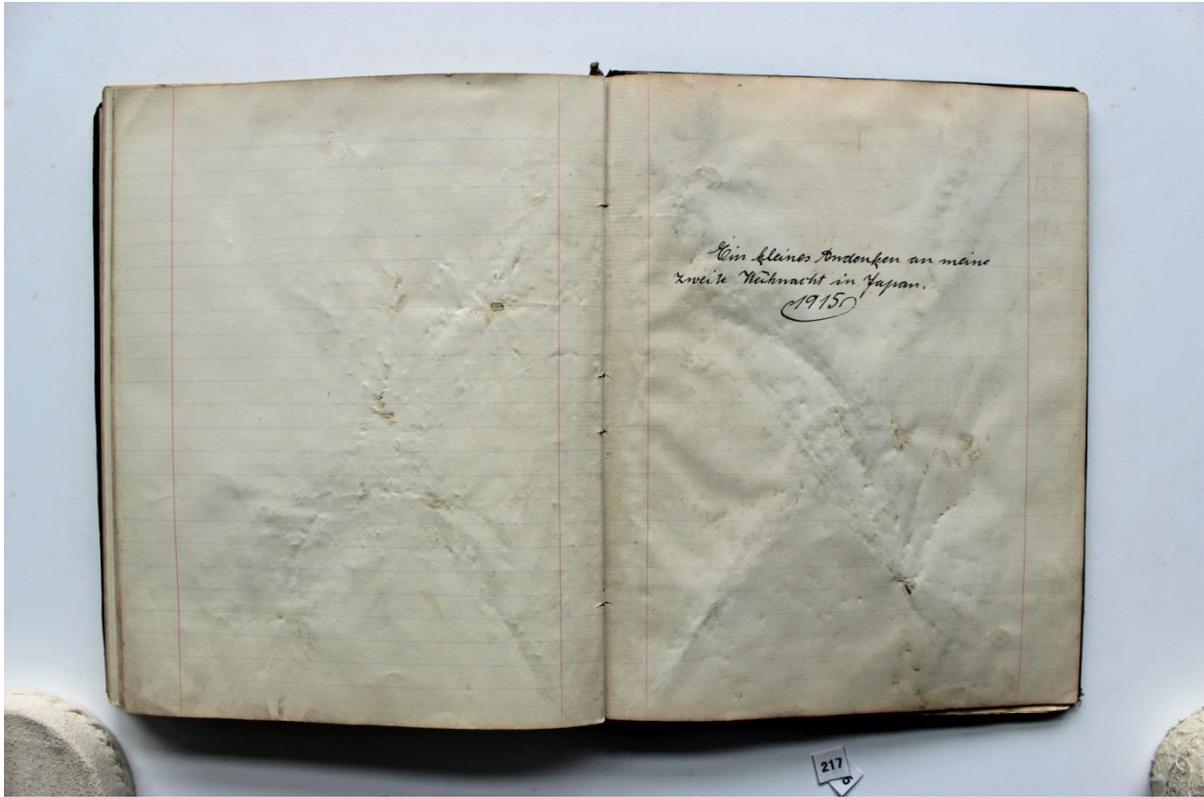
われわれの停泊地のすぐ前に、われわれより数日前に入港した「豊福丸」も見つけた。われわれは10時に接岸し、各自自分の荷物を整理し、わずかな持ち物を持って、11時30分に上陸した。私は6年ぶりにふたたび故郷の地に降り立ち、次に何が起こるかを待った。われわれは船の前に整列したあと、20班に分けられ、近くに停泊している居住船に向かった。それから次のようなことが続いた。身分証の確認、給食、入浴、健康診断、着替え。ここで手持ちの日本円を両替する機会が与えられた(1円が40マルクだった [注110])。私はすぐさま家に電報を打ち、到着は目前に迫っていることを知らせた。すべてが片付くと、いつの間にか

夕方になっており、われわれはこの夜宿泊することが決まっている1,000名収容の兵営へと向かった。



〈日本での3度目のクリスマスの思い出に〉
1916年

〈右開き8・9ページ〉 [\[注111\]](#)



〈日本での2度目のクリスマスの小さな思い出〉
1915年

〈右開き6・7ページ〉



〈私が習志野/日本に滞在した記念〉
〔蛇の抜け殻〕[\[注112\]](#)

〈右開き 5 ページ〉



〈1915年9月7日東京から習志野に引っ越した記念〉 [稲穂]

〈右開き4ページ〉



〈1914年東京／日本に到着した思い出に〉

[ヒナギクの花]

[左下隅]

あるドイツ人ご夫婦がわたくしに親切に
してくださったことに感謝の意を込めて、
皆さまにご挨拶を申し上げます。

葉山あき

東京 [市] 芝 [区] 南佐久間町一丁目一番

〈右開き 3 ページ〉



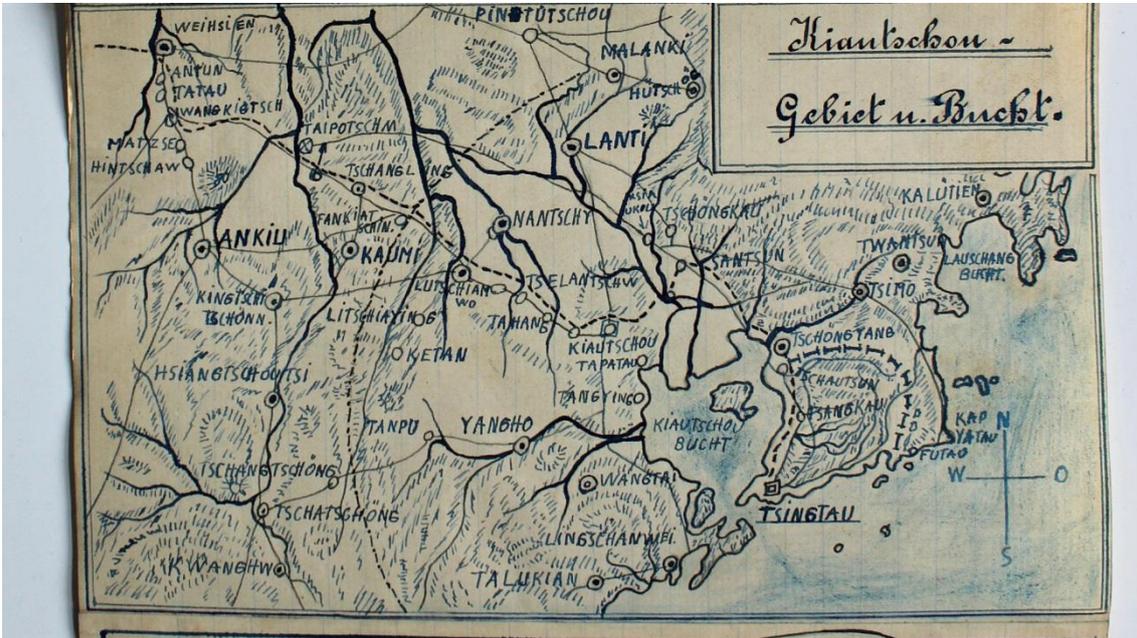
〈1914年日本でのクリスマスの思い出に〉 [縦ノ木の枝葉]

〈右開き2ページ〉

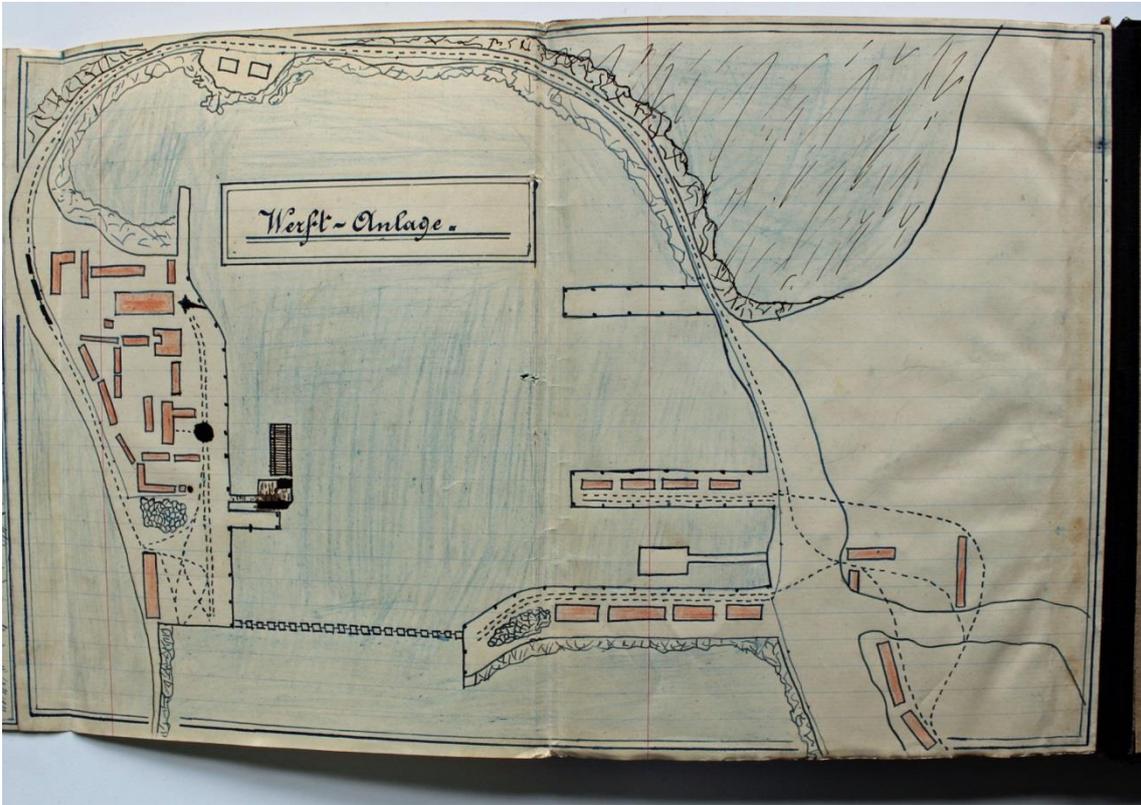


〈地図3. 青島と膠州湾〉

- ・ 膠州湾内の右上の艦 (J) は「ヤークアル」、中央の艦 (K.E.) は「カイゼリン・エリーザベト」。どちらも自沈。左の艦 (P.B.) は不明。
- ・ 膠州湾入り口には自沈した「ティーガー」他の軍艦が書かれている。
- ・ 湾の入り口の右にあるのがTSINGTAU (青島) の街。外に向かって防衛線が敷かれていた。
- ・ 右下にある「M.&M.」は「マックスとモーリッツ」と呼ばれた2島。「大公島」と「小公島」だと思われる。



〈地図 2. 膠州地方と膠州湾と青島TSINGTAU〉



〈地図 1. 青島大港と造船所（●は起重機、その右の黒いのは「浮きドック」）〉



〈カウルが描いた青島の地図3枚〉

〈右開き1頁〉

注と解題

注1 上のドイツ語はヘルマン・ヘッセの詩 „Neujahrsblatt ins Album“ (1900年)。下の日本語は島途健一訳「アルバムへの新年のことば」(日本ヘルマン・ヘッセ友の会・研究会編『ヘルマン・ヘッセ全集16巻 全詩集』、2007年、臨川書店、409-410ページ所収)。

注2 Fürstenwalde (ブランデンブルク州) シュプレー川上流の町。ベルリンから東南東に約50キロメートル、オーデル河畔のフランクフルトから西に約30キロメートルに位置し、鉄道と^{アウトバーン}高速道路によって両市へのアクセスがよく工業都市としても発展している。聖マリア大聖堂があることから「大聖堂の町 (Domstadt)」を標榜する。

注3 父親はフェルディナント・ラインホルト・カウル (Ferdinand Reinhold Kaul) で石炭商を営んでいたという。母親はベルタ・マリー・カウル (Bertha Marie Kaul) (旧姓: ランゲ Lange)。姉はフリーダ・エリーゼ・ヘレーネ (Frieda Elise Helene) (通称: エルゼ Else) といい、1889年10月31日生まれ。

注4 カウルが速記を習得していたことを知ることによって、後日の「総督府日令」や日本軍の「ビラ」や「クリスマスのプロローグ」の全文がなぜ原文のまま(!)記されているかを知る手掛かりを与えられる。現物を見たかもしれない「ビラ」も含めて、日記のもとになるメモ用紙に速記で書き留めていたのではないかと思われるのである。また、日記の標題の「1915年に記す」というのも多少わかりにくいだが、それまで速記で書いてきた出来事を1915年の某日に真新しい「日記帖」に通常の文字で書き改め、それ以後は通常の文字で書き続けたのではないかと想像される。

注5 精霊降臨祭の日曜日は復活祭後の第7日曜日。1909年のOstersonntag (復活祭の日曜日) は4月11日、Pfungstsonntag (精霊降臨祭の日曜日) は5月30日であった。

注6 1901年ノイエ・アウトモビール社 (N.A.G.) として開業、1915年ナツィオナーレ・アウトモビール社に社名変更 (N.A.G.)、1930年ビュッシング社と合併。乗用車のほかバス・トラックなどの製造で時代を牽引した。

注7 Célestin Adolphe Pégoud (1889-1915) フランスのパイロット。ヨーロッパで最初にパラシュートで降下したり、第一次世界大戦では6機を撃墜してエースパイロットになった。

注8 ベルリンのヨハニスター飛行場で海軍所有第2号機 („L 2“) の飛行船ツェッペリンLZ 18が炎上、墜落して乗員28名全員が死亡した事故が起こったのは1913年10月17日と伝えられる。カウルが目撃したのはこの日のこの事故であったと思われるので、この日の日付は1913年10月17日とするのが妥当である。

注9 Neukölln ベルリン市南部に位置する地区。カウルが1909年8月以降に職についたフーゴ

ー・ハルトゥング社、エルンスト・ガルベ社、パウル・トマシェフスキー社、ノイエ・アウトモビール社や飛行船事故があったヨハニスター飛行場はいずれもノイケルンの近くにある。

注10 習志野市教育委員会によれば『カウルの日記』には「洋式帳簿」が使われているという（製本は日本、用紙はイギリス製）。日記帖を選ぶのにこの「演劇協会」の会計係のときに使った帳簿にこだわったのではないかとも思われる。

注11 Frankfurt an der Oder（ブランデンブルク州） ベルリンから東南東に約70キロメートルのオーデル河畔の西側に位置する。19世紀プロイセン王国の交易都市となった。第二次世界大戦後オーダー川がドイツとポーランドの国境になったため、同市は分割され一部はポーランド領になった。東西統一後は経済的に低迷している。1991年に「ヴィアドリナ欧州大学」ができて大学町にもなった。

注12 Kiel（シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州） バルト海に面したドイツ北部の軍港の町。19世紀半ばから海軍の主要拠点の一つとなり、海事産業も栄えた。1918年11月に水兵の反乱がおき、ドイツ革命の発端となった。大学や多くの博物館がある。

注13 Wik（シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州） キール市のキール運河の南側に位置する地区。キール湾（フィヨルド）を挟んだキール市の西岸地区には海軍関連施設が多くあり、ヴィークには駐留兵のために次々と兵営が建設された。

注14 原文はFlunki「船内をあちこち走り回る客室乗務員の愛称」が使われているがあえて「従卒（将校に専属し、身のまわりの世話をする兵）」とした。

注15 ザンクト・パウリヤアルト・ハンブルクは賑やかな歓楽街があることでも知られる。

注16 Seiner Majestät Schiff「帝国軍艦」の略。SMS Jaguarの姉妹艦にはSMS Iltis, SMS Tiger, SMS Luchs, SMS Panther, SMS Eber がある。Jaguarは「ジャガー」、Iltisは「ケナガイタチ」、Tigerは「トラ」、Luchsは「オオヤマネコ」、Pantherは「ヒョウ」、Eberは「雄イノシシ」。

注17 „Muss i denn“（別れの歌）はシュヴァーベン地方の民謡。『ローレライ』の作曲者フリードリヒ・ジルヒャー（1789-1860）が採譜・編曲して1827年に発表した。

注18 Wilhelmshaven（ニーダーザクセン州） 北海に面し、ヤーデ湾入り口に位置するドイツ北部の軍港の町。港はエムス・ヤーデ運河と直結している。キールとともに19世紀半ばから海軍の主要拠点。第二次世界大戦後はすべての造船所が解体されたが、1956年ドイツの再軍備の結果再び海軍港となった。1958年以降ドイツ最大の石油輸入港。2000年に「万博」を開催した。

注19 „Nun ade, du mein lieb Heimatland“（さらば、わがいとしの祖国よ）はアウグスト・ディッ

セルホフ（1829-1903）が19歳のとき作詞した。

注20 この時点ではまだ平時であって「戦時」ではない。

注21 巻末「カウルの軌跡」参照。

注22 英語表記の「ビスケー湾」はバスク語では「ビスカシア湾」と呼ぶようであるが、この湾はフランスとスペインの海岸が囲む北大西洋側の湾である。カウルが航行の順に述べているとするとこの名前に該当する湾は見当たらない。

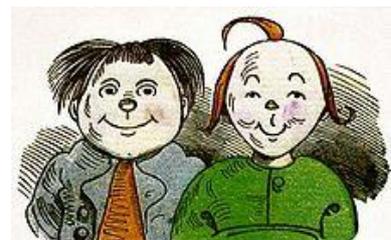
注23 「マルタ」は島名であるか領土名であって都市の名前ではない。マルタ島最大の都市はヴァレッタである。ナポレオン戦争終了後、イギリスのマルタ領有が確定する。1964年イギリスから独立。1974年にはイギリス連邦加盟のマルタ共和国となった。首都はヴァレッタである。第一次世界大戦ではイギリスの要請により日本の海軍が地中海に展開したときここに基地をおいた。

注24 ニビア礼拝堂（Nibbia Chapel）のことと考えられる。第二次世界大戦中の1941年2月、空襲により破壊された。

注25 旧約聖書でモーゼが神から十戒の石版を与えられたという「シナイ山」は、シナイ半島南部にあるホレブ山（2,285メートル）であるともいわれる。日記には「アデンを通過」したあとに「シナイ山」を見たとしているが、シナイ山とアデンの位置関係からして、シナイ山を見たのはこの日より前であると思われる。「12使徒」と呼ばれる12の小山が何を指すのかについては不明であるが、明治42年（1909）に洋行の往路（カウルの1914年航路とは逆方向）で通過した寺田寅彦が、バブ・エル・マンデブ海峡と「兄弟島」（El Ikhwa Islands, Brothers Islands）の間で「十二使徒という名の島を右舷に見た」と記している（『旅日記から』『寺田寅彦随筆集 第一巻』岩波文庫、岩波書店、49ページ）。

注26 青島（独Tsingtau, Qingdao） 中国山東半島南部膠州湾入り口に位置する。ドイツ帝国が1898年に99年間の租借地として都市開発をはじめ、近代的な要塞都市を築き、東アジアおよび南太平洋における軍事拠点を作った。今日も当時の建築物の数々や青島ビールなど、ドイツ統治時代の痕跡が多く残っている。

注27 ドイツの風刺画家・絵本作家・詩人ヴィルヘルム・ブッシュ（1832-1908）が『マックスとモーリッツ（Max und Moritz）』（1865）で作り出した二人組のいたずら小僧のキャラクター。ドイツ語圏では広く知られている。「マックス」と「モーリッツ」と呼ばれる島は「大公島」と「小公島」のことだと思われる。



マックスとモーリッツ

[注28](#) 現在の行政区では九江市と景徳鎮市は同じ江西省の北部にあり直線で約125キロメートルしか離れていない。「景徳鎮の壺」を間違えて九江に結びつけたものと思われる。揚子江沿いの「九江」を通ったことは間違いではない。

[注29](#) 「山東鉄道」は青島－済南間を走る鉄道である。

[注30](#) カウルは „kleine Waise“（小さなみなし児）と記している。揚子江（長江）の観光スポット。

[注31](#) 1896年7月23日台風のため沈没した「SMSイルティス」の乗組員の「英雄的死」を悼む記念碑。

[注32](#) Friedrich Lüring (1876-1941) 1894年海軍入隊。1912年3月海軍大佐。1912年11月～1914年8月砲艦「SMSヤーグアル」艦長。その後も各種軍艦の艦長等を勤め、1919年8月海軍を退役。なお、この部分の原文はOberleutnant Telz（テルツ中尉）となっているが、カウルの思い違いであると思われる。

[注33](#) Fritz Matthias (1882-1945) 1901年海軍入隊。1904年海軍少尉。1912年大尉。1914年8月砲艦「ヤーグアル」の副長。同砲艦の艦長代理。1914年12月静岡俘虜収容所、1918年8月習志野俘虜収容所へ移送。1919年12月解放。1920年8月31日退役。

[注34](#) ロシアの貨物船「リャザン」（1909年進水）。1914年8月4日、朝鮮半島沖で「エムデン」に拿捕された。武装解除中の巡洋艦「コルモラン」（1914年8月3日参照）の艦名を引き継ぎ、8月10日「コルモラン」と改名された。

[注35](#) Karl von Bodecker (1875-1957) 1896年4月海軍入隊。1897年少尉。1901年中尉。1914年6月砲艦「ティーガー」艦長。同年8月～11月「ヤーグアル」艦長。病気になり大阪の衛戍病院に入院。快癒後1915年3月大阪俘虜収容所、1917年2月似島俘虜収容所に収容される。1919年12月解放。戦後も要職を務める。1923年10月少将。

[注36](#) 日本の最後通牒は8月15日、ドイツの回答がなく日本がドイツに対して宣戦布告したのは8月23日である。日本軍の動きの詳細については、次を参照されたい。

Tad&Aki「青島物語—続編」 <http://tad.world.coocan.jp/Qindao-2/Preface-200.html>

[注37](#) 第四次対仏大同盟中、1807年にナポレオンの軍隊によるコルベルク（現ポーランド・コウオブジェク）の包囲があった。このときプロイセン軍司令官グナイゼナウ、自由軍団の指導者シル、市民代表のネットルベックらの市民によって要塞は和平が成るまで保持された。また、グラウデンツ（現ポーランド・グルジョンツ）の要塞も1807年1月から12月にかけて、ヴィルヘルム・ド・クルビエール将軍の下、駐屯軍はフランス軍に対して首尾よく防御した。

[注38](#) Alfred Meyer-Waldeck (1864-1928) サンクトペテルブルグ生まれ。10歳のときハイデル

ベルクに転居。父はドイツ文学の教授。「ヴァルデック」は父のペンネーム「マイヤー・フォン・ヴァルデック」からとって1903年に改名。1884年海軍幼年学校入学。1890年海軍少尉。1909年大佐。膠州総督府参謀長を経て1911年第5代膠州総督。1914年8月青島最高司令官。同年11月福岡俘虜収容所、1918年3月習志野へ移送。1920年5月帰国。1920年1月中将昇進。1920年8月退役。

注39 日本海軍の三等駆逐艦「白妙」^{しろたえ}のこと。1914年、青島の戦いに参加。同年8月31日、膠州湾外霊山島沖で座礁。同年9月4日沈没。

注40 日本は青島戦において初めて飛行機を投入した。陸軍はモ式二型と呼ばれる4機、ニューポールNG二型単葉1機、海軍は水上機母艦「若宮」にモーリス・ファルマン式（モ式）複葉水上機大型1機と小型3機を搭載させた。ドイツ軍は当初ルンプレー・タオベ2機をもっていたが、初飛行のとき一機は墜落炎上してしまった。グンター・プリュショウ中尉が乗るタウベ〔「鳩」の意〕は日本軍陣地の偵察を主な目的とし、自軍要塞に射撃目標を的確に伝えて日本軍を悩ませたという。なお、同中尉は降伏の直前の11月6日にタウベに乗って青島を発ち、江蘇州まで飛び、機体を燃やす。その後、上海、サンフランシスコを経て、途中イギリス軍に捕らえられたりしながらも長い逃走劇の後翌年5月ドイツに帰り着いた。

注41 これは攻撃によるものではなく暴風による自然災害であった。

注42 膠州湾口の南側にある岬。青島を近代都市にするための10年計画を策定し、在任中にチフスで亡くなった第2代総督オットー・イエシュケ（Otto F. P. Jäschke）海軍大佐（1851-1901）に因んで名付けられた。

注43 このピラの日本語の原文は次のように伝わっている。

警告

戦術上の要求なく単に敵手に対し其の用をなすと嫉視し武器艦船其の他諸構造物を破壊し其用途を完^{まつた}からしめざるは神意に悖り^{もと}亦人道に反す故に武士たるの名誉を保留せんとする軍人は是れを敢行せざるべきを信ずるも右敢て^{あえ}守城将士^{しゅじょうしやうし}に告ぐ。

山口信夫著『青島戦記』（大阪朝日新聞社 大正4（1915）年1月発行）、128頁。

注44 日本海軍の二等海防艦「高千穂」^{たかちほ}のこと。「S 90」から発射された魚雷3本のうち2本が命中、「高千穂」は積載していた補給用の魚雷が誘爆して轟沈した。艦長伊東祐保大佐以下271名が戦死、生存者は3名であった、という。

注45 Harry Mündel（1876-1946）1895年4月海軍入隊。1898年少尉。1906年大尉。1912年12月少佐。1914年11月「ヤーグアル」最後の艦長。1914年11月大阪俘虜収容所、1917年2月^{にのしま}似島俘虜収容所に収容される。1919年12月解放。1923年4月海軍少将待遇を授与され退役。その

後は実業界で活躍。

注46 Friedrich von Kessinger (1866-1946) 1884年陸軍入隊。1885年少尉。1896年大尉。1913年中佐。1914年第3海兵大隊司令官。1914年11月名古屋俘虜収容所。1919年12月解放。1920年陸軍へ。少将。

注47 „Nach der Heimat möcht ich wieder“ (我ふたたび故郷へ帰らん) は作曲家カール・クロマー (1865-1939) の作詞・作曲 (1885頃)。

注48 原文はOitsima。この綴りから「宇品」とするのは難しいが、カウルにはそう聞こえたのであろう。日清戦争の頃から宇品港は陸軍の兵站基地化し、さらに広島港として拡大する重要な港である。また、『日記』によればカウルたちは下船したあとすぐに列車に乗せられた、という。当時、宇品には駅舎があり、宇品―広島間には軍用鉄道が敷設されており、専用列車で途中乗り換えることなく宇品から広島 (当時、山陽本線の起点) を経由して東京に向かったと思われる。

注49 „Kohldampfmarsch“ (腹ぺこマーチ) この種の軍歌は数多くあり特定できない。

注50 1903年 (明治36年) の神戸港での大観艦式を記念して、1907年六甲の山腹に大きな錨が浮かぶように松が植樹された。

注51 ここは浅草本願寺である。当初全国に設置された12の「俘虜収容所」のうちのひとつ「東京俘虜収容所」として利用された。ここには当初「ヤークアル」の乗組員125名とクーク中佐 ([注55]参照) が率いるOMD (東アジア海軍分遣隊) の120名他計314名が収容された。翌年の1915年9月に、新設された習志野俘虜収容所に移転する。

注52 西郷隆盛の嫡男西郷寅太郎中佐 (後、大佐)。隆盛が西南戦争で逆賊とされ、遺族は鹿児島で生活していたが、明治天皇の思召しで寅太郎はドイツ・ポツダムにあったドイツ陸軍士官学校に10年近く留学した。1902 (明治35) 年には侯爵となり貴族院議員にも就任した。1914 (大正3) 年に東京俘虜収容所、続いて1915 (大正4) 年には移転した習志野俘虜収容所の所長になった。死亡の日時と原因についてはフォーゲルフェンガーが語ったということばを根拠に、1919年1月1日習志野のドイツ人捕虜たちに新年の祝詞を述べたあとスペインかぜのために死去したとの説 (『ドイツ兵士を見たニッポン』91-92頁) があるが、ここでは1919 (大正8) 年1月4日発行の『東京朝日新聞』の記事を再録しておきたい。

大正8 (1919) 年1月4日

習志野俘虜収容所長 西郷大佐逝去

◇南洲翁の長男／昨春来の肺炎にて

習志野俘虜収容所長陸軍歩兵大佐・・・(略)・・・侯爵西郷寅太郎(54)氏は、昨春来肺炎に罹り、曾根主治医を初め高木、入澤両博士の診療を受け、麻布市兵衛町2ノ88の自邸に静養中の処、昨3日午前11時、病革りて遂に逝去せり。

・・・・・・・・(略)・・・・・・・・

侯の病歴

一時癒ったが昨秋再発

西郷寅太郎侯の病歴に就き聞く処に依れば、侯は習志野俘虜収容所長として勤務中、昨年4月頃感冒に罹り、次で肺炎を併発したるを以て、一時麻布の私邸に帰省して静養したるが、夏期に入り殆ど全快したる模様なるより、転地を奨むる者ありしも、職務重大なればとて、強いて習志野に帰隊したり。夫れより9月に入りて肺炎再発し、重患に陥りたれば、同月下旬、再び私邸に帰り、只管療養中なりしも、病勢は日に険悪に赴き、12月上旬に入りて最早や全快の望みなきに至り、曾根主治医の外に入澤博士及び高木兼二博士の来診を請いたるも、衰弱益甚だしく、遂に昨日午前11時急変、カンフル食塩注射及び酸素吸入を行いたるも効も無く、近親圍繞の裡に逝去せるなり、と。

つまり、『東京朝日新聞』によれば、西郷所長は習志野でスペインかぜが流行して死者が出始めたときにはもはや東京と習志野を往復するような状態にはいなかったのである。

注53 このポナペのドイツ兵士の一人は、イムケ・リュース著『祖父ユリウス・リュースの1913～1920年における中国・南太平洋・日本での体験——そして度重なる命拾いについて』(千葉県日独協会ボトルシップ研究会訳) [<http://jdg-chiba.com/>] で取り上げられたユリウス・リュース (Julius Lührs) のことである。

注54 Johannes Überschaar (1885-1965) ライプツィヒ大学で明治憲法の研究で法学博士の学位取得。来日して関西でドイツ語、ラテン語を教えていたが、青島の日独戦に応召し、主にヴァルデック総督の通訳を務める。東京と習志野の俘虜収容所では日本と日本文化についての連続講演を行う。解放後帰国し、ライプツィヒ大学教授となり日本文化を講じ、日本文化研究所所長になったが、第二次世界大戦前に再来日し関西大学他で教鞭をとった。

注55 Paul Kuhlo (1866-1943) ヴェストファーレン州ハム出身。1884年陸軍入隊、1908年少佐。1912年海軍歩兵隊、1913年北京・天津における東アジア分遣隊 (OMD) 隊長、1914年4月中佐。同年8月OMDと共に膠州へ。同年11月より東京並びに習志野の俘虜収容所に収容。1919年12月解放。1920年1月大佐昇進。

注56 クリスマスツリーの樅の木の世話をした日独の二人の学者や鉄道会社の好意的待遇について知りたいと思い、東京と仙台のYMCAに問い合わせたが、どちらも資料が焼失して残っていないとのことであった。しかし、『丸亀俘虜収容所日誌』（田村慶三翻刻）の大正4（1915）年12月24日の日誌には

「・・・ 准士官以下収容所本堂中央に昨年同様仙台基督青年会より寄贈に係る樅の木を植立して祭壇を設け・・・」

と記載され、大正5（1916）年12月25日発行の『東京朝日新聞』には丸亀俘虜収容所のクリスマスの様子を伝える記事のなかに次のように書いてある。

「・・・ 当日聖壇に飾るべき例のクリスマスツリー6本は、先日東京の基督協会より、仙台市近郊から伐出した樅木を寄贈して来た。・・・」

したがって、クリスマスツリーは少なくとも1914～1916年の3年間は継続して寄贈されていたようである。

注57 この表裏2ページにわたる「クリスマスのプロローグ」は同日付けの日記の間に差し込む形で糊付けされている。

「クリスマスのプロローグ」はパーティの前口上で、サンタクロースに扮した兵士が語ったのであろう。恐らくカウルはそれを速記で書き留めたと思われる。あるいは、カウルの創作かもしれない。なお、原文では脚韻を踏む詩の形になっている。

注58 „Des Jahres letzte Stunde / Ertönt mit ernstem Schlag.“（1年の最後の時が重々しい鐘の音とともに鳴り響く）はドイツの詩人ヨハン・ハインリヒ・フォス（1751-1826）の詩の一節。

注59 Traugott Diesing（1881-?）メクレンブルク=シュトレリッツ大公国コルピン出身。1901年海軍入隊。1910年海軍技師。1914年8月砲艦「ヤークアル」乗艦、同年9月機関少尉昇進。同年11月より東京並びに習志野俘虜収容所に収容、1919年12月解放。1920年1月大尉昇進。カウルの直属の上官。私的にも交流があった。

注60 この75,000マルクについて、大正4（1915）年2月7日付け『東京朝日新聞』は「青島俘虜救恤金」すなわち義援金であるとし、円換算37,800円とした上で、月額、准士官2円、下士1円50銭、兵卒1円20銭が支給されると伝えている。さらに、「但し、士官以上は日本将校と同一の俸給を受け居れば、之を支給せず」と付け加えている。この75,000マルクの費目については定かではない。『東京朝日新聞』がいうようにこの後様々な団体・個人から送られてくる義援金（Liebesgabe）と同じものなのか。青島総督府以来の役人（Beamte）に払われる「俸給（Gehalt）」（1917年11月26日参照）ではなさそうである。カウルはこの金（+義援金？）の残金15円30銭が最後に支給された1917年4月11日までこの金を„Löhnung“（給

料」と呼んでいる。

大正3（1914）年11月26日の『東京朝日新聞』は「西郷収容所長談」として次のように伝えている。

「俘虜の月給はクーロー中佐の183円を筆頭として、中尉47円、少尉40円、准士官日給40銭、下士以下は日給30銭の規定なるが、右はいずれも我国軍人の各官等に準拠せるものにて、（中略）之は飽迄武人の面目を保たしむるを目的とせる俘虜取扱規定に拠れるものなり。尚、右月給中將校以上の者は該月給の範囲内にて衣食住其の他一切の費用を自弁するの義務を有し、下士以下は各給料の範囲内を以って当方にて一切の賄をなし与え、衣食以外の間食又は嗜好品たるみかん、ビスケット、コーヒー、煙草等は、希望により適宜現品にて支給する規定なり。」

[注61](#) 鷲、ドラゴン、軍旗、「SMSヤークアル」、富士山と日の出、それに自分の写真を配したカウル家の紋章（ワッペン）をデザインして、何かで知った長崎の業者に刺繍させたようである。写真を[138ページ](#)に掲載。

[注62](#) オーバーゲルツィヒ（Obergörzig）はフルステンヴァルデから東北東に約43キロメートル、オーデル川を挟んで対岸にある町。第二次世界大戦後はポーランド領の町ゴジツァ（Gorzycy）にあたる。[\[注86\]](#)も参照。

[注63](#) このはがきの送り主についての言及はない。町の人たちが複数の兵士に送った慰問のはがきの1枚かもしれない。

[注64](#) Hans Heimendal（1890-1963）ラインラント州クレーフェルト出身。1909年海軍入隊、1912年少尉、1914年8月砲艦「SMSヤークアル」の艦長助手。同年11月より東京並びに習志野俘虜収容所に収容。1919年12月解放。1920年1月大尉。第二次世界大戦では海軍に復帰するが、平時は実業の世界で活躍。習志野ではラウベを所有（1917年12月27日焼失）。カウルはハイメンダールから英語を教わる。

[注65](#) カウルが青島あるいは天津で家を手に入れたとは書いていないし、日記で見る限り彼にそのような余裕があったとは思えない。また、このような内容であれば、通常、はがきでなく封書で依頼するもので、信憑性が疑われる。このはがきの意図がどこにあるか、また、このような「いたづら」が横行していたかどうかは不明である。

[注66](#) シーメンス社（当時の正式社名はシーメンス・シュッケルト電気株式会社）はドイツと日本が戦うことになったため日本での企業活動はできず、このときは同社の支店長ハンス・ドレンクハーンを中心にドイツ人捕虜の救援活動をしていた。（[\[注89\]](#)参照）。

[注67](#) シュレーダー牧師（出生年等不明） 普及福音新教伝道会の伝道師として来日し、1909年

から1920年まで東京・横浜独逸語福音教会の牧師として従事。習志野俘虜収容所をたびたび訪問して説教をした。

注68 寺倉正三中尉のこと。彼が転出し、後任は原田武中尉。

注69 誤報。この時点でドイツの潜水艦が日本の巡洋艦を撃沈したという事実はない。駆逐艦「榊」がオーストリア＝ハンガリー海軍の潜水艦（SM U-27）の攻撃を受け、艦長以下59名が死亡したのは1917年6月11日である。しかも、このとき「榊」は沈没を免れている。

注70 大正4（1915）年7月23日発行の『東京朝日新聞』に次のような記事がある。

「名古屋俘虜収容所にては21日、俘虜一同を集め、過般、俘虜の戦傷者に対し皇后陛下より義眼、義手足を御下賜の旨を伝えたる所、一同大に感激し、…」

同じことが習志野俘虜収容所でも行われたのであろう。大正の貞明皇后のこの行為は日清戦争にまでさかのぼる。

「明治の昭憲皇后は日清戦争の際には反対する天皇を説得して広島の本営に赴き、日本の戦傷兵だけでなく清国の兵にも義手義足の下賜とその後のケアに配慮を示した」（森暢平、河西秀哉編『皇后四代の歴史』吉川弘文館、2018年）

注71 Wilster（シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州） ハンブルクから約50km北西に位置する町。ラベ川およびキール運河（北海－バルト海運河）の北海側の河口に近い。カウルとの関係は不明。

注72 Walter Oehler（1888-1968）、ブランデンブルク州グロス・リヒターフェルデ出身。1908年海軍入隊、1913年砲艦「イルティス」の哨戒および砲兵将校、1914年8月膠州海軍砲兵隊、同年9月中尉。同年11月より東京並びに習志野俘虜収容所に収容。1919年12月解放。1920年1月大尉。カウルはエラー中尉から幾何学を学ぶ。

注73 シュロイダーバル（^{てききゅう}擲球）。ベルト（長さ28cm、幅2.0cm）がついた革製または合成樹脂製のボール（重さ1.5kg、1.0kg、0.8kg。年齢と性別によって異なる）を投げて距離を競う投擲競技。

注74 ファウストボール。バレーボールに似て、2つのチーム〔各5人〕がネットをはさんでプレーする。ボールは腕または拳（Faust）で打ち、ワンバウンドしたボールを打つことが許される。1セットは11点先取制。1試合のセット数は不定。

注75 元来、日曜日の朝、教会の礼拝の後に行きつけのレストランや飲み屋で一杯やりながら日常生活や政治を語り合う集いをいう。教会に行くことが少なくなった今日でもことばとして残っている。

注76 大隈重信（1838-1922）と加藤高明（1860-1926）のこと。第一次世界大戦開戦時の第二次

大隈内閣（1914. 4. 16～1916. 10. 9）では大隈派の加藤は外務大臣を務めた。大隈は外務大臣にはなったが、駐英大使にはなっていない。加藤には駐英公使の経歴がある。

[注77](#) エンゲル係数を比較すればドイツ人のほうが日本人より「生活水準が高い」、ということか。

[注78](#) 『サムナー・ウェエルズによるドイツ兵収容所調査報告書』（高橋輝和訳）には習志野俘虜収容所における3時間の調査の結論として「人々は全員、健康状態が良いように見え、日本の管理部側の取り扱いに全く満足しているように思われました。収容所自体に、あるいは俘虜達の扱い方に何らかの批判を加えるのは難しいことでしょう。」と述べている。

[注79](#) フリードリヒ・シュテルツェ（Friedrich Stertze）二等兵曹のこと。

[注80](#) 原文は „Auferstehn“。1758年フリードリヒ・ゴットリープ・クロップシュトックの詩„Die Auferstehung“「復活」。

[注81](#) „Ich hatt’ einen Kameraden“「私には一人の戦友がいた」。1809年ルートヴィヒ・ウーラント作詞。1825年フリードリヒ・ジルヒャー作曲。

[注82](#) 『クリスティアン・フォーゲルフェンガーの日記から』（『ドイツ兵士の見たニッポン』161頁）の1916年8月22日の項には「コレラが突発し、同時にチフスが流行しだしたので、・・・」とある。赤痢にしる、コレラやチフスにしる、これ以上の記載はどちらの日記にもない。翌月9月20日の健康診断ではカウルの体重はほぼ回復している。

[注83](#) 『日誌 丸亀俘虜収容所』（田村慶三翻刻）の大正4（1915）年3月1日の日誌には衛戍司令官が来所して、通信に関する陸軍大臣の指示命令を伝えた、と書かれている。

一、将校曹長及副曹長は月三、四回の封書或は葉書を書くことを得

二、下士卒は月一、二回の封書或いは葉書を書くことを得

三、事務所より供給されたる書簡紙及封筒を用ふること

もちろん、カウルは（一）ではなく（二）が該当する。なぜこのように通信が厳しくなったのか。背景には（日本の）軍の情報の遺漏を防ごうとする意図があったと思われる。

『日誌』の同年8月23日の項には、ある兵士が久留米収容所の捕虜に宛てて送ろうとした古雑誌数部の「第一頁欄外に数行の通信文（鉛筆書）」が発見され、それが「普通の通信文」であることが判明したにも関わらず、「密かに通信を企てし不都合を責め・・・雑誌全部を没収」した、とある。

また、大正5（1916）年11月23日には「秘密通信」とした項で、「久留米収容所に於て俘虜書翰中より散見せる状況に依り察すれば北京又は天津に彼等の情報集収所あるか如くも思はれ到る処に於て秘密通信を実行しあるものの如し」とあり、ドイツ軍の組織的な情

報収集を疑うまでになっている。この項の最後は、「彼等か如何にして秘密通信を為し居るかを研究し置かは将来彼等と戦闘を交ふる時諜報勤務の一助と為すを得へし細心注意し以て遺漏なきを期すへし」となっている。つまり、日本軍にとって青島の戦闘は終結したが、日独が対立する世界大戦はまだ続いている、ということである。

注84 [注83] に挙げた捕虜たちの「秘密通信」のほかに、収容所の捕虜の「脱走」という問題がある。『東京朝日新聞』『東京日日新聞』が取り上げたものだけでも、1915年1月に熊本、同2月に姫路、同11月に福岡、1916年7月に久留米、同10月に習志野で起こっている。また、大正5（1916）年11月10日の『東京日日新聞（房総版）』には「独探か 怪しき1外人＝千葉駅より行方を晦す」として「独探」、すなわち、ドイツ人スパイの暗躍の可能性を載せているが、他にも「独探」の記事はいくつかある。日本側としてはすべての収容所で規律を厳しくせざるをえなかったのであろう。

注85 カウルはこれまで毎月行われる健康診断の際の体重測定の結果をほぼ2ヵ月おきに日記につけてきた。この日の体重は安心を与えたのか、諦めなのか、これ以後体重の記載はない。いずれにせよ入所時の体重には戻っていない。

年月日	1914.12.8	1915.04.17	1915.06.18	1915.08.16	1915.10.19	1915.12.17
体重(kg)	72.75	71.40	68.18	68.63	69.79	68.55
年月日	1916.02.16	1916.4.15	1916.6.17	1916.8.16	1916.9.20	1916.10.19
体重(kg)	70.13	70.20	70.50	66.71	71.21	70.50
						1916.12.21
						70.43

注86 オーバーゲルツィヒからはいままでに2回はがきが届き、この日は3回目。この間カウルは2回はがきを出している。それなのに今回初めて両親がオーバーゲルツィヒにいたことがわかった、というのはどういうことか。この町には伯父カールやいとこのハインリヒらが住んでいたのかもしれない。1916年から17年にかけてドイツを襲った「カブラの冬」（家畜の飼料にするカブラさえも食べたという飢餓状態の冬）と呼ばれる未曾有の飢饉のために両親のどちらかの実家（両親とも農家の出）を頼って一時的に滞在したとも考えられる。

注87 東京湾台風。折しも満月の大潮のせいで高波が起こり、特に浦安、市川方面は甚大な被害を被った、といわれる。

注88 1890年にアメリカ人ロバート・メイクルジョンによって横浜で創刊された英字新聞。1940年にジャパン・タイムズに吸収合併された。

注89 Hans Drenkhahn 戦争により企業活動ができなくなったシーメンス・シュッケルト社の支社長（あるいは支配人）。東京、横浜、神戸に設置されたドイツの救援委員会の東京の責任者であったが、ドイツ政府や各種団体からの給料、義援金、慰問品、書籍、新聞雑誌、とき

には楽器等を東京に限らず全国の収容所の捕虜たちに届くようにした。

[注90](#) 『丸亀俘虜収容所日誌』には次のような記載がある。

「大正四（1915）年十二月二十四日 晴

午後独逸海事協会ドイツ赤十字社より俘虜救恤金参百八拾六円八拾五銭を情報局通牒に基き例の如く俘虜両中隊班長を経て俘虜准士官以下に交付す。

終て東京シーメンス、シュッケルト電気株式会社ハンス、ドレンクハーンより俘虜クリスマス祭用として豫て寄贈に係る金五百円の内百九拾円を右と同方法に依り交付す（残金は俘虜の希望に依り俘虜全般の為購買せし野菜代等に充てたり）」

[下線は訳者]

収容所側はクリスマスのために寄贈された義援金500円のうち190円を兵士に付し、残金310円を兵士たちの食事の野菜代にまわした、というのである。

この日のカウルの日記は同じようなことが習志野でも行われていたことを示している。しかし、習志野ではドレンクハーンからもらう補助金が野菜購入のために使われていないというのがカウルの見方である。

日本に来て初めての朝食の後、「日本側の待遇は大変に人道的（human）である。」と書いたカウルだが、明治以来ドイツ人に対する敬意と親しみをもち、戦時捕虜規定に沿うべく捕虜に対して配慮していた日本側ではあったが、南太平洋の島々や青島を獲得して戦争は終わりというわけではなかった。連合側にある反ドイツの一員であり、現に日本は1917年2月に海軍の艦隊を地中海や喜望峯ほかに派遣することになるように対独戦時体制にあることには変りない。それが[\[注83\]](#)、[\[注84\]](#)で挙げたような「秘密通信」「脱走」「独探」といった捕虜たちの行動があれば収容所の待遇も厳しいものになったのであろう。

なお、[\[注60\]](#)の西郷所長の談話にあるように、下士・兵卒の食事に対して将校の食事は厨房も料理人も会計も別であった。収容所に「屠殺場」や「冷蔵用地下室」があったのは将校たちの料理に必要だったからである。要領がよいフォーゲルフェンガーは、1917年新設の収容所にできた将校用の調理場に「コック見習い」として入り込み、思いきりその立場を謳歌して「118ポンド〔約53.1kg〕から160ポンド〔約72kg〕以上に体重を回復することができた」と彼の『日記』に書いている。

[注91](#) 満足に食べるものを食べていなければ、出るものも出ない。カウルの精一杯の皮肉。

[注92](#) 死因は虫垂炎。

[注93](#) 「ランゲ」は母の旧姓。母方の親戚か。

[注94](#) 船橋市金杉にある御滝不動金蔵寺まで遠足。

注95 この横浜生まれの少年ゲルハルト・シュラム（1910. 6. 27-1969. 2. 3）は、後年、ウイルス研究の専門家になり、チュービンゲンのマックス・プランクウイルス研究所（現：発生生物学研究所）の所長になった。1958年には米国のアルバート・ラスカー基礎医学研究賞を3人で受賞、1969年にはそのうちの一人がノーベル生理学・医学賞を受賞したが、シュラムは死亡のため受賞できなかった。

注96 ここでは「義援金の不公正な分配」についての不満が問題だが、ほぼ1年後の1919年10月17日に見るようにドイツ人戦時捕虜、特に下士官と兵卒の不満として組織的な動きになる。

注97 死因は結核性腹膜炎。

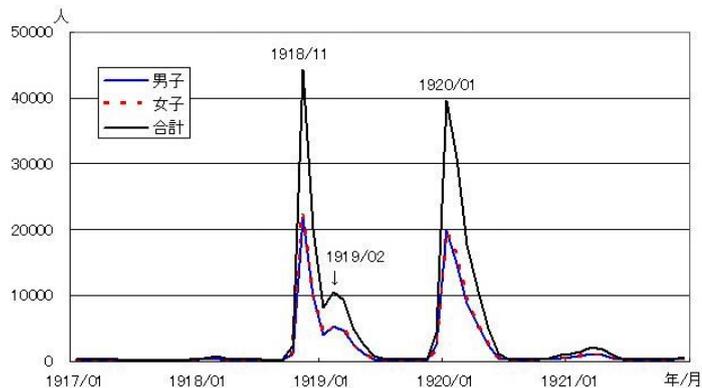
注98 西部戦線で泥沼の塹壕戦に陥っていたが、1918年8月にはついに連合軍が反撃、ドイツ軍の敗北が決定的になる。9月27日連合軍との講和交渉開始。10月末休戦交渉に反対する海軍は大洋艦隊主力の出撃を命ずるも水兵たち約1,000名の反抗にあい実現せず。11月4日には4万人の水兵・兵士・労働者がキールの市と港湾を制圧し、艦に赤旗を掲げる（キール軍港の反乱）。11月9日には首都ベルリンでゼネストが起こる。「ドイツ共和国宣言」が発せられ、翌11月10日にはヴィルヘルム2世がオランダに亡命する、など、ドイツ国内は経済的、政治的、軍事的に激動の時代に入り、ドイツ革命が進行していた。11月11日にはドイツと連合軍が休戦協定を締結した。こうした情報は多かれ少なかれカウルの耳にも入っていたと思われる。

注99 池田一夫他『日本におけるスペインかぜの精密分析』（東京都健康安全研究センター年報、56巻、369-374（2005））にならって試算してみる。この時期習志野収容所には907人のドイツ兵が収容されていた（ウルリケ・クラインによる）。カウルの言う通りだとすると、およそ650人のドイツ人捕虜がスペインかぜに罹患した。（ハインリヒ・ハムは『日記』のなかで「600人の病人のうち26人が習志野で亡くなったらしい」と書き、ヤーコプ・ノイマイヤーは『日記』のなかで「収容所の1,000人のうち、約900人が病気で寝込むことになり、2週間の内に25名の捕虜が流感で死亡した」と書いている。）カウルは25人の死亡を記録しているが、この人数は現在船橋市営習志野霊園に葬られているドイツ兵30名のうちスペインかぜで倒れた兵士の数25人と同じである。

上記『精密分析』によれば当時スペインかぜの流行は3回あったという。

ドイツ兵の罹患は第1回の流行がピークを迎えて減少に転じた後一時的に増加した時期にあたる。第1回の流行期間の患者数は全国で21,168,398人、死亡者数は257,363人、人口1,000人当たりの死亡者数は4.50人、患者100人当たりの死亡者数は1.22人という。同じように数字を出してみると、習志野の捕虜の人数907人、患者数650人、死亡者数25人、1,000人

当たりに換算すると死亡者数は27.56人、患者100人当たりの死亡者数は3.85人となる。このなかでも、習志野俘虜収容所の捕虜の死亡者が25人というのは日本全国の平均から見れば極めて多いといえる。それが兵士たちの年齢層のせいなのか、収容所の閉鎖空間のせいなのか、日頃の食



インフルエンザによる死亡者数の月別推移
(池田他 2005 : 図 1)

事のせいなのかは理由はわからない。第2回の流行はカウルたちの帰国時期に重なっているが、死亡者が出なかったのは幸いであった。兵士たちに免疫ができていたか、偶然であったかはこれも不明である。大正8(1919)年1月24日付け『東京日日新聞』は「ワルデック重態 世界風に罹る」と報じているが、その後快癒。将校のなかにはスペインかぜによる死亡者はいなかった。

注100 Carl Siebel (1867-?) ラインラント州バルメン出身。1888年陸軍入隊。1913年陸軍少佐。海軍歩兵隊。1914年8月守備軍工兵将校および総督府工兵部長。同年11月福岡俘虜収容所、1918年3月習志野へ移送。1919年12月解放。1920年1月中佐。

注101 場所は不明であるが千葉市の稲毛海岸と思われる。『東京日日新聞』(大正8年6月11日)には、同年6月10日に約200人の捕虜が千葉市の稲毛海岸に遠足したことが報じられている。

注102 その後まとまるとみられる『元在日本戦時捕虜の会』のドイツ政府に対する要求書のメモが遺族のもとに残されていた (<http://www.tsingtau.info/>)。それによれば、この会は次の6つの要求を掲げている。1. 将校と役人を除く下士官と兵卒に対する一人1月当たり15円の補償、2. 青島への移転ほか、国家のために支出した費用の補填、3. 青島陥落によって失われた資産の補償、4. 敵政府の押収あるいはその他の事情によって失われた資産の補償、5. 収容所経費の支払いと隠し資産の故国への無料移送、6. 捕虜期間中に生じた(歯科を含む)医療費ならびに年金の支払い。この要求がどうなったかは不明である。

注103 Ludwig Saxer (1869-1957) ブランデンブルク州カールスブルク出身。1889年海軍入隊。1898-1901膠州勤務。帝国海軍省部長職等を経て1913年大佐昇進。同年膠州総督府参謀本部参謀長。1914年11月福岡俘虜収容所、1918年3月習志野へ移送。1919年12月解放。1920年1月少将昇進。

注104 西郷寅太郎大佐の後を継いで山崎友造大佐(後に少将)(1873-1925)が所長になった。

注105 津田沼→横浜→品川の順に通ったように書いてあるが、横浜と品川を書き間違えたとしても時間的な関係が不透明である。

注106 当時はまだ丹那トンネルが開通していなかった（開通は1934年12月1日）。そのため国府津から箱根外輪山を御殿場経由で沼津へと「富士山の裾野を」大きく「回って走った」のである。

注107 時刻の記載が間違っている。

注108 Sabang. 現在、インドネシアの最も北かつ西にあるアチェ州の都市。島をサバン島という。

注109 船酔いになることもなく、スペイン風邪にも罹患しなかったカウルだが、何度も病院に入院したり、寝込んだりしている。

- 1回目 1915年5月1日 ～ 5月12日 営内病室入院 「痔病」
- 2回目 1916年3月8日 ～ 3月11日 営内病室入院 「下腹部の不調」
- 3回目 1916年8月16日 「赤痢のような下痢による急激な体重の減少」
- 4回目 1918年11月3日 ～ 11月18日 営内病室入院「持病のため」
- 5回目 1919年正月 「病気になり、寝床で寝ていなくてはならない」
- 6回目 1919年10月31日 ～ 11月9日 衛戍病院入院「突然発病して」
- 7回目 1919年12月27日 「持病のために人力車で運んでもらう」
- 8回目 1920年1月18日 「喜福丸船内で初めて発作」
- 9回目 1920年1月25日 ～ 1月28日「呼吸障害のためベッドにつく」
- 10回目 1920年1月29日 ～ 2月5日 船内医務室入院 「再発」
- 11回目 1920年2月24日 ～ 2月27日「発作の兆候」「ベッド」「回復」

注110 「1円が40マルク」と聞いてカウルはどう思っただろうか。1マルク=0.025円である。ほぼ1年前の1918年12月24日、両親から送金を受けて「30マルク=8円33銭」と書いている。1マルク=0.277円である。（中間手数料を度外視していえば）この1年だけでもマルクの対円価値は11分の1に下落したことになる。ちなみに、**[注60]** であげた『東京朝日新聞』は「青島俘虜救恤金」75,000マルクを「円換算37,800円」としている。すなわち、大正4（1915）年2月7日では1マルク=5.04円であった。これを基準にすれば、マルクの対円価値はこの5年のあいだに201.6分の1に下落したことになる。この1920年2月28日のあとマルクはさらに天文学的に下がり続け、インフレが進行する。

注111 カウルはこの日記帳を左開きには日々の出来事を綴り、右開きには記念のモノを時系列にそって貼り付けていこうとしたようである。青島で描いた地図、品川でもらったヒナギク

の花、クリスマスの樅ノ木、習志野で見つけた稲穂と蛇の皮というように。〈右開きXX頁〉としたのはそのためである。ただ、ヒナギクの花とクリスマスの樅ノ木の枝葉のようにページを開いて左側に時間が先のを張ったのは、本を左から開く習慣がそうさせた小さなミスである。稲穂より蛇の皮を見つけたほうが先かもしれない。

[注112](#) 千葉県立中央博物館の栗田隆気氏の教示によると、この蛇はシマヘビの可能性が高いという（習志野市教育委員会編『ドイツ兵たちの習志野』による）。

この「注と解題」を執筆するためだけでなく、本文を理解するためにも、„Wikipedia“ほか多数のインターネット上のサイトや印刷された書籍、論文等のお世話になりました。『エーリッヒ・カウルの日記』にはカウルの甥ハンス・ツァーベル氏が2001年に原文を編集して作成した私家版 „Erich Kaul Marinesoldat in Tsingtau, Kriegsgefangener in Japan“（青島の水兵、日本の戦時捕虜、エーリッヒ・カウル）があって、その一部（1914年11月の日本への移送以降）は星昌幸氏と小阪清行氏による翻訳がインターネットで公開されており、参考にさせていただきました。

参考資料

1. カウルの両親とカウルとその妻マルガレータ

カウルの正式名はエーリッヒ・カール・ヴィルヘルム・カウル。

1941年2月7日にベルリンで亡くなった、とあります。享年49才。呼吸器系の疾患が原因とされています。



カウルの両親

カウル

カウルと妻マルガレータ

1911年

1930年

(画像は習志野市教育委員会提供)

2. 東京俘虜収容所（浅草本願寺）にて（1）



右から2人目がカウル。上に見えるのはツェッペリンの飛行船の手作り模型（東京俘虜収容所にて）。

この写真は日記の表見返しに挟まれていた。

（画像は習志野市教育委員会提供）

3. 東京俘虜収容所（浅草本願寺）にて（2）



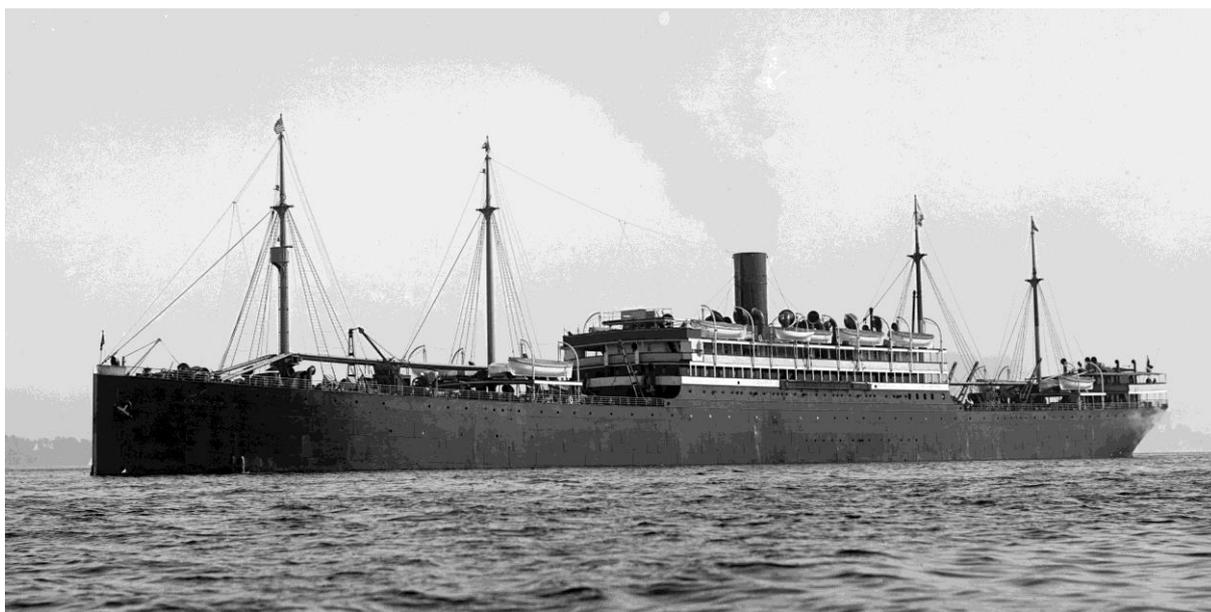
1915年4月9日 午前中、「ヤーグアル」乗組員は「ハイメンダール少尉殿に集合写真を撮ってもらった。」（東京俘虜収容所にて） この写真は『エーリッヒ・カウルの日記』に添えて習志野市に寄贈された。

カウル（囲み）を拡大。



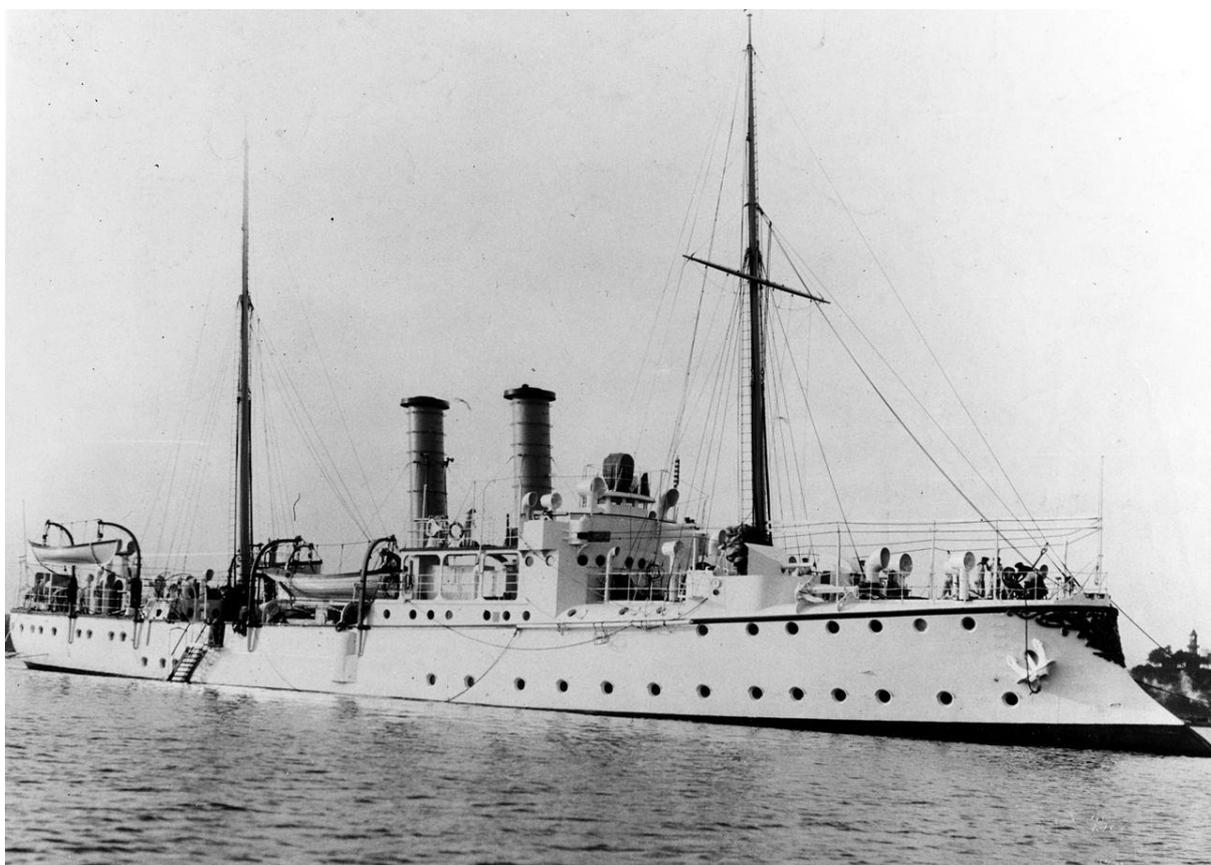
（画像は習志野市教育委員会提供）

4. 輸送船「パトリツィア」



[https://de.wikipedia.org/wiki/Patricia_\(Schiff,_1899\)#/media/Datei:SS_Pretoria_LOC_det.4a15908.jpg](https://de.wikipedia.org/wiki/Patricia_(Schiff,_1899)#/media/Datei:SS_Pretoria_LOC_det.4a15908.jpg)

5. 砲艦「SMS ヤーグアル」



https://de.wikipedia.org/wiki/SMS_Jaguar#/media/Datei:SMS_Jaguar_NH_47875.jpg

6. カウルがデザインした「紋章 (Wappen)」

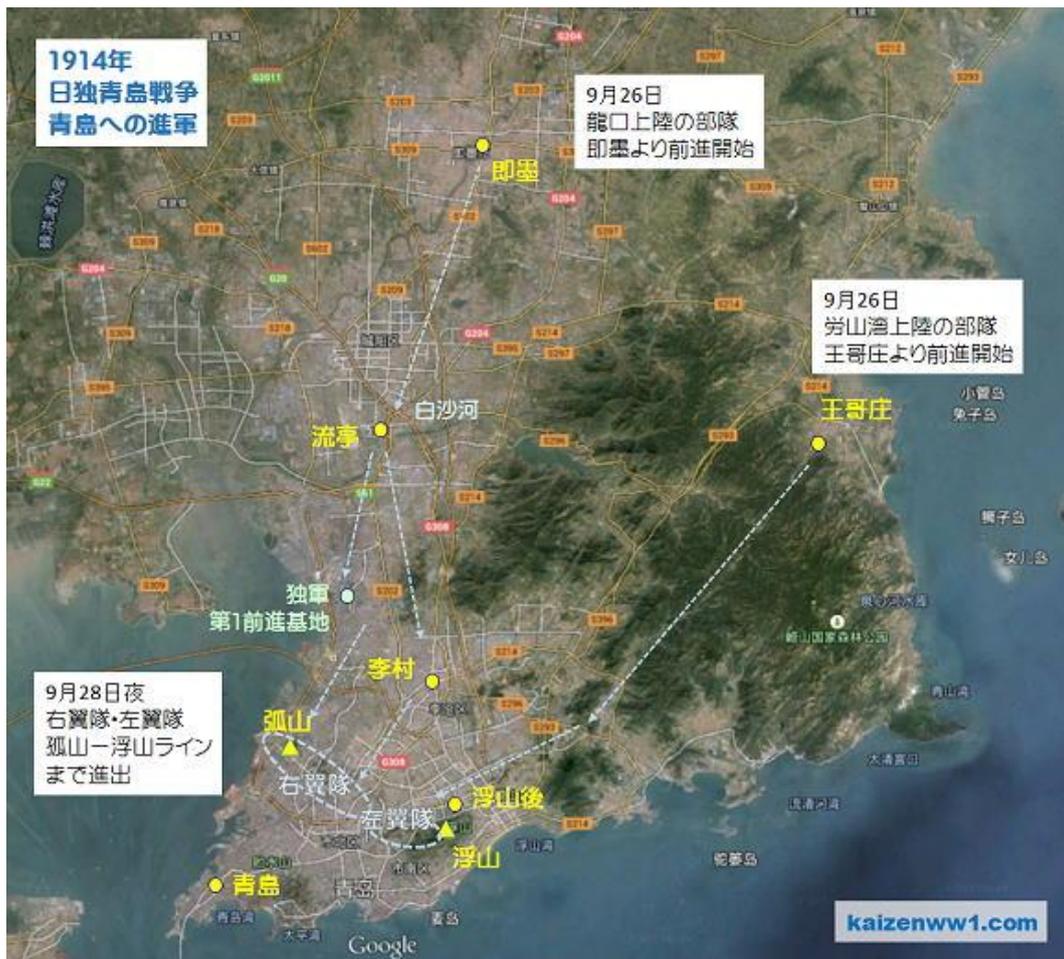


- 上の帯
„ZUR ERINNERUNG AN MEINE DIENSTZEIT (IN) CHINA UND JAPAN 1913-1916“
「1913-1916 年の中国・日本における私の兵役期間の思い出に」
- 帝国海軍旗の 上に Adler (鷲)、下に Drache (龍)
- 中央に カウルの写真
- 富士山と太陽。2本の煙突から黒煙をはいて進む「SMS ヤーグアル」。
- 黒字で „S.M.S. JAGUAR“ の文字。その下、中央に „ERICH KAUL“ の文字

[注61]

(画像は習志野市教育委員会提供)

7. 日本軍の青島進軍とドイツの青島要塞防衛設備（地図）



(1) 「カゼン視点から見る第一次世界大戦」より <http://www.kaizenww1.com/640qingdao.html>



(2) 「青島物語」より 地図出典: 大日本戦史第5巻
<http://tad.world.coocan.jp/Qindao/Story-20.html>

8. カウルの軌跡



[注21]

この『エーリッヒ・カウルの日記』の原題は „Tagebuch/ und/ meine Erlebnisse im Auslande/ Erich Kaul/ geschr. Tokio - Japan 1915“、すなわち『日記/および/私の外国における諸体験/エーリッヒ・カウル/1915年日本の東京にて記す』[/は改行を示す] となっています。「1915年に記す」とはどういうことかについては[注4]に書きましたが、冒頭から美しい筆記体で書かれていたのが1916年頃になると急いで書きなぐったように文字が乱れるところがあり、1915年の3月頃に戻って見直すと欄外に記号や書き込みがみられるので恐らく1915年3月初め頃に新しい「日記帳」に書き写したのだらうと思われます。カウルたちが習志野俘虜収容所に移るのは同年9月7日ですから浅草本願寺の東京俘虜収容所にいるときにあたります。„Tokio-Japan“と書いたのはその後習志野に移されるとは思ってもいなかったからでしょう。東京にいれば、本を買うのと同じように酒保を通して東京の丸善あたりからハードカバーの帳面を取り寄せることはそう難しいことではなかったに違いありません。

「日記」が生まれた日から始まるというのも奇抜ですが、家族、学校時代、徒弟時代、職の遍歴などを記憶をたどって語りながら、後の「SMSヤークアル」でのボイラーマンの任務との関係や収容所時代に届く手紙やはがきに名前のがる人たちが伏線として紹介されていて面白い方法だと思います。

冒頭にヘッセの詩を挙げているのも『日記』に重みを加え、自らの気負いを示すのに役立っているように見えます。しかし、詩人ヘッセは4つの「・・・すること」を列挙したあと、最終行で、ドイツ文法でいうところの「非現実話法の接続法第2式」を使って、「もし万一そんなことができる人がいるならば、その人は永遠に若くあり続けるであろう（私ヘッセはそんな人はいないと思うが）」というのです。この詩を読んだカウルは「だったら私がその4つの「・・・すること」をやってみせよう」と気負いを見せたのかもしれませんが、しかし、現実には厳しく、カウルの意に反してそうはいきませんでした。

当時のドイツはイギリスと軍備拡張を競い合い、列強との一触即発の緊張があったとはいえ、1870-71年の普仏戦争以来40年以上戦争がなく、カウルはいわば「戦争を知らない」世代に属していました。その彼が海軍に召集され、「極東の小ドイツ」青島の守備軍の交換要員として2年の予定でヴィルヘルムスハーフェンの軍港を出発します。このあとはわらべ歌の一節「行きはよいよい、帰りは怖い」を思い浮かべずにはられません。予定外の6年近い体験をして再びヴィルヘルムスハーフェンに戻ったときの軍港の様子にはカウルだけでなく私たちもぞっとします。この行きから帰りまでがこの『日記』の舞台になります。

2013年、カウルの子孫にあたる方から遺品の日記本体が習志野市教育委員会を通じて習志野市に寄贈されました。それを知った私はこの日記の翻訳をぜひ千葉県日独協会にやらせてほしいとことあるごとにお願ひしました。それは、いまは協会のホームページにアップされていますが、2015年にイムケ・リュース著『祖父ユリウス・リュースの1913～1920年における中国・南太平洋・日本での体験 — そして度重なる命拾いについて』（通称『祖父ユリウスの体験1914-1920』）を協会のドイツ語講習会の教材にして協会員8名と一緒に翻訳した有意義な時間が忘れられず、もう一度この『カウルの日記』を教材に勉強会を開きたいと思っていたからです。教育委員会の了解が得られて、教育委員会と千葉県日独協会とのあいだに翻訳についての協議書が交わされました。さて、それからが大変でした。

全文コピーされた日記を読むと軍隊、軍艦、戦闘などに関わる表現など、当然予想すべきだったとは言え、私を含めて参加者の誰もがそうした分野には縁がなく苦勞しました。幸い『Uボート、西へ！』や『情報と戦争』など多数の翻訳をされている並木均氏や艦船の造修業務に詳しい平岡幸秀氏から貴重な助言をいただくことができて助かりました。また、ごく簡単なSchwester（英語のsister）という語も「姉」なのか「妹」なのか、そして本文に頻繁に出てくる「エルゼ」と「ベルタ」のどちらがカウルのSchwesterなのか、どこを読んでも答えが出ませんでした。そこで、カウルが堅信の礼を受けたと書いているフルステンヴァルデ市の聖マリア聖堂教会に手紙とメールを出してきてみました。古い資料にあたることになってご苦勞をおかけしましたが、「エルゼ」が「姉」であることを教えていただくというようなこともありました。

表紙に挙げた7人の参加者の皆さんが最後まで熱心に取り組んでいただいたお陰でこの翻訳は完成しました。見過ごしたミスがありましたら、それは「監訳」の私の責任であります。

最後になって大変申し訳ありませんが、このような機会を与えていただきましたことを習志野市と同市教育委員会の方々に深く御礼申し上げます。とりわけ、文化財係長松浦史浩様と千葉千亜紀様には資料の作成から翻訳会の会場の手配に至るまでお世話をいただき心から御礼申し上げます。

また、この翻訳にあたっては上記の方々の他にも大勢の皆様にご助言、ご意見をいただきました。ここにお名前を挙げさせていただき心から感謝申し上げます（敬称略。ABC順）。

Moe Bärthlein、Stefan Bärthlein、Laura Bartke、Madelaine Benda、Jörg Hemmerling、星昌幸、片島辰一郎、小阪清行、Laura Kühl、萬谷衣加、新田春夫、Guido Strohfeldt、谷口律子、吉田正、Dr. Matthias Wittig。

エーリッヒ・カウルの日記

2020年9月30日 第1刷発行

2021年3月8日 第2刷発行

翻 訳 宗宮好和（監訳）
坂本宗秋・島崎富志子・田中 瑛・田中正延・
中村孝子・本橋 緑・渡邊邦美
（千葉県日独協会・ボトルシップ研究会）

発 行 千葉県日独協会
